研　究　紀　要

第 22 集

理科における六か年一貫カリキュラム実施記録と
その問題点　　—高等学校の場合—　……　理　科　……　1

全校アンケートの集計結果　……　研究調査部　……　27

自由教育運動から学ぶこと　……　松村正樹　……　33

社会科における学力をたかめるための一つの試み　……　鈴木　良　……　49

本校における要医療災害の実態と分析　……　中村ハツ子　……　59

中学校「特活・道徳」の時間の利用について
実践記録と反省　……　辻本美奈子・奈良重幸
藤川宣雄　……　71

1981

奈良女子大学文学部
附属中・高等学校

理科における六か年一貫カリキュラム実施記録とその問題点　―高等学校の場合―

加藤禎孝・中道貞子
林　良樹・藤川宣雄
藤田周子・屋舗増弘

Ⅰ．はじめに

本校では、昭和48年入学者より中高六か年一貫教育が逐年進行の形で始まった。理科においても、本校研究紀要第15集（1973）に発表した「理科における中学校・高等学校一貫学習指導計画案（第２報）」に基づいて一貫教育を実施してきた。中学校における実施記録とその問題点については、本校研究紀要第17集（1975）に発表しているので、今回は高等学校における実施記録とその問題点について報告したい。

本校の理科学習に配分された時間数は表１のようである。すなわち、高等学校においては、生物４単位（４・５学年）、化学３単位（４学年）、物理４単位（５学年）が必修となっており、６学年では、化学・理科一般のうちいずれかと、物理・生物のうちいずれかとを選択させることになっている。

（表　1）

学年	理科（1分野）		生物	地学	理科一般	合計
1（中学校）	2		2			4
2（中学校）	2		2			4
3（中学校）	2			3		5
	物理	化学				
4（高等学校）		3	2			5
5（高等学校）	4		2			6
6（高等学校）	〔2〕	（3）	〔2〕		（3）	5

＜注＞〔　〕のうちいずれか、（　）のうちいずれかを選択

なお、大学入試との関わりについて触れておくと、昭和54年度の入試から共通一次試験が始まった。この年はちょうど、逐年進行の形で進められてきた六か年一貫教育を受けてきた生徒が卒業する年であり、大学入試の方法の変更にともなって、本校六か年一貫教育も新たな問題を生じはじめた。具体的に述べてみると、共通一次試験で必要とされる理科の科目は、４・５学年に履習が済んでおり、６学年で履習する理科は、文系の大学に進学する者には、受験に必要のない内容のものである。しかも、全生徒が６学年で理科を５単位も履習しなければならないことは、生徒の大きな負担になっている。これは、他教科との時間配分の関係で現在のような形になったものであるが、是非改める必要のあるところである。また、大学入試方法の変更にともない、６学年での理科２単位の選択に、物理・生物の他、地学を昭和55年度から開講することになった。昭和55年度は、選択者数が少ないため、実際には開講されなかったが、昭和56年度には講座が成立した。６学

年に開講されている理科一般は、「文系のための理科」という性格をもつ科目であるが、これについては後述することにする。

次に、文部省の指導要領と本校カリキュラムとの関係について触れておきたい。現在の六か年一貫教育の理科の学習内容は、中学校は昭和47年度から、高等学校は昭和48年度から実施された指導要領に基づく理科の学習内容を、6か年間に終えるよう、独自に配列したものである。しかし、中学校は昭和56年度から、高等学校は昭和57年度から新しい指導要領が実施されようとしている。これにともない、本校の理科学習に配分される時間数も、表2のように変更される（中学校は56年度から3学年一斉に、高等学校は57年度から逐年進行の形で実施)。現在の六か年一貫カリキュラムでは、5学年までの理科が必修であったため、本校独自のカリキュラムも比較的組みやすかったが、表2のカリキュラムでは、4学年の理科までが必修で、高校における物理・化学・生物・地学は選択となる。また、中学校での理科の学習時間も減るため、理科の必修科目に配分される時間が、中高あわせると、現在の24時間から、15時間に減少するので、独自のカリキュラムが非常に組みにくくなった。以上のような事情から、六か年一貫カリキュラムは、昭和53年度入学者をもって、打ち切らざるを得なくなった。六か年一貫カリキュラムの問題点をまとめ、その反省をもとに、新たなカリキュラムの中でも、その主旨を生かしてゆきたいと考えている。

（表　2）

学年	第1分野		第2分野		合計
1（中学校）	1.5		1.5		3
2（中学校）	2		2		4
3（中学校）	2		2		4
4（高等学校）	理　科　Ⅰ				4
	4				4
	物理	化学	生物	地学	
5（高等学校）	<5>	〔4〕(5)	〔4〕<5>	(5)	4
6（高等学校）					0~10

<注>〔　〕のうちいずれか選択、
<　>・(　)のうちいずれか、
または社会を選択

Ⅱ．物　理

物理の指導計画案を昭和48年に本紀要において発表したが、その後、大学入試制度に変更があったため、一貫学習が実施された昭和52年よりすでに、内容の配列にいくつかの修正を加えた。すなわち、5学年において、物理Ⅰの内容はすべてとり込むことにし、これに物理Ⅱの内容を1時間分入れることにした。（表1にあるように、5学年で4時間、6学年で2時間である。）5学年に入れた物理Ⅱの項目は、「円運動」、「分子運動」、「電流と磁界」、「電磁誘導」（ただし、定性的な扱い）である。その理由は、「円運動」は「単振動」とともに、また「分子運動」は「熱」と同時に学習した方が理解しやすいと判断したからである。また、「磁界」を入れたのは、「電界」と並べて、「場」についての学習を考えたことのほかに、中学時代の理科Ⅰから、これらの項目をとり除いているからである。したがって、指導計画案の中で、6学年に入れてあった「波動」は「光波」を除いて、5学年で学習することになった。実施記録は昭和55年のものであるが、昭和52年から54年までのものについても、ほとんど同じである。

5年間の授業をふりかえってみて、次のような点に問題があると考えられる。

(1) 生徒実験を数多くとり入れているため、全体に時間不足で、10時間ほどの補習をしなければならない。また、問題演習のための時間がじゅうぶんでない。

(2) 5学年の物理は必修科目であるが、理科系志望者でない者にとって、4時間の必修は多すぎるし、逆に、6学年の2時間は少なすぎる。

(3) 効果的な一貫学習を妨げるものは、結局、指導要領、大学入試制度および教科の時間配分の不都合である。

なお、実施記録表の備考欄で「プリント」とあるのは、演習プリントであり、波動の分野で多く使った。「VTR」はNHK通信高校講座のもので、力学の重要な法則の学習にとり入れた。「実験書」は奈良県理化学会物理部会編の「物理Ⅰ実験書」にある実験である。また、教科書は5学年で、物理Ⅰと物理Ⅱの2冊を持たせた。

物理実施記録

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
5	1. 運動と力〔33〕			
	ア. 物体の運動(12)	速　度		
		加速度		
		等加速度運動	㊥落下運動	プリント
			㊥斜面上の球の運動	
		力の性質		
	イ. 運動の法則(14)	慣性の法則	㊦等速運動	
		運動の第2法則	㊥加速度と力	VTR
			㊥加速度と質量	
		落下運動		
		放物運動		プリント
	ウ. 運動量 (7)	運動量と力積		
		運動量保存法則	㊥球の衝突と運動量	VTR
			㊥台車の衝突と運動量	実験書
		はねかえり係数	㊦球のはねかえり	
	2. エネルギー〔20〕			
	ア. 力学的エネルギー(7)	仕事と仕事率		
		運動エネルギー		
		重力の位置エネルギー		
		弾性エネルギー		
		力学的エネルギー保存法則	㊥力学的エネルギー保存法則	VTR 実験書

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
5	イ．熱と仕事(7)	熱現象		
		状態方程式		
		熱と仕事	㊥落下させた銅の発熱	実験書
		熱力学第１法則		
	ウ．分子運動(6)	気体の分子運動		
		２乗平均速度		
		内部エネルギー		
		断熱変化		
	3．波　動〔26〕			
	ア．円運動・単振動(8)	円運動		
		向心力	㊥向心力と周期	
		単振動	㊫円運動の投影	
		ばねふりこ、単ふりこ	㊥単ふりこと g の測定	
	イ．波　動(8)	波の進み方		プリント
		波の方程式		
		波の重ねあわせ	㊫ウェイブマシーン	プリント
		定常波	㊥弦の定常波	プリント
		波の性質	㊫水波の観察	プリント
		ホイヘンスの原理		プリント
	ウ．音　波(10)	音　波	㊫音とついたての振動	
		音の性質	㊥クインケ管の実験	プリント
		ドップラー効果	㊫運動する音源	
		弦と気柱の振動	㊫弦と気柱の音	プリント
		共　鳴	㊥気柱共鳴	実験書
	4．電界と磁界〔30〕			
	ア．電　界(15)	クーロン力	㊫電気どおしの力	
		電界と電位	㊫電界中の電荷	スライド
		静電誘導、誘電分極	㊫はく検電器と誘電体	
		コンデンサー	㊥電気量と電圧の関係	実験書
	イ．電流と磁界(7)	オームの法則		
		ジュールの法則		
		磁　界	㊫鉄粉による電気力線	スライド

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
5		電流による磁界	㊥直流電流による磁界	
		磁界中の電流の力	㊥電磁力の測定	
	ウ．電磁誘導(3)	レンツの法則	㊥誘導電流の向き	
	エ．電子、放射能(5)	電　子	㊦陰極線の実験	
		電気素量		
		放射線	㊦霧箱とGM検出器	
			㊥半減期のモデル実験	実験書
6	**5．電気回路〔17〕**			
	ア　直流回路(5)	電　池	㊥電池の起電力と内部抵抗	
		電流計、電圧計		
		キルヒホッフの法則	㊦電位差計	
			㊥ホイートストンブリッジによる抵抗測定	
	イ．電磁誘導(6)	磁束密度、透磁率		
		ローレンツ力	㊦電子の円運動	
		インダクタンス		
	ウ．交流回路(5)	交　流	㊦交流の発生	
		交流回路	㊥コイルのインダクタンス測定	
	エ．電気振動(1)			
	6．固体のつりあいと回転運動〔12〕			
	ア．固体のつりあい(3)	力のモーメント		
		平行力、重心		
	イ．固体の回転運動(9)	慣性力		
		万有引力		
		慣性モーメント	㊥円板の回転運動	
		角運動量	㊦力積のモーメントと角運動量	
		回転エネルギー	㊦斜面上の円筒	

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
6	7. 光と原子〔25〕			
	ア. 光　波(11)	光　速		
		反射と屈折		
		干　渉	㊙ヤングの実験	スライド
			㊙ニュートンリング	
			㊥薄膜の干渉縞の観察	
		回　折	㊙スリットの回折縞	スライド
			㊥回折格子と波長測定	
		偏　光	㊙偏光板、複屈折	スライド
		電磁波		
	イ. 原子の構造(14)	電　子		
		X　線	㊙X線の透過性	
		光電効果	㊙紫外線とはく検電器	
		ボーアの原子模型		
		電子波		
		放射線		
		原子核		
		核反応		

（㊥は生徒実験、㊙は教師実験を示す）

Ⅲ. 化　学

化学は第4学年（3単位　必須）と第6学年（3単位　選択）で履修する。第4学年では主に「化学Ⅰ」の内容を、第6学年では「化学Ⅱ」の内容を行うこととしたが、化学平衡、炭素化合物等の内容の取り扱いに見られる如く、1つの項目が化学Ⅰ、化学Ⅱの両方にまたがり取り上げられており、共通一次テスト、教科書の編集においても、その境界が明確でないのが現状である。このカリキュラムにおいては、化学平衡と反応の速さについては第4学年に、炭素化合物については第6学年でそれぞれまとめて扱うこととし、重複を避けた。特に第4学年で化学平衡の概念が生徒の中に確立されていることは、第6学年での学習をスムースなものとしている。

この6か年一貫カリキュラムでは第3学年でモルを導入し、原子量、分子量、化学反応式とモルについては学習が終っているで、第4学年では「物質の状態変化」から始められ好都合である。一方、イオンについては第3学年での学習が充分とは言えないので、特に「酸・塩基」の所では、初歩的なことから導入する必要があった。イオンについては系統立てて指導する時

間をとる必要を感じている。

このカリキュラムの展開に当たっては生徒が物質に触れる機会を出来るだけ多くしたいと考え、実施記録に見られるように多くの実験・観察を組み込んだ事が1つの特徴である。しかし、このカリキュラムも種々の問題を含んでおり、実施してみてのその問題点を上げてみよう。

ア．このカリキュラムの作成にあたって、化学としては4・5・6学年各2単位時間ずつの継続学習を希望した。ところが他教科との関係から4・6学年各3単位時間という結果になってしまった。総時間こそ変っていないが、間に一年のブランクがあるということは生徒に大きな不利益をもたらしている。特に共通一次という入試制度が導入されてから不満を訴える生徒が多くなった。4学年の必修の化学のみで終る生徒からは、「受験までに2年のブランクがあるのは不安だ。」「4学年の学習で化学Ⅰの範囲が完全に終らない。」などの声がある。後者の手だてとして、54年度は化学Ⅰで受験する生徒には、6学年でも化学をとるように指導したが、生徒の負担が大きいように思われたので、55年度は53年度と同様、理科一般の中で補充することとした。また6学年で化学を選択する生徒からは、「5学年でまったく化学を学習しないので、6学年の学習を始める前に化学の総復習に多くの時間を費やす。」の声がある。

イ．授業時間数が不足している。

4学年の化学では前にも述べたとおり、中学課程で学習内容（文部省カリキュラムでの）が多量送り込まれていること、また化学Ⅱの平衡が下りてきていることから、内容が多すぎる。よって、毎年7～8時間分を残して、6学年の化学へ送る結果となっている。

6学年の化学では、総時間数105時間というたてまえになっているが、過去4年間、実授業数は70時間を切っており、中高併設ということで、行事で授業を欠くことが多いし、特に6年は模試などで欠ける機会が多い。

55年度を例にして実状を示すことにする。

〔必要時間数〕本カリキュラムの必要時間数　77時間
　　4年のやり残し分　　6時間　　計　83時間
　　（2．物質の状態　　ウ．液体　希薄溶液の理論、コロイド）

〔実授業数〕68時間　　12月末まで　　60時間
　　共通一次以後　8時間

〔不足時間数〕15時間……放課後および夏休みに補習
　　（錯体　5時間　　芳香族化合物　10時間）

また、生徒の精神的負担を考えて、12月末までに一応、全範囲を終了することを目的に授業を進めた。よって、備考欄の※の実験は共通一次以後に実施した実験である。

ウ．問題演習を全くやっていない。

"問題演習は家で自分でやれる。実験は学校でしかできない。""物質や現象に触れなくて、何んで化学か。"という自論のもとに、できるだけ実験を増すように努力した。特に4.エ（無機各論）では時間数のこともあり、プリント学習に終ったが、できる限り物質に触れさせるよう努めた。しかし、実際の入試にはまだまだ演習をやっていた方が有利な出題がみられる。

"教師の自己満足ではないか。"という疑問にさいなまれている。

このような結果になったのは文部省指導要領の全範囲を6か年一貫カリキュラムに収めようとしたことにある。特に必修の化学が生徒にとってゆとりのある楽しいものにするために、今後、さらに内容の精選と指導の工夫を心がけたい。

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
4	**1. 周期表と物質の性質(20)**			
	ア. 元素の周期律(7)	周期律と元素の分類、原子の構造 周期表と核外電子		
	イ. 化学結合(6)	イオン結合とイオン結晶 共有結合と分子結晶 金属結合と金属結晶 共有結合半径とファンデルワールス半径	㊙イオン結晶、分子結晶のモデルを観察する。	
	ウ. 周期表と物質の性質(7)	不活性ガス アルカリ金属 ハロゲン 第3周期の元素	㊙ナトリウムの性質と反応 ㊙ハロゲンの性質と反応 ㊙第3周期の主な元素の性質	
	2. 物質の状態変化〔20〕			
	ア. 気体の性質(7)	気体の圧力と分子運動論 ボイル・シャルルの法則 理想気体の状態方程式 実在気体 気体の分子量 混合気体と分圧	㊙ドライアイスを使ってCO_2の分子量を求める。	
	イ. 三態の変化(4)	蒸気圧と蒸気圧曲線 相平衡 状態変化と熱、分子運動		

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
4	ウ．液　体(9)	溶解と分子・イオン		
		溶解平衡		
		気体の溶解		
		希薄溶液の性質		
		沸点上昇と凝固点降下	㊥凝固点降下法により分子量を求める。	
		溶質の分子量		
		浸透圧		
		コロイド溶液とその性質	㊥コロイドの観察 ㊥水酸化鉄コロイドを作って性質を調べる。	T.V.「コロイドの性質」
	3．化学反応〔65〕			
	ア．化学反応とエネルギー(20)	反応熱と内部エネルギー		
		熱化学方程式		
		ヘスの法則	㊥ヘスの法則	
		結合エネルギー		
		化学反応の速さ	㊥反応の速さを調べる。（濃度、温度）	ループフィルム（反応速度・活性化エネルギー）
		律速段階		
		活性化エネルギー		
		化学平衡		
		平衡の移動	㊥$N_2O_4 \rightleftarrows 2NO_2$ の平衡移動（圧力、温度）について観察する。	
		触　媒	㊥H_2O_2の分解と触媒はたらき	
	イ．酸・塩基反応(20)	酸・塩基の性質	㊥濃い酸とうすい酸の性質のちがい。	
		酸・塩基の分類		
		酸・塩基の当量と規定度		
		中和と定量、滴定曲線	㊥食酢の中和滴定	
		電離度と酸定数	㊥酸溶液の電気伝導性を調べる。	
		水素イオン濃度とpH	㊥酸の濃度とpHについて試験紙で調べる。	

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
4		塩と加水分解 酸・塩基の考え方の拡張	㊙塩の水溶液の pH を調べる。	
	ウ. 酸化還元反応(25)	酸化・還元の意味 酸素の授受、水素の授受、電子の授受 金属のイオン化傾向 電　池 半電池反応 標準酸化還元電位 電気分解とファラデーの法則 金属製錬 食塩水の電解 酸化剤と還元剤	㊙金属樹の観察 ㊙ボルタの電池について ㊥ダニエル電池を作る。 ㊥半電池と電圧の関係を調べる。 ㊥水の電気分解を電気量と生成物を定量的に調べる。	T.V. （銅の電解製錬、アルミニウムの電解製錬、食塩水の電解）
6	**4. 物質の構造と性質〔29〕**			
	ア. 原子の構造(3)	原子モデル 電子のエネルギー準位		
	イ. 化学結合(4)	共有結合の方向性 化学共鳴 原子半径		
	ウ. 分子の構造と性質(2)	分子間力 極　性 水素統合		
	エ. 原子の電子配置と物質の性質(20)	典型元素とその化合物	㊙SO_2の発生とその性質 ㊙H_2Sの発生とその性質 ㊙NOとNO_2 ㊥アルカリ土類イオンの反応 ㊥両性元素の反応	プリント学習
		遷移元素と錯体 遷移元素とその化合物	㊥ニッケル錯体の合成 ㊥鉄イオンの反応	※

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
6			㊟銅・銀イオンの反応 ㊟金属イオンの系統分離 ㊟陰イオンの反応 ㊟金属イオンのペーパークロマトグラフィー	※
	5. 炭素化合物と高分子化合物〔48〕			
	ア. 炭素化合物の構造と反応(29)			
	① 鎖状化合物	炭化水素	㊟分子模型を用いて分子の形を知ると共に異性体の関係を学習 ㊟メタン・アセチレンの生成とその性質	
		アルコールとエーテル アルデヒドとケトン	㊟ヨードホルム反応 ㊟アルデヒドの生成とその性質	
		カルボン酸とエステル 油脂とろう	㊟エステル化とケン化 ㊟石けんの合成	※
	② 環状化合物 芳香族化合物	炭化水素 フェノール類 アルデヒド・カルボン酸 ニトロ化合物とアミン	㊟フェノール類の性質 ㊟サリチル酸の反応 ㊟ニトロベンゼンの合成 ㊟アニリンの合成とその性質 ㊟アゾ染料の合成	
	その他の環状化合物	シクロパラフィン系複素環状化合物		
	③ 構造の決定			
	イ. 天然高分子化合物の構造と性質(10)			
	① 有機高分子化合物	炭水化物	㊟炭水化物の性質	※

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
6	② 無機高分子化合物 ウ．合成高分子化合物の構造と合成(9)	タンパク質	㊥タンパク質の性質	
		合成繊維	㊦界面重合によるナイロンの合成	㊦
		合成繊維	㊥レゾルシン樹脂の合成	※
			㊥ポリビニルアセタールの合成	※
			㊥ポリスチレンの合成	※
		ゴム		

㊦は教師実験、㊥は生徒実験を示す。
備考欄の※は三学期に実施した実験。

Ⅳ．生　物

(1) 指導展開について

本校6か年一貫カリキュラムにおいて、生物Ⅰを学習するのは4・5学年、生物Ⅱは選択で6学年で履習することになっている。生物ⅠおよびⅡは次のような形で実施された。

① 生物Ⅰについて：生物の生命現象を個体の生活という観点でとらえ、系統的な展開を行った。

② 生物Ⅱについて：指導要領では「生物の進化」、「生態」、「生命現象と分子」の3単位から成り立っているが、本校6か年一貫カリキュラムでは2単位になっているので、「生命現象と分子」の単元を除いた2単元を授業内容として展開した。

生物Ⅰは細胞のレベルで生命現象をとらえさせるように配慮したが、時間数の関係で、エネルギーの利用についてはとり扱っていない。生物Ⅱの「生命現象と分子」は、1学期～夏休み中に、希望者を対象に補習をすることで補っている。3単元中、「生命現象と分子」を除いた理由は、その内容が高度で、高校生に学習させるべき範囲を超えるものと判断をしたからで、新指導要領では省かれた内容でもある。

6か年一貫カリキュラムの中学校での学習内容は、1・2学年で「生物の分類」、「生物の環境」である。低学年の段階で、実際の生物に触れる機会をできる限り多くもたせている。そのねらいは、いろいろな生物とそれをとりまく自然に対する知識理解と愛着心を養うこと。および、4・5学年の段階での学習の基礎をつくることである。このカリキュラムは、高校段階における生理的内容の学習に有効であると考えているが、上記のとおり、中学段階で生物の分類、

生態に重点をおき生理的内容は十分行っていない。従って、高校の教科書を採択する際には、この点を考慮した。また、カリキュラムの展開において、実験・観察を通じて、生物をより深く理解すると同時に、探求の過程を重視するように努めた。実験は生徒実験を主に考え、授業時間内ではおさまらない長期間にわたる実験（例　ハエの交配実験など）の場合には、昼食後、または放課後の時間をあてた。

(2) 問題点について

① 現在のカリキュラムでは、生態系、進化の内容を6学年に学習することになっている為、生物Ⅱを選択する者以外の生徒は中学校の段階で終ってしまう。2学年の「生物と環境」の中で、基本的内容を理解させなければならないが、発表段階からみて、その指導内容に限界がある。

② 配当時間数に対して、内容が広範囲である為、ゆとりある授業が出来にくい。教科内容の精選と系統化をさらにはかる必要がある。

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
4	1. 個体の形成〔59〕			
	ア. 細　胞(14)	細胞の発見の歴史		
		細胞の構造と機能	㊥細胞の観察	スライド
		顕微鏡とミクロメーター	㊥ミクロメーターを用いた実習	※実習帳
		体細胞分裂		
		染色体	㊥タマネギの根端の生長点を用いた細胞分裂観察	スライド
		減数分裂		スライド
	イ. 生　殖(10)	生殖法の種類（無性生殖、有性生殖）		
		植物の生殖のしくみ	㊥クラマゴケの大胞子小胞子の観察	スライド
		生殖細胞とそのできかた（胚のう、花粉形成精子、卵形成）		
	ウ. 発　生(14)	動物の受精と初期発生（ウニ、カエルの発生）	㊥ウニの卵割観察（固定標本）	映画「ウニの発生」スライド
		ヒトの発生		VTR「発生」
		後期発生と器官形成		映画「オーガナイザー」
		発生分化の機構（オルガナイザー）		スライド
		再　生		
		動物の変態		
	エ. 成　長(1)	動物の成長		

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備　考
4	オ．遺　伝(20)	メンデルの法則		
		ショウジョウバエの交配実験説明	㊥ショウジョウバエの交配実験（単性雑種の遺伝、両性雑種の遺伝、伴性遺伝）	プリント
		エサ作り		
		実験結果のまとめ方		
		遺伝子の相互作用		
		遺伝による性決定		
		伴性遺伝と限性遺伝		
		連鎖と交さ		
		交さ率と染色体地図		プリント
		だ液腺染色体	㊥だ液腺染色体の観察	※実習報
		細胞質と遺伝		
		変　異		
		遺伝子の本体		プリント
		ＤＮＡのはなし		映画「遺伝−DNAの働き−」
		ＤＮＡの複製とタンパク質の合成		
	2. 個体の生活〔67〕			
	A. 植物個体の生活のしくみ			
	植物の栄養(13)	細胞への水の出入り		
		浸透圧		
		原形質分離	㊥原形質分離、原形質復帰の観察	
		能動輸送		
		細胞への物質の出入り		
5		光合成の歴史		
		光合成反応のしくみ	㊥ペーパークロマトグラフィー法による緑葉色素の分離実験	映画「光合成」
		葉緑体のつくり		
		植物の生活と光合成		
		窒素同化作用	㊥気泡計算法	
	B. 動物個体の生活のしくみⅠ			
	ア．動物の栄養と消化(5)	従属栄養性について		
		消化の方法と消化器官		

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
5		三大栄養素の消化と吸収 酵　素 体液による栄養素の運搬	㊥だ液アミラーゼによるデンプンの消化実験（酵素の活性とまわりの条件について検討する。）	VTR「食物のゆくえ」
	イ．循　環(8)	体液の組成と機能 血液の凝固 抗原抗体反応 血液型 免　疫 循環器の構造と機能	㊥カエル・ヒトの血球観察	
	ウ．呼　吸(9)	呼吸器と呼吸運動 血液によるガスの運搬 解糖と酸素呼吸	㊥呼吸による酸素消費量の測定実験 ㊧発酵実験	映　画「細胞内の呼吸」
	C．植物の反応(5)	調節のしくみ 植物ホルモン 光周性	㊥オーキシンによるマカラスムギの子葉鞘の伸長生長実験	VTR「植物の成長ホルモン」
	D．動物個体の生活のしくみII			
	ア．感　覚(6)	視覚・聴覚・平衡感覚（筋紡錘も含む） 臭覚・味覚・皮膚感覚 ウェーバーの法則	㊥ウシの眼球の観察 ㊧ウェーバーの法則の実験	
	イ．神　経(8)	ニューロンと神経系 興奮の伝達 脊髄と反射 大脳・脳幹・小脳 自律神経系 行動のしくみ	㊧膝蓋腱反射実験	プリント
	ウ．ホルモン(4)	ホルモンによる調節		映画「アマガエルの体色変化ホルモン」
	エ．調節のしくみ(4)	体液組成を一定に保つしくみ		

学年	項　　目	内　　容	実験・内容	備考
5		水・塩類の濃度を一定に保つしくみ		プリント
		血糖量の調節のしくみ		
	オ．排　出(5)	排出器の構造と機能		
		動物の種類と排出器の種類		スライド
		ヒトの排出のしくみ		プリント
		オルニチン回路		
6	3．生　態〔24〕			
	ア．生物と環境(4)	作用・反作用		
	イ．生物の集団(12)	個体群の生態		
		生物の相互作用		
		生物群集		映画「地球と生命」
		食物連鎖	㊥池の生態系	
		遷　移	・池のプランクトンの観察	
	ウ．生物系の構造と機能(8)	生態系とは		
		生態系における物質循環とエネルギーの流れ	・溶存酸素量の測定	
		日本の生態系	㊥分解者（土壌動物）の観察	スライド
		生態系の平衡と自然保護		スライド
	4．生物の進化〔26〕			
	ア．生命の起源(6)	生物起源論の歴史		
		生物出現の道すじ	㊥コアセルベートの観察	
		原始生物における進化	㊥キイロタマホコリカビの観察	
	イ．生物の変遷(10)	生物界の歴史的変遷		
		生物界の地理的変遷		
		生物の系統		スライド
		人類の進化		スライド
	ウ．進化のしくみ(10)	進化説の源流		映画「ガラパゴスの生物」
		進化にみられる傾向		
		進化のしくみ	㊥味旨の遺伝調査	

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
6			㊥ビーズ玉による集団遺伝のモデル実験	
	5. 生命現象と分子〔17〕			
	ア．物質交代とエネルギー交代(6)	生物体におけるエネルギー変換 ＡＴＰの分子構造とはたらき 呼　吸 光合成	㊙脱水素酵素の実験	
	イ．生物体を構成する高分子(6)	生物体を構成する高分子化合物 タンパク質の分子構造と性質 核酸の分子構造		
	ウ．遺伝子と形質の発現(5)	遺伝子の物質的基礎 形質発現のしくみ 遺伝情報の伝達		

㊥は生徒実験、㊙は教師実験を示す
※実験帳　奈良県生物教育会編「生物の実験」を使用

V．理科一般

はじめにも述べたように、現在のカリキュラムでは、6学年において、全生徒が理科5単位を履習しなければならない。そのため、理科一般は、主として、共通一次を除く大学入試で理科を必要としない生徒を対象とした「文系のための理科」の性格をもっている。

理科一般3単位の内容の決定に際しては、科目が1つに偏らないように配慮し、原則として3科目1単位ずつ実施するようにした。物理・化学・生物・地学4科目中、どの3科目を選ぶかは、各教官の他学年の担当のしかたと関連して決定した。理科一般が開講された昭和53年度からの実施の概要を示したものが表1である。

（表　1）

年　　度	実施科目	内　　容	備　　考
昭和53年度	物　理 化　学 生　物	物理の歴史 化学Ｉの補充（主に有機化学） 生物Ｉの内容に関する実験、演習	プリント 教科書 教科書、プリント
昭和54年度	物　理 生　物 地　学	物理の歴史 生物Ｉの演習 生活と地学	プリント 問題集 教科書、プリント
昭和55年度	化　学 生　物 地　学	化学Ｉの補充（主に有機化学） 生物Ｉの演習 生活と地学	教科書 問題集 教科書、プリント

理科一般を実施してきての大きな問題は、生徒が他に履習するものがないのでという消極的な理由から、理科一般を履習する現状から生じてくると考えられる。各担当者は、科学史をとりあげたり、実験を多くとり入れたりして興味をもたせようと試みてきたが、充分な効果があがらなかった。受験をひかえた生徒を対象に、受験に直接関わらない内容で、しかも、文系の生徒には苦手な者の多い理科を教えることの困難さを痛感している。

次に、３年間に実施した学習内容について述べておきたい。

(1)　53年度　理科一般（物理分野）

物理でも、その歴史なら文系の生徒にとって抵抗なく受入れられるであろうということから、オリエンテーションの折に「物理では歴史をやる。」と説明した。ところが持時間の都合により、化学の教師が担当しなければならないはめになった。１つのことについて詳しくやるより、広く浅くの方が聞く側にとっても、授業をする教師にとっても良いのではないかと思い、まず３項目を選んだ。"大気圧"と"光"は身近な現象という意味でとりあげた。"電流と磁界"は６か年一貫カリキュラムで、中学および５学年の物理でその項目がなく、６学年で物理をとらない生徒は全く学習しないことになる。そこで、ここで文部省カリキュラムの中学課程で学習する程度のことをやることにした。

歴史上で行なわれた実験の再現となると、どうしても教師実験が多くなる。ところが入試が近づくにつれて、生徒の授業離れがみられるようになってきたので、しだいに生徒実験をふやす方向へと移行させた。ふり返ってみると化学サイドの物理の歴史になってしまっていることを反省している。

参考文献　「ＨＯＣＳ物理」渡辺正雄訳　　講談社
「ＰＳＮＳ教養の物理科学」茅誠司　仁田勇監修　　東京化学同人

「科学思想のあゆみ」シンガー著　岩波書店
「バナール　歴史における科学」鎖目恭夫訳　みすず書房

学年	項目	内容	実験・観察	備考
6	1. 大気圧〔7〕			
	ア. 真空の問題(2)	アリストテレス	㊙ 落下速度と密度の関係（アリストテレスの議論）	
		ガリレオ		
		ベルチ		
		トリチェリー	㊙ トリチェリーの真空	
	イ. 流体のつりあい(2)	パスカル	㊙ 水圧機	
			水の圧力	テレビ
	ウ. 大気の重さ(2)	パスカル	㊙ 液体の平衡	
			㊙ パスカルの川の中の実験	
		ピュイードードームの実験		
		ゲーリッケ		
		ボイル		
	オ. 大気圧存在の実感(1)		㊙ 大気圧の諸実験	
			㊙ 減圧蒸留	
			真空の世界	岩波映画
	2. 光〔7〕			
	ア. 17世紀以前(2)	視覚		
		鏡ー反射		
		レンズー屈折	㊥ 水中の物体の浮き上り	
		プトレマイオス		
		ケプラー		
		スネル		
		デカルト		
	イ. 粒子説と波動論(2)	ニュートン		
		フック		
		ホイヘンス		
	ウ. 干　渉(2)	干渉の原理　ヤング	㊥ 二重スリット	
		回折格子	㊙ レーザー光を用いて	
			二重スリットの間隔	
			波長の決定	
			生地の糸の間隔	
			簡易分光器の製作	工　作
	オ. 結晶のX線解折(1)			

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
6	**3. 電流と磁界〔7〕** ア. 背　景(1)	ガルバニー ボルタ		
	イ. 電流による磁界(2)	エルステッド	㊥電流による磁界	
	ウ. 電流が磁界より受ける力(2)	アンペールの法則 電流による磁界の強さ 電流による磁化作用 電流計	㊥電流が磁界より受ける力	
	エ. 電磁誘導(2)	アラゴ ファラデー	㊥電磁誘導	

(2) 54年度　理科一般（物理分野）

対象とする生徒のほとんどが文科系志望者であるので、物理学史を扱うことにしたが、時間の関係で、力学の歴史と光の歴史に限った。力学の基礎はひととおり5学年で学習しているので、それを歴史的に再考察させたかった。光は、その本質についての歴史的変遷が興味深いので、関心をよせることができると期待したが、準備不足もあって、成功したとはいえない。なお、光の後半を光量子論に続けず、相対論に結びつけたのは、この年がアインシュタインの生誕100年の年であったからである。

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
6	**1. 力学の歴史〔10〕** ア. ガリレオ(6)	アリストテレスの運動論 アリストテレス以後 ガリレオの業績 ガリレオの運動論	㊥ガリレオの斜面の実験	
	イ. ニュートン(4)	ニュートンの業績 万有引力の発見 ニュートン以後		
	2. 光と相対論〔13〕 ア. 光の本質(7)	粒子説と波動説 光速測定の歴史		

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
6	イ．特殊相対論(6)	光の干渉と回折 マイケルソンの実験 慣性系 アインシュタインの相対性原理 質量とエネルギー 原子力 アインシュタインの業績	㊙干渉・回折実験 ㊙マイケルソンの干渉計	VTR

(3) 理科一般（化学分野）

化学Ⅰの範囲で、4学年の化学でやり残した部分をここでおこなうこととした。最初、生徒実験をもっと組込む予定であったが、意外に講義に時間がかかってしまった。個々の内容は6学年の化学の内容ほど深くはないが、脂肪族炭化水素のところで合成高分子化合物に触れたり、アルコールのところで糖の話も、というように挿入が多くなった。ほとんどの生徒は、今後化学実験をすることはまずない。それだけにもっと実験させたかった。

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
6	1. 溶　液〔5〕			
	ア．コロイド(3)	溶液とコロイド コロイドの性質	㊙コロイドの性質	
	イ．希薄溶液の性質(2)	沸点上昇 凝固点降下 浸透圧		
	2. 炭素化合物〔17〕			
	ア．鎖状化合物(10)	炭化水素	㊙分子の構造モデル実習 ㊙飽和炭化水素と不飽和炭化水素	
		アルコールとエーテル アルデヒドとケトン	㊙アルコール・アルデヒドの性質	
		カルボン酸とエステル 油　脂		

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
6	イ．芳香族化合物(5)	炭化水素 フェノール カルボン酸 ニトロ化合物 アミン	㊥フェノールの性質	
	ウ．生活と化学(2)		㊥石けんの合成 界面化学	映画

(4) 53年度　理科一般（生物分野）

生物Ⅰの内容について、4・5学年に実施できなかった実験を中心に、生物Ⅰの復習・演習を行なった。

学年	項　　目	内　　容	実験・観察	備考
6	1. 物質交代とエネルギー交代〔12〕			
	ア．細　胞(3)	顕微鏡の使い方 細胞の構造 （問題演習）	㊥顕微鏡の使い方 ㊥いろいろな細胞の観察	プリント
	イ．同　化(4)	光合成 （問題演習）	㊥溶存酸素の測定 （光合成と呼吸）	プリント
	ウ．異　化(5)	呼　吸 発　酵 （問題演習）	㊥酵母菌によるアルコール発酵	プリント
	2. 恒常性の維持〔6〕			
	ア．動物の受容体(1)	視　覚	㊥遠点・近点の測定	
	イ．神経系(3)	屈筋反射 （問題演習）	㊥脊髄ガエルの実験	
	ウ．調節のしくみ(2)	植物ホルモン 動物ホルモン （問題演習）		VTR「植物ホルモン」
	3. 種族の維持〔7〕			
	ア．生　殖(3)	植物の世代交代 （問題演習）		スライド
	イ．発　生(4)	動物の発生 発生のしくみ （問題演習）		

(5) 54・55年度　理科一般（生　物）

文系の生徒のための生物を頭初考えていたが、次の理由で、生物Ⅰの問題集を用いて、演習を行った。

① 理科一般を受講している生徒の大部分は、生物Ⅰを受験科目にとる。

② 6か年一貫カリキュラムで、問題演習を行う時間のゆとりがほとんどない。

③ 問題演習は生物Ⅰの内容の理解と整理に有効である。

(6) 理科一般（地学分野）

地学分野は、自然と人間のかかわり方を考えるという観点から、次のような指導計画のもとに授業を行った。各単元の指導の要点は、次のとおりである。

1. 自然環境

① 現在の地表の自然環境は、長い地球の歴史のなかで形成されてきたものであり、微妙なバランスのもとに成り立っている。

② そのような自然環境のバランスは、人間の活動によって崩される可能性がある。

2. 固体地球

① 人間が利用している鉱物資源は、長い地質学的な過程で有用物質が濃集してできたものである。

② 火山活動や地震活動の特徴を知り、人間はそれにいかに対処すべきか考えさせる。

3. 人類の未来

① これからの人類に残された問題には、人口、食糧、エネルギー資源などの問題がある。

② 自然界には様々の物質循環があり、これと人間の社会活動とのかかわりから、資源保護や環境保全の問題を考えさせる。

授業を行った結果、次のような反省及び問題点がでてきた。

ア. 実験や実習がやりにくいので、一本調子の授業になり易い。

イ. 生徒に説明するのが精一杯で、これからの人類の問題などを生徒に充分考えさせることができなかった。

ウ. 前半、生徒は、人間にかかわりがある理科ということで、興味を持って授業を受けていた。しかし、後半になると、大学受験に関係ないということから、怠ける生徒が増えた。

学年	項　　目	内　　容
6	**1. 自然環境〔11〕**	
	ア. 地球の形成(2)	太陽系の成因、大気の起源、海の起源
	イ. 太陽放射と地球(2)	太陽風、電離層、オゾン層
	ウ. 生物と大気の進化(2)	生命の発生、大気の進化
	エ. 氷河時代と気候変動(3)	氷期と間氷期、海水面変動と気候変動、氷河時代の原因
	オ. 気候変化の要因(2)	太陽放射のエネルギー、大気の温室効果 大気汚染
	2. 固体地球〔12〕	
	ア. 地球をつくる物質(1)	地殻、マントルの平均化学組成、地球の平均化学組成
	イ. 鉱　床(2)	火成鉱床、堆積鉱床、変成鉱床
	ウ. 石　油(2)	油田地帯の地質的特徴、石油の生成
	エ. 火　山(4)	地球内部のエネルギー、地殻熱流量、火山の噴火 火山の分布、マントルとマグマの発生
	オ. 地　震(3)	地震の起こり方、地震のマグニチュードと発生回数、地震のエネルギー、地震の原因とその予知
	3. 人類の未来〔3〕	
	ア. 人口と食糧(1)	世界の人口増加、食糧生産量と太陽エネルギー
	イ. エネルギー資源の将来(1)	人類のエネルギー消費の歴史、エネルギー資源の内訳と将来
	ウ. 自然界のバランスと物質循環(1)	地殻構成物質の循環、水、酸素、炭素の循環 人工物質の循環

Ⅵ. おわりに

はじめに述べたように、文部省指導要領の改訂にともない、現在の6か年一貫カリキュラムは、昭和53年度入学者をもって打ち切ることになった。新しい指導要領下での6か年一貫カリキュラムでは、必修理科の時間が非常に減少したため、本校独自のカリキュラムが非常に組みにくくなった。6か年一貫教育を始めるにあたって、我々が目ざした理科教育（本校研究紀要第13集参照）を実施するだけの必修時間のゆとりがなくなり、指導要領に決められた内容、学年配当通りにやらざるを得なくなった。その他、独自のカリキュラムを組む上での障害として、新しい大学入試制度があげられる。即ち、国立大学入試に共通一次試験がはいり、しかも新指導要領下での入試科目が明確でないため、高校では理科Ⅰの内容を必ず学習させた上に、さらに

1科目は、国立大学を受験する全生徒に履習させておく必要があると思われる。4・5学年の理科を必修にして、その中で理科Iの内容をふくらませた独自のカリキュラムを実施したいとの考えは、見送らざるを得なくなった。また、中学校段階では、無償配布の教科書の扱いも、6か年一貫カリキュラムを実施する上で問題となってくる。現在の6か年一貫教育においても、無償配布の教科書をできるだけ利用するようにしたが、配列が教科書通りでなかったり、教科書に載っていない内容については、プリント学習であったりしたことが、生徒の負担になっていたようである。

なお、本校では1学年から5学年までを対象に年度末に標準学力テストを実施している。このテストは、1年間の学習内容のうち、標準的な問題について、生徒個人の理解度をみる目的で行われている。テスト結果は、個人別カードに記録され、指導資料に利用できるようになっている。教科においては、小問の正答率を参考に、生徒の理解困難な点の指導方法を検討し、カリキュラムの部分修正を行なっている。標準学力テストの結果については後日報告したい。

現在の6か年一貫カリキュラムは、短期間に、少人数で作りあげたものを、実施してゆく中で検討、変更を加えつつ現在に至っている。何かと欠陥も多いと思われる。諸賢のご批判とご指導を仰ぐ次第である。

全校アンケートの集計結果

研究調査部　　中道貞子・山中昭生・吉岡幸子

本報告は、紀要第21集で報告した「資料」にもとずき、全校生徒を対象として、昭和55年10月上旬に、各学級担任が、無記名で記入させ、集計した結果である。

54年度結果と対比し報告するものである。

I　学校以外でふつう1日の勉強時間について、各学年別の傾向をみてみると、表I、図1、2に示す通りで、中学生では1時間～2、3時間に集中し、高校では1年は中学と同じ傾向を示し、2年でやや多くなり、3年では2年より約1時間程度多く勉強していることが伺えるのである。これは、大学入試の準備からくるもので、当然のことと思われるが、大学入試の準備を考えた場合には、手遅れではないかと思われるのである。

これを各学年平均でみてみると、表IIに示す通りで、中・高とも54年度、55年度とも同じ傾向である。特に中2では、勉強時間が中1よりも減少し、いわゆる中だるみの傾向を示すものではないかと思われる。また中3で勉強時間が、それほど増加していないのは、六年一貫教育である本校特有の傾向と思われる。

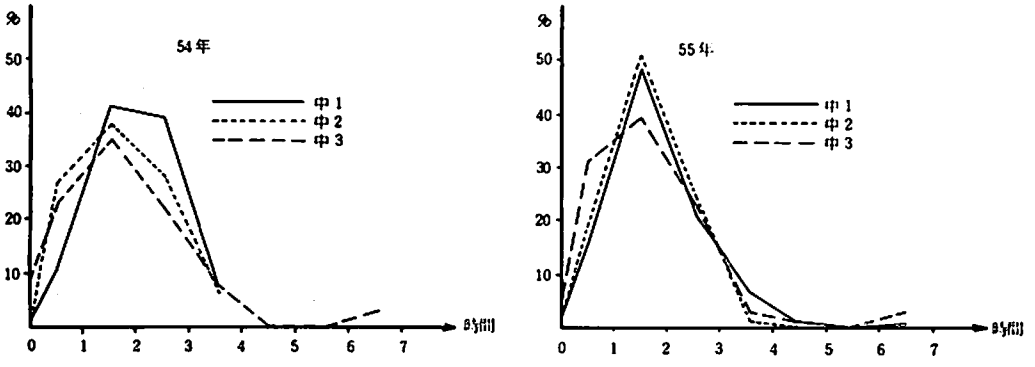
表1.　学校以外でのふつう1日の勉強時間についての学年別百分率（54年度・55年度）

学校	中1		中2		中3		高1		高2		高3	
年度	55	54	55	54	55	54	55	54	55	54	55	54
項目(時間) %	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
0	3.5	0.9	2.6	0.7	4.8	9.2	6.7	2.2	2.4	3.2	0.8	4.2
0以上～1時間未満	16.5	11.1	19.0	26.5	28.6	22.9	10.1	16.7	8.6	9.5	3.1	6.7
1 〃 ～2 〃	48.7	41.0	51.7	37.9	39.7	35.1	40.3	46.9	37.8	29.3	6.3	11.8
2 〃 ～3 〃	20.9	39.3	24.1	28.0	23.0	22.1	28.6	28.8	40.2	36.5	20.3	23.5
3 〃 ～4 〃	9.6	7.7	2.6	6.8	3.2	7.6	11.8	3.0	5.5	15.9	30.5	30.4
4 〃 ～5 〃	0	0	0	0	0.7	0	0	0.8	5.5	4.8	27.3	13.4
5 〃 ～6 〃	0	0	0	0	0	0	0.8	0.8	0	0	7.8	9.2
6時間以上	0.8	0	0	0	0	3.1	1.7	0.8	0	0.8	3.9	0.8
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

表Ⅱ．学校以外でのふつう１日の勉強時間についての学年別平均時間（54年度、55年度）

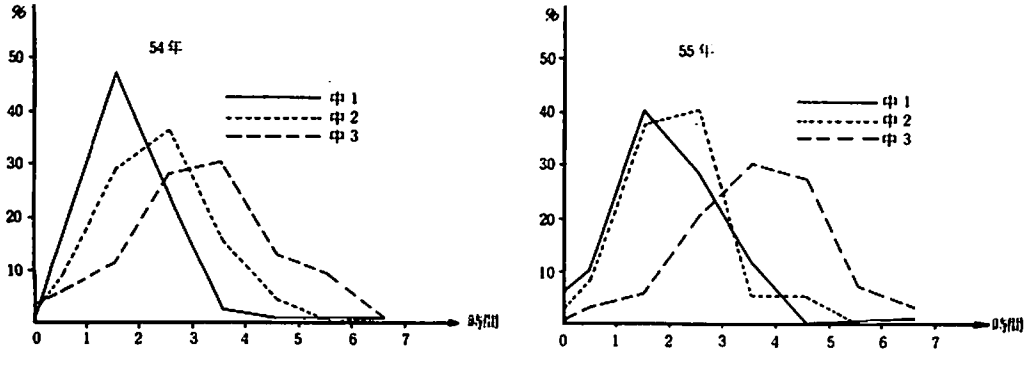
学年 / 時間 / 年度	中 1		中 2		中 3		高 1		高 2		高 3	
	55	54	55	54	55	54	55	54	55	54	55	54
学校以外での一日の勉強時間の学年平均	1.73	1.92	1.56	1.64	1.89	1.66	1.93	1.74	2.06	2.22	3.07	3.01

図Ⅰ．学校以外でのふつう１日の勉強時間についての学年別分布（54年度、55年度）中学



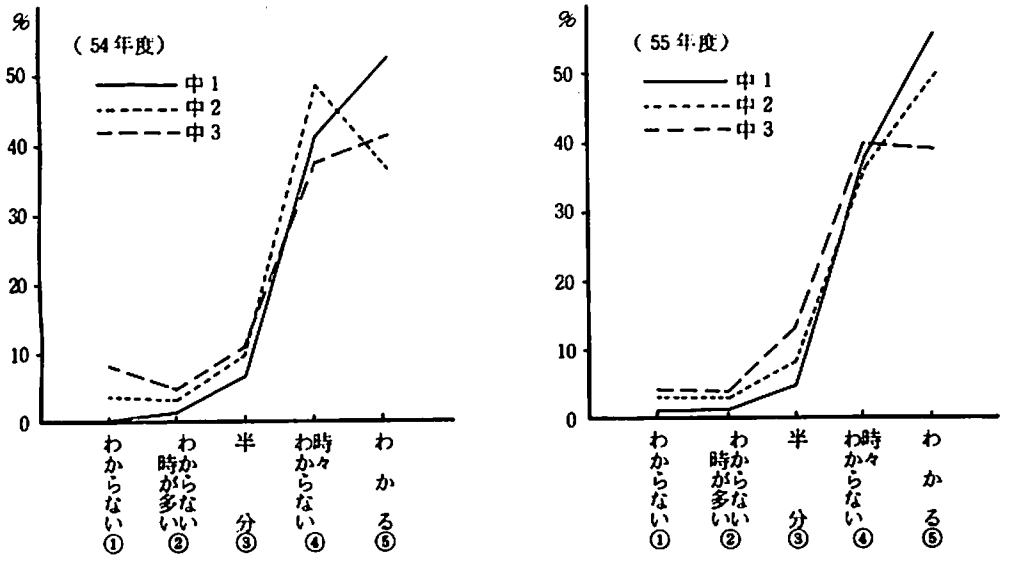
〔㊟54年、55年とも全く勉強しないものが少人数ながらみられる。〕

図Ⅱ．学校以外でのふつう１日の勉強時間についての学年別分布（54年度、55年度）高校

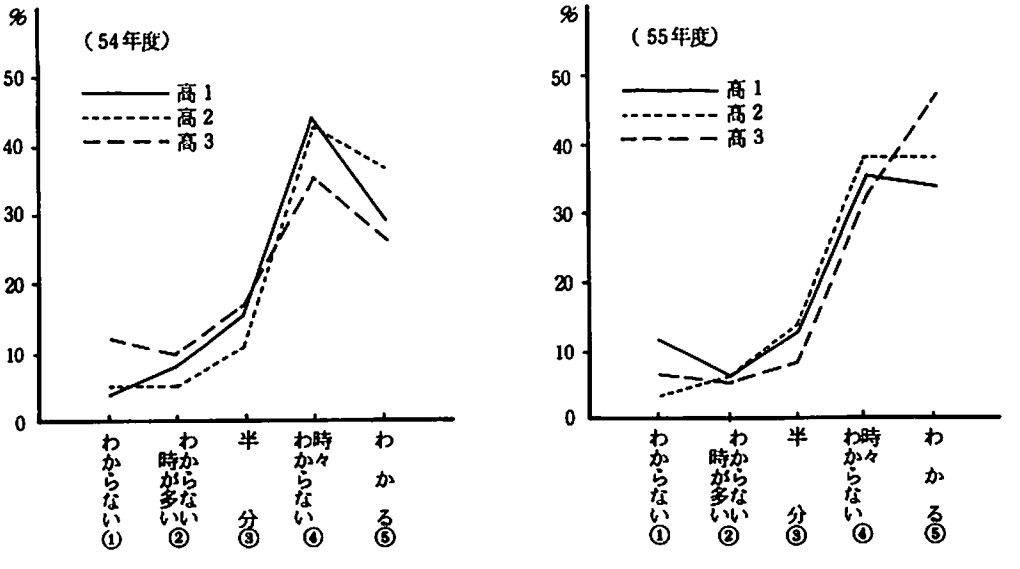


Ⅱ① 授業時間中の理解度について「殆んどわからない」ものの学年別5教科平均をみてみると表Ⅱの通りで、55年度高2をのぞく各学年では、学年が進むにつれて「殆んどわからない」ものが増加しており、54年中3、55年高1については、その傾向が特に顕著であるのが注目される。

学校での授業時間の理解度についての学年別分布（中学）



図Ⅲ．学校での授業時間の理解度について学年別分布



表Ⅱ．学校の授業時間で、「殆んどわからない」ものの学年別、5教科平均

学年 / 年度 人	中 1	中 2	中 3	高 1	高 2	高 3
55年度 人	1.2	3.2	5.0	13.8	4.2	8.4
54年度 人	0	4.0	10.0	5.2	6.0	15.0
増・減		3.2	1.0	3.8	−1.0	2.4

② 授業時間中の「殆んどわからない」ものの教科別6学年平均をみてみると表Ⅲの通りで、54年度に比べ増加している教科は、国、社、理で、減少している教科は、英、数である。特に国語の2.8人増が気になる傾向である。また理科の14.2人は、1割強のものが、各学年に「殆んどわからない」ことを示すものとして一考を要するのではないかと思われるのである。

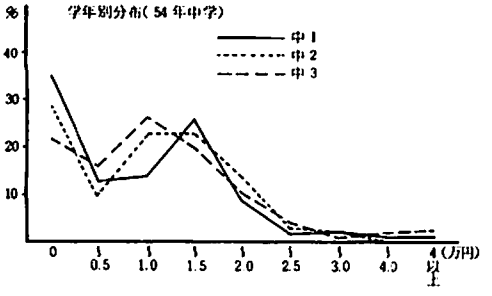
表Ⅲ．学校での授業時間で「殆んどわからない」ものの教科別6学年平均

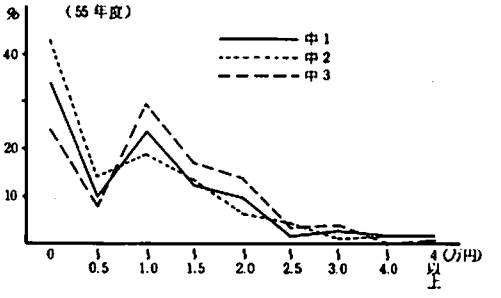
教科 / 年度 人	英	数	国	社	理
55年度 人	4.2	5.4	8.0	4.0	14.2
54年度 人	5.2	7.3	5.2	3.5	12.3
増 減	−1.0	−1.9	2.8	0.5	1.9

③ 次に授業でわからないところをどうするかについての実態では、すべての学年で「友人に質問する」が圧倒的な傾向を示し、友人同志で教えあうという面では、好ましいことではないかと思われる。また中1、中2あたりでは「家の人に質問する」ものが多いが、中3以上の学年では、むしろ「家の人に質問する」が急激に減少している。これは、内容のむずかしさからくる問題ではないかと思われる。それにしても、「先生に質問する」が少ないのは、敬遠されているという見方で良いのかどうか、問題であろう。

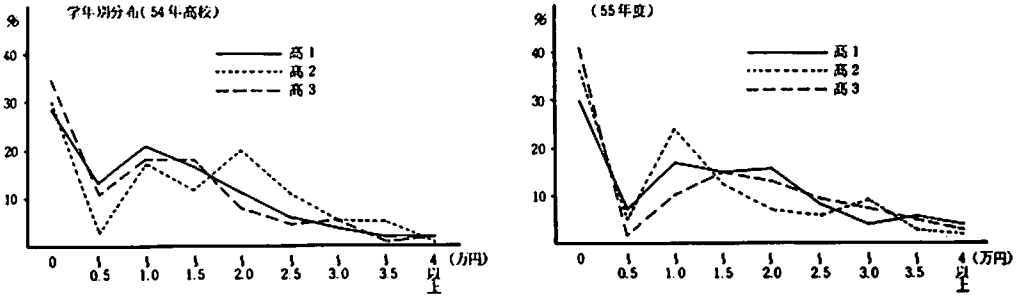
また「授業でわからないところ」を放置しておく要注意の者が54年度同様、かなりいることが注目され、このあたりの指導も一考を要するのではないかと思われるのである。

図Ⅳ．塾などに要する一ケ月合計経費の分布（中学）





図V．塾などに要する１ケ月合計経費の分布（高校）



表．独習以外の勉強に要する経費の学年別百分率（54年度、55年度）

	中 1		中 2		中 3		高 1		高 2		高 3	
（万円）	54年 (%)	55年 (%)	54年 (%)	55年 (%)	54年 (%)	55年 (%)	54年 (%)	55年 (%)	54年 (%)	55年 (%)	54年 (%)	55年 (%)
0	34.2	33.6	28.1	42.7	21.4	23.8	28.5	29.5	29.4	35.2	34.2	40.6
0こえて～0.5未満	12.8	13.3	9.4	9.4	15.3	7.9	12.3	6.6	2.4	4.8	10.3	0.8
0.5 以上～1 〃	13.7	23.0	22.7	18.8	26.0	29.4	20.8	6.4	16.7	23.2	17.9	9.4
1 〃 ～1.5 〃	25.6	12.4	22.7	12.8	19.8	16.7	16.2	13.9	11.1	12.0	17.9	14.1
1.5 〃 ～2.0 〃	8.5	9.7	13.3	6.0	9.9	14.3	10.8	14.8	19.8	6.4	7.7	12.5
2.0 〃 ～2.5 〃	1.7	1.8	2.3	3.4	3.1	3.2	5.4	7.4	10.3	5.6	4.3	8.6
2.5 〃 ～3 〃	1.7	2.7	1.6	1.7	0.8	4.0	3.1	3.3	4.8	8.8	5.1	7.0
3 〃 ～4 〃	0.9	1.8	0	1.7	1.5	0	1.5	4.9	4.8	2.4	0.9	4.7
	0.9	1.8	0		2.3	0.8	1.5	3.3	0.8	1.6	1.7	2.3

独習以外の勉強に要する経費についてみてみると、中学生については54年度とあまり差はないが、高校になると、55年度はどの学年も習っている者の月平均経費が 1.5 万円以上になっている。また高校で経費の多額な者（３万円を超える者）の数が、54年度、14名だったのが、54年度は24名となり、習いごとに多くの時間をかける生徒が増えた分、経費も高くつくようになったと思われる。

図　経費（習っている者の月平均経費）

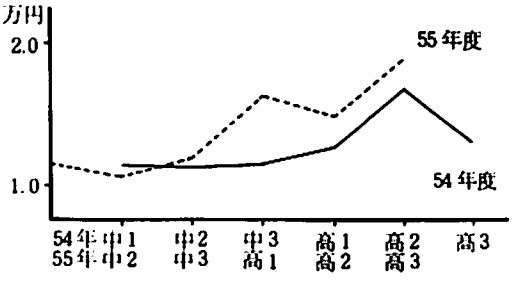


表　経費の多額な者（3万円を超える者）

	中 1	中 2	中 3	高 1	高 2	高 3
55年(人数)	4	2	1	10	5	9
54年(〃)	2	0	5	4	7	3

〔まとめ〕

(1) 勉強時間について、中2で中だるみし、六年一貫教育のノンビリムードから脱し切れず、高2ぐらいまで、それがつづき、大学受験直前になって、やむをえず勉強時間が3時間程度になっている。本校では殆んど全員大学進学という実態の中で、このまま放置しておいてもよいものかどうか、一考を要する問題ではないかと思われる。つまり進学準備にとりかかる時期を早めるような指導は必要ではないだろうか。

(2) 授業内容の理解度については、教科によって差は認められるが、理解困難な生徒が、教科により、学年に一割程度いることについては、一考を要すると思われる。指導要領改訂に伴ない、六年一貫カリキュラムの指導内容について、抜本的な検討をせまられているのではないだろうか。また教科の指導内容もさることながら、教科担当者会などでもよく問題にされている低学力者対策についても、担当者個々にまかせるのでなく、本校としてどうとり組むかについての方針を確立すべきではなかろうか。

(3) 習っている者の経費については、多額な経費を必要とする者が前年度より増加し、習いごとに多くの時間をかける生徒も増加していることと対応するものであるが、学校が信用されていないというのか、一般によくいわれている。教育は家庭で、しっけは学校でという。本末転倒の状態にならないような対策を講じなければならないのではないだろうか。

(4) クラブ活動などについてもアンケートしたのであるが、調査時期などの問題で、実態そのものが明らかでなかったよう思われるので、本報告では省略したい調査時期について、次年度の課題としたい。

以上、アンケート結果について、若干の考察を試みたのであるが、提起した問題については、昨年からのものであり、具体的な対策が急がれるのではなかろうか。

自由教育運動から学ぶこと

松 村 正 樹

1. はじめに

江戸時代の藩校・寺小屋での教育は、もっぱら教える側が学ぶ側に学を授ける―その形式はいまだに使われている「授業」という言葉の中にも生き続けている―という構造をもっていた。それは明治期の教育にそっくり受けつがれ、教育内容の面ではかつての封建時代のそれをかなり払拭して文明開化の要素を採り入れはしたものの、教育方法の面では、教師が上から授けるものを学ぶ側が無条件に受けるというしくみが依然として続いた。これに対するアンチ・テーゼが提示されるのは19世紀の末、明治も終りに近い頃である。明治期に萌芽を見せたこの新しい教育思想、つまり教育の軸を教える側から学ぶ側に移そうとする教育方法におけるコペルニクス的転換を目ざす動きは、海外の新教育思想の影響の下に大正期にいたって本格化し、いわゆる「大正自由教育」の開花を見た。

この運動の波頭として、成城小学校、千葉師範附属小学校、東京女高師附属小学校、明星学園などの実践があったが、木下竹次のひきいる奈良女高師附属小学校の先進的な実践が大きな注目を浴びていたことは近代教育史上の常識となっている。木下の教育理念の結晶ともいうべき「学習原論」の刊行は1923年、「学習各論」は上中下にわけて1926年から1929年にわたって刊行された。今からおよそ半世紀前のことになる。

50年も昔、しかもその間に「満州事変」から「太平洋戦争」へと続く軍国主義によって教育が教育でなくなったような時期と、敗戦による政治体制や教育体制の激動の時期をはさんでいるのであってみれば、かつての自由教育が当時のままのナイーヴさで蘇ってその存在理由を主張することができないことは、だれの目にも明らかだろう。教育運動に限らずあらゆる運動は所詮その時代の産物であって、時代そのものが大きく変動したのちになおも有効性を保とうとするならば、かつて自分を生んだその時代の制約と、その制約によって刻印づけられた狭さと甘さを克服しなければならないからである。1980年代に入った現在も、大正期の運動の理念を継承する良心的な実践はなされているのだが、はたしてその点の克服が充分なされているかどうかがまじめに問われるべきだと考える。

しかしまた、それと同時に、あの時代にあれだけの高揚を示し、あれだけの支持者を得た―後述するように、当時の労働者や農民に無縁のものであったにせよ―運動と理念の中には、半世紀後の教育現場にある我々にとって学びとるべきものが少なからずあるはずだという気持も私には強い。自由教育運動から学ぶものがなくなったと言えるほどに現在の教育現場の状況が好転し、教師が前進したとは、教育学者も教師もみとめはしないだろう。小学生の自殺が珍らしいことではなくなり、あちこちの学校で校内暴力が荒れ狂っている今、半世紀前のあの運動

のナイーヴさとロマンが、あのままの内容と形では検討にたえないことは衆目が一致するとしても、現在の教育荒廃の根っこの一部分は、あの運動の遺産を正当に評価して生かそうとしなかった我々教師の側にあると考えるからだ。その意味であの運動には時代の制約をこえる何かが確かにあった。

自由教育運動のことをほとんど知らない人も教師の中に多いし、知ってはいても古い時代のものだとか、あるいは「プチ・ブルジョア的」なものだとかの理由であまり関心をもとうとしない。一方ではまた、この運動の理念がきびしい再吟味もなしにそのまま現在に通用するかのような主張も見られる。私の目には、自由教育運動は単なる過去の遺物と見なすにはあまりに多くの学ぶべきものをもっているし、また、現在にそのまま生かして苛烈な教育状況にきりこむためにはあまりに多くの弱点をもっていたものとして映る。全面否定でも全面肯定でもない角度からのアプローチによって、むしろその限界と弱点からさえ何かを学べるのではないか、そういう気持で以下の小論を試みることにした。

2. 明治期の自由教育運動の性格

この期の運動を代表するのは、樋口勘次郎、及川平治、谷本富、柳沢政太郎、西山哲次らである。運動のスタートを樋口の「統合主義新教授法」(1899)に求めるならば、西山の「児童中心主義新教授法」(1911)あたりで大正期への橋わたしがなされることになり、その間にはさまって奈良女高師の創立(1908)がある。同じころ(1910)雑誌「白樺」が創刊されていることは、自由教育運動を生み出した時代の雰囲気を伝えるもののように私には感じられる。

この時期の「新教育」の中に、実は大正期のそれの主張がほとんど出揃っていた。 海外の「新教育」「新学校」運動に触発されておこったこの運動の最大の特色と貢献は、教育「方法」の抜本的改革を提唱したことだった。江戸時代から明治に受けつがれてきた権威主義的で一方交通的な教えこみ、画一的な注入教育の伝統に対する、目の覚めるような果敢な反撃と批判がそこに見られる。児童中心、個性尊重、自発学習、合科統合学習が主張された。「いかに」教えるかという教育「方法」の次元でのコペルニクス的転回が志向されていた。天皇制絶対主義と地主制・家父長制の堅固であった明治の雰囲気を考えるならば、それは教育「方法」というわくの中でのぎりぎりの反封建的・反絶対主義的な運動という一面をたしかにもっていたと言えるだろう。ただ、この運動を支えるだけの社会的条件、社会的基盤ーもっと具体的に言えばその運動を支持する社会的階層ーが未成熟であったがために、大正期のそれほどの高まりと拡がりをもちえなかっただけである。

とは言っても、その社会的基盤の弱さと、運動を支持する階層ーそれは大正期に入ってかなりの程度まで拡がりはするのだがーが体質的にもっていた限界が、明治の「新教育」に一定のわくをはめていた。

この時期の「自由教育」のチャンピォンたちが教育「方法」の近代的改革を唱えた功績は無視できないのだが、彼らは教育「内容」の点では国定の「臣民」教育に無批判であり、むしろ国策に「自主的・自発的」に協力する国民、日本の対外発展に積極的に寄与する国民を育てる

ためにこそ従来の教育「方法」は変えられねばならないと主張し、当時の国家主義・帝国主義の国策に追随していたという点が一つである。

もう一つは、坐学よりも手工、知育よりも頭と心と手を統合した教育活動として手工を重視した谷本が、その理由として「上下貴賤の和合」つまり労資協調に役立つことをあげていたように、当時ようやく表面化しつつあった階級対立、労農運動の成長に対して、嫌悪ないし、反感、ひいき目に見ても高踏的な無関心さしか示さなかったことである。言いかえるならば、当時の労働者、農民、勤労大衆と無縁の所に自分を置いた教育思想であり教育運動であったという点である。

そして大正期の自由教育は、明治のそれの上述した先進性とともに、これらの限界をもすなおに受けついでいく。

3. 大正～昭和初期の自由教育運動

明治期の先駆者たちに、千葉師範附小の手塚岸衛、奈良女高師附属小の木下竹次らが加わり運動が幅と厚みを増してくる。木下が奈良女高師附小の主事となったのは1919年であり、以後奈良女高師附小は東の千葉師範附小と並んで自由教育運動のメッカとなり、最盛時には年間2万人をこえる参観者を迎えたという。

しかしこの間、しだいに時代の暗雲がのしかかってきていた。すでに1924年に、文部省が2回にわたって奈良女高師附小に圧力をかけ、「修身」を根幹とする教科書に忠実な教育をやるようにと通達していた。同校も1928年にはついに屈して「国体観念をたかめる」ことに留意せざるをえなくなる。

この経緯に見られるように、大正自由教育運動は第一次大戦後の1919年ごろから1923年あたりまでをピークとしてたかまったあと、1929年ごろには、狭い範囲での実践は別として、公然たる運動としては消滅したということができる。

大正期「新教育」の内容と性格は、基本的には明治期のそれの継承・発展であった。もちろん、海外の新しい思潮や運動の影響が加わり、明治期のそれに比べて主張と論点のきめが細かくなってはいるが、児童本位、個性尊重、全人的統合教育（裏返して言えば、注入、画一、束縛、干渉に反対）という主張の基軸に変りはない。それは当時千葉師範附属小で作られ歌われた「改造節」の文句に天衣無縫な姿であらわれている。

"四つとせ　世の人覚めよ　鶏が啼く　個性個性と鶏が啼く　ソレ改造ダネー"

"六つとせ　むりをしないで　のびのびと　児童本位の自由主義　ソレ改造ダネー"

要するに、学ぶ側の児童こそが教育の主体であり、学ぶ側の自発性・内発性に無限定の信頼をおくべきだという「近代的」教育方法論の提唱である。大正期に入っても旧態依然として権威主義的な一方的教えこみが当然のこととして通用していたことを背景として、その前にこの主張を置いてみればまぶしいばかりのヒューマニズムが感じられる。その意義を決して過小評価してはならないだろう。しかし、だからといってその弱点と限界に目をつぶるのも公平ではない。

明治期のそれの劣性遺伝ともいうべき限界が大正期の自由教育についても明らかに見てとれるのである。その斬新な主張が教育「方法」のわくをこえて教育「内容」の非民主性と国家主義にきりこんでいけなかったこと、その点を棚上げして大正自由教育の風貌をばら色に描き出すのは安直にすぎると言うべきだろう。もっとも、「内容」にきりこもうにも当時の国家体制の壁がそれを許さなかったのではないか、と問うてみることはできる。私も一度はそう考えた。だが、戦後そのような国家体制の壁が崩れたあとも、あの運動の後継者を自任する人たちが、依然として「方法」のみに視野を限定しているのを見ると、この弱点は時代の制約であった以上に、自由教育運動自体に内在する体質的なものだと断ぜざるを得ない。

文部省から圧力をかけられたのは、たしかに当時の「国策」に反する進歩的な面をどこかにもっていたからこそである。しかし、それは教育「内容」の面で反国家主義、反軍国主義であったからではなかったのだ。教育「方法」の上で、国定の教育課程に忠実でなく、教科書を軽視し、教師よりも児童を主役にし、こどもの好きなことをやらせ、「修身」をも軽視している…など、教育の上からの統制を強めようとする政府の方針にとって、「いかに」教えるかという「方法」のレベルで不都合であり反逆児だったからである。

「何を」教えるのかという教育「内容」の面では、「世界無比の国体」をもった日本の国家的発展に、他律的にではなく「自発的・自主的」に活動し貢献できる国民を育てることが自由教育のねらいであり大義名分であった。したがって、「満州事変」に際しても、「アジアの盟主としての世界的大活動」を期待し、「日本海を自国の湖水」とする「大陸日本」を建設し、「思想的赤化主義とたたかわねばならぬ」と説いた木下竹次には、当時の文部省から弾圧されねばならぬ理由はさらになかったはずである。

4. 大正自由教育の限界と時代背景

運動を支えた社会的基盤という面から見て、大正期のそれは明治期のそれとちがった新しい局面をもっていた。いわゆる「大正デモクラシー」の高揚がそれである。第一次大戦を契機とする日本の資本主義的発展はかなりの小市民層・中間層を生み出し、それを母胎として自由主義・個性主義・人格主義・教養主義などを特徴とする思潮と運動が展開された。吉野作造の「民本主義」、「白樺派」の隆盛、「赤い鳥」の創刊などがそれであり、自由教育運動もその波頭の一つと見なすことができる。

ところで、この時代の「新中間層」の自己主張には、「新」中間層であるが故のみずみずしさと同時に、この階層自体のもつひ弱さもまた反映されざるをえなかった。「民本主義」が天皇主権のわくの中での民意尊重を説くにとどまったことはよく知られているが、自由教育運動が教育「方法」における児童本位・個性尊重を説くにとどまったことがそれと軌を一にしている。ただ、教育における「方法」と「内容」とは相互乗り入れの関係にあるから、「方法」の改革を徹底しておし進めた場合、たとえ意識的に「内容」の改革を意図していなくても、「内容」に抵触することが避けられない。だから、大正期の運動が教育「内容」の改革に全くふれなかったと言えばうそになってしまう。例えば、自由教育運動が「忠君愛国」を説く「修身」を軽視するようなカリキュ

ラムを組み、それが文部省ににらまれる大きな理由になった点は、当時の教育政策の中で「修身」が占めていた諸教科の王としての地位を考えるならば、大きく評価しなければならないだろう。しかしその場合といえども、大正期の運動は「修身」の国家主義的内容を批判したのではなかった。児童の自発性を無視した一方的注入では「忠君愛国」の道徳がほんとに身についたものにならないと主張したのだった。その意味からして、やはりこの期の運動は教育「方法」だけの改革を目ざしたものであり、「忠君愛国」のわくの中での教育「方法」の近代化を志向したものだったと言ってよい。これが大正教育の大きな弱点の一つである。「方法」はどんな主人にでも仕えることができるからだ。

「新中間層」を生み出す基盤であった資本主義の発展は、同時に労働運動・農民運動を噴出させ、社会運動を高揚させた。全国各地でのストや小作争議、米騒動、全国水平社の創立、共産党の結成などにそれを見ることができる。自由教育運動はこのような大衆の動向とどうかかわったのだろうか。この運動の第二の体質的な弱点がここであらわれてくる。この運動を提唱しあるいは実践した学者や教師、それを支持してわが子をその実践校に送りこんだ人たちは新中間層に属する知識人であったが、この階層自体の大衆運動とのつながりは皆無とはいえないまでも稀薄であった。「学校出」で、海外の新思想をも受けいれることのできた彼らは、無教養な労働者や農民への共感をもちえなかったであろう。彼らの大衆運動に対する反応は、概して無関心であるか、あるいは、大衆運動のもつ階級闘争的な要素に対して警戒心や自衛本能を示すかであった。

社会矛盾や貧困の問題、社会運動に対する不感症とそれに附随するある種の高踏性と「甘さ」は、大正自由教育を評価する場合に見逃がすことのできない側面である。このことは、自由教育の行われた場の特殊性とも符合している。その華やかな実践は決して一般公立校でなされたものではなく、都市の特権的私立校か、師範や高等師範の附属校に限られ、そこには貧しい労働者や農民の子どもは在学していなかった。当時の一般公立学校では忠孝を至上とする封建道徳と、古いタイプのしめつけと一方的注入の教育が行われ、教師にも教育実践上の自由はなく、自由教育がそういう一般公教育の裾野にひろがり浸透していく条件はなかった。また、自由教育運動の側にも、自らのそのような治外法権的な位置ーそれもついには崩されるのだがーについての意識が欠けていた。その意味で、特定の恵まれた学校で、特定の階層の子どもを対象としてのみ可能な、特権的で温室的な教育実践であったと言えるのではないか。

まさにこの点に対する批判から、同じ大正期において、生活と貧困、社会矛盾を直視する生活綴方運動、北方教育運動やプロレタリア教育運動などがおこってきた。そして、労働者や農民の子どもを抱えたこれらの運動の側から、自由教育の甘さに対する鋭い批判の声があげられている。

「労働者解放、婦人解放、幼児解放に無関心」(原田実)「精神において貴族的なぜいたく学校」(下中弥三郎)「ブルジョア本位の精神から脱却せよ」(土田杏村)「時代おくれのブルジョア・リベラリズム」(大西伍一)「資本主義の初期における自由競争時代の教育主義としては若干のコペルニクス的転回味はあったかもしれないが……現代ではむしろ見苦しき時代錯誤的存在」(上田庄三

郎）……

これらの人々に指摘されている甘さは、当然のことながら自由教育運動における児童観にも反映されざるをえなかった。児童の一人一人はそれをとりまく政治、社会の体制や矛盾から切り離されて、教育の「方法」しだいでは無限の発達が可能な存在として把えられるからだ。この無邪気とも言える楽天的な児童観に対しても、当時すでにきびしい批判があった。「敬愛すべき理想主義者だが、同時におめでたい観念論者」(大西伍一)「こどもたちに全人の夢を教えてはならない。否、全人になれぬ苦しみを自覚させねばならぬ」(野村芳兵衛) そして、これらの批判をうけとめ、乗りこえようとする姿勢での自由教育からの反論は見られなかったようだ。

5. 大正自由教育運動の「哲学」

単なる思いつきでなくて長期にわたって展開される運動は、体系化されているかどうかは別として、一定の思想ないし哲学のようなものをバックボーンとしてもっている。大正期から昭和初期におよび、戦後にうけつがれているこの派の実践と主張の中にそれをつきとめることは、実はそう容易ではない。思想そのものとして理論化された主張がなく、また、さまざまな要素がまざりあっているからだ。しかし、だれの目にもはっきりと感知できる特徴として次の三つがある。

(a) ヴァイタリズム、あるいは「生」の哲学

「生命」という言葉がさかんに使われる。「生の向上」「生の要求」「自分の生命にふれる」「生命の充実・燃焼」「生命の悦び」「生命の白熱」などのように。また「生きる勢いをつける」という言い方もされている。これは一人一人の「個」としての人間の「生」の躍動・燃焼に最高の意義をおく考え方で、ベルグソンの「創造的進化」の哲学にきわめて近い。

この派の哲学における「生」はいっさいの分析を許さない全一的なものだから、学習を「心身一体の全我活動」ととらえることにもなる。児童の「生」あるいは生命力を科学的分析を超えた科学よりも高次元の神秘的なものとしてとらえるわけで、教育のいとなみは教師の「生」と児童の「生」のふれあいという何か芸術的なものになってくる。もちろんいつの時代の教育においても心のふれあいはたいせつな要素であろうが、この「生」は心だけではなく知情意のすべてを全一的に包みこんでいて、外からの分析を拒んでいる。

ヴァイタリズムあるいは「生」の哲学は、19世紀末から20世紀はじめにかけて、偏った主知主義や科学万能主義の風潮に対する反発として起ったものであったが、それらの風潮に反発する余りに「生」という超科学的、非科学的なものを観念的に構築して、それに王者の地位を与えてしまった。この哲学あるいはそれの変種を教育実践の核としてもつ限り、系統的知識と科学を拒否する姿勢がつきまとうし、知育を軽んじる傾向をふっきれないだろう。

さらにまた、「生」の哲学が歴史的現実面で果たした役割をふりかえるならば、それはある種のニヒリズムやアナキズムと癒着・抱合して、ファッシズムの思想を支えることになったし、戦後の先進諸国(日本をふくむ)における暴発的な「新左翼」運動の理論ともなっている。

あの場合は悪用されたにすぎないと弁解してみても、悪用されやすい思想的体質をもっていたことに変りはないのであって、そういう体験を経た後にもなお「生」を王者の座にすえる思想を無批判に教育実践の核にすることは無神経のそしりを免れないように思える。

(b) プラグマティズム

自由教育運動全般にデューイの思想の影響が濃くあらわれている。パース・ジェームズ・デューイらの唱えたプラグマティズムは、従来のヘーゲル的な形而上学、思弁的哲学に対するアンチ・テーゼとして生まれたものだが、思想としての難点をいくつかもっている。

その一つは、客観的真理の実在をみとめないことである。人間という個体の生活・行動(プラグマ)に役立つことのみが、その人間にとっての真理だと主張する。したがって、個人の生活と経験のわくの外に真理はなく、個人の数だけ真理が主観的に存在するという個人主義・主観主義・経験主義・相対主義の哲学である。第二に、当然の帰結としてプラグマティズムは真理はこれこれであるとは主張しないし、独自の世界観を提示することもない。各人にとってのそれぞれの真理を「いかに」かくとくするかという「方法」の哲学である。その意味ではどんな世界観や思想とでも抱合できる融通性と便宜主義の哲学でもあった。軍国主義の時代にも民主主義の時代にもそれなりに自己主張ができ一定の役割をはたすことができるのだが、その融通性自体が思想としての大きな欠陥であることは明らかだ。

ここにあげたプラグマティズムの難点・欠陥がいくつかの形で自由教育運動に影を落としている。①すべての児童に身につけさせるべき共通の学習内容とか共通の到達目標などが考えられず(ミニマム・エッセンシャルズの否定)、一人一人の児童の個々の意欲と関心の延長線上にしか学習はないという考え方。②生活即学習であるとして、経験第一主義の立場をとること。「学習者が生活から出発して、生活によって、生活の向上をはかる」(木下竹次)ことが教育であるととらえ、生活や経験の外側から知識や技能を授けることを非教育的とみなす点。自由教育で合科が重視されるのも、教科にわけることが学習の生活からの遊離を生むと考えるからである。概して学習の専門分化をきらう傾向がある。③すでに述べたことと重なるが、教育「内容」は個々の児童の関心からひとりでに導き出されてくる内発的なものなので客観的に構成できないと見る。だから自由教育の実践はもっぱら「方法」「学習法」に徹することになる。④その点で上記の融通性・順応性にともなう欠陥をも露呈することになる。

(c) 理想主義とロマンチシズム

「個」を無限に発展・開花させ、その「生」を完全燃焼させるのだという教育観には、大正期特有の「白樺派」的な理想主義の風潮がにじんでいる。第一次大戦後の、教育をも包みこんで深まっていく社会矛盾や社会問題から意識的に目をそらし、素朴な人間肯定と個人主義のわくの中での自己完成を目ざしたのが「白樺派」であったが、自由教育の主張を読むと私は武者小路実篤の作品を思い出さずにいられない。その一種独特のさわやかさとかげりのない明るさ、その主張にこめられた熱とあくまでもその所信の実現を信じている楽天性において、さ

らにその個人主義と現実遊離とにおいて両者は共通の根をもっていると考えてよいだろう。

現実遊離はまた、ロマンチシズムの一つの特質でもあった。現実的制約を無視ないし軽視して個体の無限の発達成長を夢みる点で、自由教育の主張にはロマンチックな気分が漂っている。こどもを個性を秘めたすばらしい生命体として見るのだが、社会的存在としてのとら方が弱いし、教育のいとなみは創造のよろこびであり芸術であると主張されさえする。教育活動の核を「生命の白熱」という「詩的精神」におくのだという主張などは、自由教育に宿っている熱いロマンチシズムをこの上なくよくあらわしていると言えよう。封建的な束縛や権威主義的なおしつけ・注入教育を痛烈に批判し、何よりも自由と自発性を、個人の尊重を説いたところは、このロマンチシズムの革新的な側面として高く評価しなければならないのだが、一面ではロマンチシズムに伴いがちな弱点をも内在させていた。そのプラス面とマイナス面を共に正しく評価することがたいせつだと思う。

6. 木下竹次の理論と実践

ここで、大正自由教育運動の西日本におけるリーダー格であった奈良女高師附属小学校主事木下竹次の思想と実践の軌跡をうんと要約して追ってみよう。

「旧教育」に対する批判という点では、木下も他の論者と共通のレベルに立っていた。教師中心の専制的画一的な注入教育、知識偏重の他律的教育は、「児童の沈滞」と「個性の没却」「創造性の滅却」をもたらすと考え、そこから彼の「学習法」の理論が生まれてくる。

学習はあくまで「自律的学習」でなければならない。彼は、「人は生物である」から出発して、生物、生命体としての「生の要求」(本能、欲求)を学習の動力源と考える。教育の役割は、教授・訓練・養護をふくむ「渾一的作用」としての学習によって「本能の浄化、美化」「生の向上」をはかり、人間的個性的な「創造的生活」に到達させることにあるとし、その学習は「即生活」であって、学校はそのための「整理された環境」、教室は「生活の場」、教師の役目はこどもの自発学習を「間接的・助長的」に指導することだと言う。その点で教師の教えこみ、教えすぎをきびしく戒めている。

この「自律的学習」や「学習即生活」論は先行した論者と共通していてとくに新しい主張ではないのだが、木下の新しさはこれらの原理を主張するにとどまらずに、具体的な学習の形態と方法を示しそれを実践した点にある。その一つは「独自学習」から「相互学習」へという回路を考えたことだ。児童の要求と関心を出発点とした「独自学習」(それは特設「学習」の時間として1920年から奈良女高師附小で実践された)から「分団(グループ)相互学習」へ進み、さらに「学級相互学習」に進むというコースで、いわば個人→班→学級と学習の場をひろげていく構想である。自分の好きなこと、学びたいことを学ぶという「独自学習」を出発点としているが、「分団」→「学級」相互学習では「優劣混淆・優劣共進」によって社会的人格が形成されるとして、そこに訓育的価値を認めていた。

もう一つは「合科学習」の提唱である。これは「生」を原動力とする生活と経験の「渾一性」から導き出されてくるもので、就学前の家庭生活そのものが「渾一的」であるという事情をそ

のまま学校に延長し、生活の「具体的全一性」を保ったままで、教科にわけずに生活単元による学習を展開するのだ。分科主義による教科別時間割は学習を生活の「渾一性」から切りはなして抽象化し、こまぎれにしてしまい、学習の生活ばなれをひきおこし、意義の感じられない、無味乾燥な勉強を強いることになるという主張は、現在の教育状況に対しても依然として強い発言権をもっている。しかも彼は、合科学習の理論の中に発達段階の考慮を加え、低学年では「大合科学習」、中学年では「中合科学習」、高学年では「小合科学習」と順次に合科の領域をせばめ、将来大人に近づくにつれて専門的な知識、技能を身につけねばならぬ点をもおさえていたかのようである。

最後に木下の教育理論と時局認識との接点について見ておこう。彼は明らかに「大正デモクラシー」の中に身を置いていた。「立憲国家」の国民は、封建制や専制国家の国民のように他律的・受動的で従順な、自分の意見をもたない人間であってはならない。「自治心」「公共心、協同心、独立心」をそなえた国民でなければならない。「自由なる自律活動」によってのみ国政に参与すべき「発動的国民」が育つのであり、新教育はこのような国民をいかにして育成するかという課題に応えるものとしてあると彼は考えていた。「立憲」日本に対するオプティミズムに乗っかってはいるが、新教育、自由教育が「大正デモクラシー」の一環でありえた進歩性がここにある。

と同時に、「大正デモクラシー」が「立憲」と国家主義を並存させえた時代的制約も、やはり木下の思考を色どっている。彼の「満州事変」観についてはすでにふれたが、植民地がふえて「新附の民を増した国」だからこそ、国家の発展に、「大陸日本」の躍進に自発的に寄与できるような国民の育成が肝要だと述べていた。ただしかし、この国家主義の風潮は当時の国民を幅広くまきこんでいたもので、この点だけをもって木下の教育理念と実践のすべてを否定するといった満点主義の見方をすべきでないことはいうまでもない。

7. 教育原理としての検討

大正自由教育にもさまざまの実践があって、それぞれに微妙なニュアンスのちがいはあろうが、にもかかわらず、共通してみとめられる基本的な性格がある。それをいくつかぬき出して、教育原理としてどこまで有効かどこに弱さがあるかを検討してみよう。この作業は、自由教育に一応批判的な立場をとりながらそれを今後どう生かすかを考えることにつながってくる。

(a) 「方法」の探求

何といってもこの運動の基軸は、長い伝統をもった古いタイプの教育「方法」(権威主義的で他律的な、一方交通の注入教育）を徹底的に批判して、学ぶ側の児童の主体性・自発性への信頼に立った自学主義を唱え、それを実践したことにあった。教育「方法」が自覚的にとりあげられたのはおそらくこれが最初であったろう。「児童本位」「児童中心」の言葉はその意味で教育のルネサンスと呼ぶにふさわしい新鮮なひびきをおびていた。

ただ惜しむらくは、教育「内容」と結びついてのみ「方法」があるという観点がぬけ落ち

ていたところに、「何を」をぬきにした「いかに」の追求ばかりに走ったところに、技術主義に陥る危険性をはらんでおり、当時の上から課せられてくる国定の教育内容との対決をさけ、それと癒着してしまうおそれがあった。この点については、1924年に書かれた赤井米吉の批判が、今さらつけ加える必要もないまでに、的を射ていた。「国定教科書のはんい内で自由教育論が唱導されているのは現代の一奇観であろう。児童の内的興味はむしろ研究方法よりも研究の対象にある。論者は国定教科書が児童の学習材料として最上のものとして認めるのであるか？学習は"いかに"の問題よりも"何を"の問題がより重要であることを考えないのか。」

しかし、自由教育の論者の主観の中では、決して教育「内容」を考えていないことはなかったと私は見ている。彼らは「方法」原理を強調する余りに、教育「内容」やその編成原理までも「方法」の中からひき出されてくるかのように考えたのだ。つまり、「児童本位」に徹する限り、「何を」教え学ぶかも児童の自発性と関心の中からおのずと出てくるもので、児童の外側に児童に学ばせるべき「内容」などあるはずがないと考えたのであった。児童が学びたいと思うことだけが、それぞれの児童にとって学ぶべき「内容」であって、すべての児童にこれだけは身につけさせようという客観的な教育「内容」や到達目標など不要と考えられている。ここには「方法」の肥大化・自己目的化が見られる。

意欲や興味はこどもからひき出せるし、それをひき出すような教育「方法」はたいせつだが、やはりあくまでも「方法」としてであって、教育「内容」はこどもの外にあって、こどもの内面からすべてひき出せるものではあるまい。でなければ、教育のよい・わるいは児童の自発性や意欲・関心に即しているかどうかだけできまることになり、「何」を学ばせるかについてはいっさい基準がないことになってしまう。極端な例をあげれば、人は自発的・意欲的に国家主義者や侵略主義者になることだってできるのだから。

(b) 生活と経験の重視

生活と経験に即した教え方、学び方がたいせつであることは言うまでもない。昨今、生活と遊離した単なるコピーとしての知識をやたらに多く注入する式の教育のあり方がこどもの学校ぎらい・勉強ぎらいを増加させてきたが、この実情に照らしても、生活と経験を根にすえた学習指導の重要性はいくら強調してもしすぎることはないと思う。

ただ、「生活即学習」というふうに学習の範囲を限定することや、年令と発達段階に無関係にそれを主張することに対しては首をかしげたくなる。個人の生活と経験の領域には限りがあり、こどもの間はとくに狭い。幼児や低学年の間は身のまわりの生活がそのまま教材であってもいいだろうが、高学年に進むにつれて個人的経験のわくを越えた客観的系統的知識を学ばねばならなくなる。小、中、高、大学までの教育をすべて「生活即学習」の原理でくくることの乱暴なことは明らかであろう。こどもの生活と経験・興味と関心からだけでは地動説も原子力学も生まれない。科学的真理は往々にして我々の日常的な生活経験に反するところにあるものである。「生活」から学ぶという原理は系統的学習に入る前の、そのためのレディネスを形成するのにふさわしい発達段階、つまり小学校低学年における教育に限定され

るべきものだと私は考える。でないと、現代の科学・技術・芸術などの系統的学習と、それを指導する教師の側からの意図的な教育計画・教育課程の軽視にもつながることになるだろう。何しろ「生活」というものは未分化で包括的なものだから、こどもの関心がどちらを向くかわからない。めいめい好きな方を向いて「自発的」に学ばせたのでは、学ぶ内容はこどもにより千差万別というアナーキーな状態になる。方向性をもたぬ「はいまわる経験主義」として批判されるのはこのためである。

それにまた、「生活」というもののとらえ方にも問題がありそうだ。すでにふれたように、自由教育の主張に現われる「生活」「生」の概念がヴァイタリズムの臭いを伴ってかなり神秘的であいまいだという点である。「生の向上」「生の燃焼」など漠然とした表現で蔽ってしまうのでなく、たとえば経験と思考、認識のしくみなどは科学的・心理学的にとらえねばならぬのではないか。

(c) 合科学習・問題解決学習

生活が即学習だという原理から生まれたのが合科主義で、生活・経験の全一不可分性、「渾一性」の上に学習をのせ、教科別の指導（分科主義）をとるべきでないという。低学年の間はそれでよいが、高学年、さらに中学や高校までを見通した原理としては判底通用しない。そもそも教科というものが生まれてきた理由は、生活と経験というせまい未分化な世界からだけではより広く深く系統的に学べないからである。合科学習から出発しても、やがては教科別の学習に入り、国語や算数や理科などのそれぞれ独自の系統と法則をもった内容を学ばなければならないし、教師はそれをしっかり教えなければならない。

合科学習には教科書は不要である。こどもの生活の中のなまの具体的な問題がそのまま教材となり単元（生活単元）となり、こどもがこどもなりに問題解決をはかるのが学習活動ということになる。その場合、身近なことの方が興味をもてるし、また具体的だからわかりやすいという前提があるようだが、興味はたしかにもてるにしても、わかりやすさという点はどうだろうか。具体的なものは感覚的にはとらえられるけれども、かといってわかりやすいとは限らない。いや、現実的で具体的なものほどいろいろの要素がこみいってまじっており、複雑で難しいのではないだろうか。

例えば、こどもの住んでいる都市の交通を問題としてとりあげたとする。そこには人口、産業、交通機関その他さまざまな要因がからみあっていて、算数、社会、理科などで学ぶべきものがまじりあっている。だからこそいいのだと合科教育論者は言うのだが、そこには系統と難易度のさまざまにちがう要素がたくさんまじっていて、基礎的な系統学習のすんでいないこどもはこのゴルディアスの結び目を解く鍵をもたぬまま右往左往する。教材設定に不可欠なこどもの発達段階に見合った系統性と順次性が無視されることにならざるをえない。

しかし、だからといって私は合科学習の意義を全然みとめないのではない。就学と同時に教科別の系統学習ばかり続くと、教える側の責任もあって、教科と教科のつながり（出発点では未分化な生活の中で一つにつながっていた）が忘れられ見失われてしまいやすい。ある

教科しか教えない中学や高校の教師は、教科のわくで視野をせばめられて、自分の教えていることが一人一人の生徒の全人的な発達のためにこそ行っている指導の一部分であることを意識できないでいることが多い。学ぶ側もまた、何人もの教師からバラバラに学ぶことが自分の内部で一つにつながらない悩みをもつ。合科主義の理念は現実には小学校低学年にのみ有効だとしても、上記のような分科主義教育の弊害を反省する上でだいじなことを問いかけているのではないか。

(d) こどもの自発性への信頼

受験戦争が過熱化し、勉強の重荷にひしがれて自殺するこどもがあとをたたぬ現代において、これまた失われているたいせつなものである。学ぶ側の主体性、自発性を無視した一方的な注入はこどもの疎外と教育の荒廃をしか生み出さない。教育「方法」の面で、改めて大正期の主張から謙虚に学ばねばならぬ。

ただこの原理もあまりに無限定に拡大解釈すると、こどもの中にすべてがあるような児童礼賛になり、次のような点でかえって欠陥を示すことになる。

こどもは何といってもまだ未熟であり、生活や経験の根が浅く、認識も狭さと浅薄さを免れないものだが、そういうこどもの自発性・自然成長性を過大視して、地動説における太陽の位置をこどもに与え、こどもの興味と関心のおもむくままに教師が右往左往して「間接・助長的」にのみ指導するというのでは、教師の指導性が著しく後退する。「児童だに活動すればそれにて可」(樋口勘次郎)という主張にそれが典型的にあらわれている。あらゆる意味で未熟な児童が先頭に立って主導権をとり、大人の教師が従となってそれにふりまわされるのでは、教育の社会的機能 ― 人類の築いた文化遺産を精選して次の世代に伝えるという―は果たせなくなるし、教師の側の意図的な教育目標・教育計画・カリキュラムも不要だということになってしまう。

教育評価という点から見ても疑問が生じる。自発学習による個性の伸長を第一のねらいとする場合、どれだけ自発的にとりくめるようになったかが評価の基準になる。そこではとりくみの姿勢・態度・創造性・追求心・ねばり・気迫などの方向目標はあるが、何をどれだけ身につけさせるかという到達目標がなく、すべてのこどもを一定の学力水準にまで到達させたいという考えが弱い。学力イコール学ぶ態度・学習法・問題解決にとりくむ姿勢と考えるから、評価の基準はこどもによってちがうし、上記の方向目標に沿って主観的な個人内評価を行なうしかないことになるが、はたしてそれでいいのだろうか。

評価についてのこういう見方の中にも、あくまでも学習の「方法」を重視して「内容」を問題としないこの派の教育観の特質が示されている。このように学力というものを実体的な内容(身につけるべき系統的知識や技能そのもの)ぬきで態度・意欲・とりくみの姿勢など主体性の問題に解消してしまう立場が、それを批判する側から「態度主義」と呼ばれるのはそのためであろう。

大体、自主性とか自発性なるものは、もともとこどもの内部に秘められていて、外的諸条

件に関係なくおのずと発現する内発的なものではない。関心や興味にしてもそうである。外界の条件や外からの働きかけによって「何か」を知ろう、「何か」を学ぼうとするときに、つまり目標や対象があってこそ発現するものである。その「何か」をぬきにして、あるいはその「何か」は何であってもかまわないから自主性・自発性がすべてなのだと言ってしまうのは不毛の論理であろう。学ぶ内容は問わずに学ぶ過程・方法だけを重視するのは、目的地をきめないで利用する交通機関だけを問題にするのと同じではないのか。

さらにまた、一人一人の人間のパーソナリティの核はすでに幼少時に形成され、その意味ではこどももすでに個性をもち、個性に応じた自主性を大なり小なりもってはいる。しかし、本当に個性的な、自分を生かした自主的なしごとのできるのは大人になってからだろう。ということは、発達段階に応じ難易度に応じて順序づけられ系統づけられた基礎的な学習があってこそ、個性や自主性がきたえられ、成人したのちにそれが開花するのではなかろうか。その場合もちろん、自発性を無視した一方的つめこみが系統学習の効果を大きくそこない、時には学習そのものを拒否するこどもをつくり出すことになるのだが。

8. その何をどこに生かすのか

ここまで長々と書いてきた中で、自由教育運動の遺産の生かすべき面と補強の必要な弱い面とにすでに多くふれたが、最後にもう一度それをまとめて結びとしたい。ただこの小論はあくまで明治末〜昭和初期の過去の運動の主張なり実践なりを主にとりあげたもので、現在その伝統を生かしつつ過去にもっていた弱点を克服している諸実践があれば、ここに書いたような批判的はずれになることは言うまでもない。

(a) 教育「内容」の視点を

くり返しになるようだが、やはり何といっても「方法」がすべてであるという考えを修正して、教育「内容」をそれから切りはなし正しく位置づけることが必要であろう。それをしないとイデオロギーぬきの技術主義に陥って、上からのどんな国策とでも両立できるようになる恐れがあるからだ。「内容」(何を)と「方法」(いかに)は車の両輪の如きもので一方がだめなら他を殺してしまう関係にある。過去の教育はそのどちらの面でも誤っていたのだから、その一方だけを改革しても真の改革にはならない。その両方の面において科学的なアプローチが必要であろう。教育のしごとや人間の理解が科学だけで全部割り切れるものとは思わないが、可能な限り科学の基盤に立ち、主観主義や相対主義の道にふみ込まぬようにとの自戒がなければならぬ。教育「内容」の科学性・系統性を重視すること、「方法」の上でも近年著しく進歩した大脳生理学・発達心理学・認識心理学などの助けを借りるべきだと思う。

(b) 教師の指導性

こどもを無視した教師中心の教育がまちがっていることは自由教育運動の主張の通りである。かといってこどもが中心でこどもの活動を教師が「助長的」に指導するだけというのも

正しくない。教師の指導性とこどもの自発性とは二律背反的にとらえられるべきものではなく、そのぶっつかりあいが教育なのではなかろうか。いわば教師の指導性・教育内容の論理とこどもの論理（自発性・興味・意欲）の相克が教育の場なのであろう。そして教師には、必ず身につけさせねばならぬ教育内容について、こどもの内部に「学びたい」という自発性と意欲をほり起こすという難しくきびしいしごとがある。難しいからといってそれをやらずに一方的に知識をつめこむのも、こどもに主導権を与えて「助長的」立場にとどまるのもどちらも正しくはない。

(c) 「方法」としての復権

1980年代に入って小、中、高の学習指導要領が改まり「ゆとり」のある教育が合い言葉になっている。 70年代までのこどもを無視した過密なつめこみ授業が教育の荒廃と行きつまりを招いたことへの反省がやっとなされるようになった。

教育「内容」は思いきった精選と、ほんとうにこどもの認識能力の発達段階に沿うような再編成・系統化を要求されている。「方法」の面ではこどもの自発性と意欲をどう引き出すかが最大の課題であり、そこで自由教育運動の主張が復権されたことになる。

その一つは学習の動機づけの重要さであろう。こどもが学ぶ意欲をもてないで、何のために学ぶのかわからない授業では、たとえ「内容」がどんなにりっぱなものであってもこどもに力をつけることはできない。それと関連して出てくる第二の点は教科内容と教材の「生活ばなれ」をどう克服するかである。「コトバ主義」「操作主義」などの名で批判されるようになったこの風潮は、教科の背景にある学問の系統性と抽象性を上から下へストレートに学校教育の内容にもちこみ、学ぶ側の発達段階に応じた「教育的」系統性と、生活経験とのつなぎとなる具体性との両方を欠くところから生じた。自由教育では終始一貫して生活が重視された。「生活即教育」の考えは支持し難いにしても、あらゆる学習の根に生活をすえる視点は大いに学ぶべきところだと思う。高校・大学での順次専門化の進む学習にあっても、時々は立ち止まって、今学んでいることの生活とのつながりを考えること、それを考えさせるように指導することが必要であろう。

第三の点がこれとかかわっている。合科学習をどう生かすかの問題である。合科は就学前後のある段階においてのみ、系統的合科学習のためのレディネス形成のために有効だと考えるが、小・中・高と進む間にも、とかく遊離して相互のつながりの見失われがちな分科学習を補強し、主役の系統的学習を支える横木あるいは梁(はり)のようなものとして、ところどころに入れることが必要ではないだろうか。教科と教科をつなぐ総合学習的な単元として、それを学習したことが次の教科別学習への動機づけとなるような内容を設定して行えば、大きな役割を果たすだろう。

上にあげた三点は、とくに教科セクトにとじこもって学校教育の全体構造と生徒の全体像を見失いがちな中学・高校の教師につきつけられた課題だとも言える。自分の専門をバックに、教科書を柱にして「講義」することになれた教師にとって、この課題に応えるのは生

やさしいことではない。しかし、それに挑戦することなしには、半世紀前の自由教育運動の遺産から何も学びえなかったことになるのではないか。

（注．この小論は、1979年の校内研究会で発表したものに手を加えたものです。）

社会科での学力をたかめるための一つの試み

社会科　鈴　木　　良

はじめに

本年（一九八〇年）の中一の生徒に、学年はじめにあたって挙手でしらべてみたところ、一クラスで約十人前後が社会科はきらいだと答えた。その理由はいろいろだが、一番多いのは「おぼえることがたくさんありすぎるから」ということらしい。一方的な注入で、生徒の興味や体験とあわない知識がおしつけられるところに、社会科ぎらいが増加する原因があるようだ。しかし、新しい知識を手に入れるには、かならず記憶がともなう。どの教科でも覚えるという作業がかならずともなう。子どももたいせつなことを覚えるのは、けっしていやがらない。系統的に、順序だてられた事項を覚えさせることは大切なことである。私は、ここ数年ほど、テストの前になると「まとめのプリント」を配布し、知識の整理に役立たゝせることを実施してきた。以下にのべるⅠはその報告である。

また、この２年間、一方的な授業になるのを避けるために、中三で歴史スライドづくりを実施してきた。こうした方法によって、生徒がみずから学ぶようにむけられたらと思ってのことである。これがⅡの報告である。ともに、なんら目新しいものではなく、その分析も十分でなくて、恥しいかぎりだが、何等かの参考にしていただければ幸いである。

Ⅰ　「まとめのプリント」について

昨年度（１９７９年）の例でいうと、中間テストの２～１週間前に「まとめのプリント」（別掲）を配布した。比較のために、１学期の中間・期末テスト、２学期中間テストまでは、このプリントを配り、そのあとは自分でまとめを作らせるようにした。

中三Ｃ組の例でいうと、この「まとめのプリント」がある方が良いとするものが30人（68％）どさらでもよい８人（18％）、ない方がよい６人（14％）であった。生徒の感想を記してみよう。

① 生徒Ａ（女子）　　学年末評定10段階で７

自分でやると歴史全体の流れをうまくまとめられない。Ａというものがあると、Ｂにつながらなくて、そこで流れがとまってしまう。一言でいって、まとめ方がわからないということで、どうしてもよけいなことまで書いて覚えにくい。

② 生徒Ｂ（男子）　　同上評定５

自分のまとめに自信がもてない。まとめ方が判らないのかもしれない。教科書を読んでい

て、1つのものを大事だと思って書くと、これも大事だというふうに結局教科書を丸おぼえしようとして大事なことも忘れてしまう。もしかしたら、自分でどこが大事か見分けがつかないのかもしれない。

ここで2人の生徒がいっているのは、大事なこととそうでないことを区別するということ、それに事項と事項のつながりが全体として理解できないことである。そのために、「まとめのプリント」は彼らにとって歓迎するものであるということらしい。

プリントを配布した場合と配布しなかった場合、テストの点数はどう変っているだろうか。

1学期の平均点（中3B）は87.3……（プリントあり）。2学期末テストの平均点（同じクラス）は82.0……（プリントなし）。その得点分布は下のとおり。あまり顕著な差はあるとはいえないが、やはり70点以下が5人から10人に増加しているように、得点下位のものが増えている。

	一学期(平均)	二学期期末
98～100	1	1
94～ 97	4	5
89～ 93	15	11
79～ 88	14	15
71～ 78	6	3
59～ 70	2	5
51～ 58	2	3
50以下	1	2
計	45	45

場合によっては、得点で20点以上も下がる子はざらで、B組の例では4人、C組で2人あった。

（中3B組の例）

生徒	一学期平均	二学期期末
A	73	49
B	70	36
C	59	56
D	66	66

以上のようにみると、とくに低い学力の子どもには、このやり方は一定の効果があるとはいえよう。生徒にやればできるという自信をつけ、とくに低学力の子どもにやる気をおこさせる上で、なにがしかのプラスになると思う。なお、私のテストはかなりむずかしい問題をふくんだものであるが約6～7割は、基本的なものを出題している。資料にあげた「まとめのプリント」（二学期中間テスト）の例でいうと、たとえば、「自由民権運動はなぜおこり、どんな人々がこれをおし進めたか」とか、「大日本帝国憲法の主な内容を説明し、その特色をのべなさい」などの記述問題をも出すことにしている。はじめ、ひらがなでしか答案をかくことができなかった生徒が、きちんとした字、それも漢字を使って答案をかくことができるようになった例などをみると、今後もこの方式をつづけていきたいと思う。

資料・「まとめのプリント」の例

中三　「まとめのプリント」（二学期）

明治維新

新政府の成立　主な政府の代表者（　　）、（　　）、（　　）

五か条の誓文　なぜ天皇が神に誓う形式にしたのか？

版籍奉還（　　）年　（　　）（　　）（　　）（　　）の4藩、ついで各大名藩はまだのこる

（　　）1971年　廃藩し県をおく　1使（　）府（　）県

士族はどうなったか？

身分制度をなくす（「　　」）　華族とは（　　）

華士族に（　　）を支給

どんな方法で支給されたか？　上級華士族は（　　）となる

賤民解放令　1871　差別はなぜなくならなかったか？

地租改正

年貢を金納・一定へ・地租改正条例（1873）

地租＝（　　）の3％　重い地租　地租改正反対一揆

農村の変化（　　）→小作人　労働者へ

山林の国有地化（入会地の没収）

地租は、殖産興業の財源　（竹槍で　　）1877地租を引下げ

徴兵令（　　）年

兵役の義務　徴兵をまぬがれた人は？（　　）

官営工場・鉱山　製糸業＝（　　）　紙幣の発行　国立銀行

外交

岩倉（　　）　全権大使1871（　　）へ（　　）のため失敗

征韓論（　　）・（　　）ら　朝鮮はまだ鎖国政策

そのねらいは？　帰国した（　　）（　　）ら反対

（　　）ら政府をやめる。

江華島事件　（　　）条規＝（　　）条約・（　　）年

清国との条約（　　）　沖縄県の設置

ロシア　〃（　　）

西南の役

士族の不満　各地で反乱

（　　）年　（　　）ら　西南の役

文明開化

廃仏棄釈とは（　　）　太陽暦採用　　キリスト教の公認

学制の施行（　　）年　　小学校の授業料は？

自由と平等の考え（　　）　（　　）ら

代表的な書物（　　）　（　　）

立憲政治の成立

政府への不満

農民　（　　）一揆など

士族　（　　）1877　　民選議院＝（　　）

板垣退助、（　　）、（　　）ら

ヨーロッパの民主主義思想

各地に政治結社　　立志社→愛国社→（　　）→（　　）1881

自由党　党首（　　）、主な人々（　　）（　　）

改進党　〃（　　）

自由民権運動の主張したこと（　　）

1881年の政変←（　　）政府やめる

（　　）事件　政府（　　）の詔→（その内容　　）

農民の暴動（　　）事件　（　　）事件　　自由民権運動おとろえる

憲法発布

政府（　　）ら　ヨーロッパへ―― とくにプロシヤへ

└→理由（　　）

内閣制度とる（1885）　最初の総理大臣（　　）

（　　）年（　月　日）　大日本帝国憲法の発布

（　　）憲法　（　　）は天皇にある

軍隊を動かす権利
宣戦布告・条約を結ぶ権利　} →（　　）にある

国民（　　）と呼ばれた　　制限つきの（　　）人権

帝国議会（　　）と（　　院）

憲法の特色（　　）

Ⅱ　歴史スライド作りについて

昨年度より、中三で歴史スライドを作らせる取組みを行なってきた。その目的は、グループ毎にテーマをきめ、台本（ストーリー）を作り、下絵をかゝせ、これを写真にとり、ナレーションをテープに入れる、という作業を通じて自分たちであるテーマについての歴史像を作り上げさせ、

それによって歴史認識を高めることを狙いとした。

歴史教育に歴史紙芝居やテープによるルポを作らせることは多くの実践があり、この取組みも目新しいものではない。ただ強いていえば、紙芝居と声の録音を一緒にしたことで、生徒には多くの努力が必要とされ、そこから班の協力が強く求められるので、グループ活動を進める上には一定の効果があるように思われる。さらに、今年度の特色は明治維新から現代までどこをとり上げても良いことにしたので、戦争と平和にかかわるテーマが多くえらばれることとなった。この点が本報告の一つの重点となる。（なお、昨年は近代――イギリス革命から明治維新までとしたため、フランス革命・アメリカ独立・明治維新といったテーマが多かった。学年全員投票による第一位はマゼラン、第二位はナポレオン。）

1. 具体的な取組み

今年は、九月の学園祭が終ってから二学期末までに提出する予定で指示を与えた。

(1) 昨年度中三の優秀作品（昨年度は、イギリス革命から日本の明治維新まで、三クラス全員投票の第1位「マゼラン」、第2位「フランス革命」）を上映し、スライド作りのむずかしさを説明。

(2) 各クラスを5～6班にわけ（くじびきで、男女ほゞ同数）班長をきめ、テーマをきめさせる。班わけ、テーマの決定について約3時間。本年は、明治維新から現代までどれを取り上げてもよいこととした。

(3) テーマについての下調べ、参考書あつめ。全員がそのテーマについて良く知ることの大切さをくりかえし指示。図書館で本をさがしたり、私のところに聞きにくる。約4時間とる。

(4) ほゞ順調に歩み始めたところで、私の方からテープとスライド用のフィルムを班に1つづつ与える。

(5) 教師側は、指示は最少限にとどめ、聞かれれば答える程度とした。ただし、進行の遅い班に対しては、討論のつまづきを聞き、これにアドバイスしていった。

(6) 台本が出来上ると、下絵を書く。これ以後の作業はほとんど家ですることになる。当初、12月24日を提出日としておいたが、とりくみが遅れていたため、1月8日に延期した。冬休みに多くの班が学校で作業した。

(7) 3学期に入り、各クラスで全作品を上映し、投票により各クラスの代表作1つを決め、学年全体でこれを見て、学年で1位・2位をきめる。

2. テーマについて　（1980年度）

	班	テーマ	内容	教師側の評価
中三A	1	若い生命	学徒士陣の兄と残された妹、弟を通じて戦争の非劇をえがいたもの	△ 少し単調
	2	坂本龍馬	龍馬の生涯を思い出風にえがいたもの	○
	3	五・四運動	日本から帰国した留学生を中心に、五・四運動にいたる過程をえがく。	○
	4	韓国人被爆者	広島に徴用工として来た被爆韓国人の一生をえがき、その妻が原爆を告発してゆくのをドラマ風にしたもの	◎ 絵が弱い
	5	新撰組	新撰組始末記のひきうつし	× 理解しにくい
中三B	1	無窮花	日清戦争後の朝鮮の義兵闘争と一青年を主人公にえがいたもの	◎
	2	和宮降嫁	有吉佐和子の「和宮様御留」にのっとったドラマ風	○
	3	高杉晋作	奇兵隊を中心に晋作の一生をえがく	△ メリハリに欠ける
	4	真珠湾	1941年12・8から45年8・15にいたる通史	× 絵とストーリーがバラバラ
	5	姫ゆり部隊	沖縄ひめゆり部隊の最後をドキュメント風にまとめたもの	○
中三C	1	ロシア革命	ロシア革命をモスクワ見学という形でえがく	× 協力の欠如
	2	連合艦隊	山本五十六に焦点をあてながら、太平洋戦争をみたもの	× 同　上
	3	アウシュビッツ	ユダヤ人家族が収容所で命を失う物語	◎
	4	三菱	三菱がなぜ財閥になれたのかを岩崎弥太郎を通してみたもの	△ 努力するも失敗
	5	沖縄返還	小学生の日記などで復帰前の沖縄と復帰運動をえがく	○
	6	日露戦争	旅順攻防戦の具体的な姿をえがき、戦争の終りまでをみたもの	○

3. 評価について　（生徒たちの）

無記名で投票させ、自分の努力・班のまとまり・他の班の評価をださせてみた。

（中三C組の例）

班	テーマ	自己評価		投票による得点
		自分の努力	班のまとまり	
1	ロシア革命	5.1	3.0	46.9
2	連合艦隊	7.0	7.4	73.6
3	アウシュビッツ	8.6	7.7	84.1
4	三菱	6.3	8.4	53.8
5	沖縄返還	6.4	6.2	70.0
6	日露戦争	7.8	9.8	90.5

注. 自己評価は、10点満点で評価したもの。

投票による得点は、100点満点で無記名投票し、この合計を人数で割ったもの。

このように見ると、日露戦争・アウシュビッツが一、二位をしめることとなった。日露戦争については、すでに授業であつかっていたため具体的なイメージを作り上げやすかったのかもしれない。日露戦争の開始から終局まで、とくに旅順攻防に力点をおいて作り上げたものだが、内容的にまとまっていたのと、絵が上手であり、ナレーションも巧みで、とくに終りの部分の大塚楠緒子の「お百度詣」の詞が効果を上げていた。難点としては、戦争の場面の描写を基礎とした書物の影響からか及木希典個人に焦点をあてすぎたきらいがある。

アウシュビッツは、力作だが絵に難点があるのがおしい。

4. 生徒の感想から —— スライドづくりについて

- 「まず自分たちがやりたい、うったえたいことをしっかりとまとめて、それをどういうふうに表現するのかというのを大事に考えなくてはいけないと思う。そして脚本の〝うったえたいこと〟を中心に、1つの資料だけをもとにせず、作らなくてはいけないと思う。また、作る人のチームワークをよくして、みんなが1つのまとまった意見で仕事をすすめるべきだと思う。また、技術などの点では、1人の人物の顔をいっしょにすること、また絵の感じをいっしょにしなくてはいけないと思う。」
- 「自分たちが常識的に知っていたこと以外に、もっとくわしくある歴史の1部を知ることができて良いと思う。またくわしいことだけでなく、今までもっていたその歴史に対しての考え方がかわったりするので良いと思う。」
- 「まずみんなが興味を持つようなテーマを決める事です。それからストーリーもわかりやすく辞書を使わなくてはならないような言葉は使わないこと。絵も雑にしないで下手は下手なりにていねいに書くこと。録音も発音正しくゆっくり言ってBGMも場面にあったものを選ぶこと。しかし、これらのことも班員の協力がなければだめですね。」
- 「とても有意義なことだと思う。そのテーマについて知識が得られるし、小人数ということもあって、責任感ももてるだろう。また出来上った時の喜びはとても言い表せない位ではな

かろうか。これからも続けてほしい。」

- 「1部の人だけでしたという感じが残ったし、自分の班については男子と女子が分裂ぎみだった。授業中遊んでしまい、あとであせったりした。時間は最低限くれるだけで良いと思う。わりとお金がかかった。」
- 「とにかく難しかった。というより、みんながやる気がなかったので、最初から最後まで班員がバラバラで関連性を持って仕事を進めなかったので、最後にまとめられなくてどうしめくくっていいのかわからなくなった。作品としては最低のものしかできなかったが、でもみんな1つの物を仕上げるという事に対して何か感じたと思う。」
- 「高校でフィールドワークがあるそうだが、そのための良い下積みになったと思う。フィールドワークというのは、スライドよりもっと規模の大きいものだそうだ。そうなると、ますます全員が協力する事が大事になるだろう。同じ失敗をくり返してはいけないと思った。」

5. 中学生の戦争と平和

戦争と平和についてのテーマは、全部で16のうち10ある。自由に選択させたのにこうなるのは、現代史なら当然といえば当然だがきわめて興味深い。生徒達は、どうしてこういうテーマを選んだのだろう。

① アウシュビッツを選んだ班は、最初に次のような案を全員が出した。

「ベトナム戦争・中東戦争・第一次世界大戦・ナチス・日露戦争・ロシア革命・零戦について・大平首相・北里柴三郎・ピストルの歴史」。このうちには興味本位のものが含まれているが、とくに「零戦」などはやはりカッコの良いものとしてあげられたのであろう。しかし、この班では、さらに討論してナチスを取り上げることになり、「ヒットラー・ゲシュタポ・ユダヤ人の大量虐殺」があげられ、そして最後にきまったのが「アウシュビッツ」ということである。この間の討論は何回となくくり返された。次に困ったのが資料あつめである。教師側からも援助して、次の文献を手に入れた。「アウシュビッツからの手紙」「アンネの日記」「アウシュビッツと私」「夜と霧」「第三帝国の興亡」「ドイツ革命」「ナチス・ドイツ」。これらの本を全員がまわしてよみ、構想を話合った。この間の時間数は大変なものがあった。

〈生徒の日記から〉

12月11日　放課後、Sと2人で脚本5・6を書いた。それから友達が殺されるのは、ガス室でなく銃殺にした。だから妹は銃殺でなく、首つりになった。これらは写真があるので、まあ、絵はこまらないだろうと思う。しかし、非常に気持ち悪い絵であった。画用紙をもってきたので、建物などの絵を先に書くことにした。1のナチスのマークはKが、2のヒトラーの顔はTが、3の隠れ家はFが、8の地図はAが書くことになった。提出まであと2週間しかない。なんとか今週中に脚本を書いてしまわねばならない。

12月14日　7～15の途中まで脚本を書いた。非常に疲れた。よい文章がうかばない。…

あしたは英語のテストだ、なんにもやってへん。狂ってきそうだ。だれかたすけて――。

12月16日　できた――。脚本ができた。やったぁ、バンザイ。

1月4日　夜、ろく音開始。前よりかスムーズに進行した。Aがマイクを2本もってきてくれたので、スピーカーの右と左にわけてろく音。Kがむずかしい操作をしていた。私にはわからんかった。私も2、3回のミスはあったが、まあちゃんといえた。BGMも新たにきめなおした。あとは写真だけとなった。しかし、ろく音が完了したので、いく分らくになった。10時にSの家を出て各自帰宅。私んところは、Sの家から自転車で10分余りであるが、あんのじょう家族はねていた。犬はおきていた。次は1月7日に試写会。さあうまく写真はできているでしょうか。

1月7日　(とったはずの写真は、まっしろ……とりなおし！)

以上のように、この班は大きな努力をしてスライド「アウシュビッツ」を作り上げたのである。その間には、けんかあり、笑いありであったがよくとりくんだと思われる。

「アウシュビッツ」「韓国人被爆者」「五・四運動」「無窮花」「姫ゆり部隊」「若い生命」「日露戦争」「沖縄返還」などは、いずれもよく協力した作品であった。このようにみると、班長が中心となって、民主的に討議し、全員でまとめ上げてゆくことが出来た班は、戦争のカッコのよい側面ではなく、それに苦しんだ側からとらえていることは教訓的である。

② これに対して、あまりうまくゆかなかった班はどうであろうか。これらの側としては、「新撰組」「真珠湾」「連合艦隊」などがある。一見してわかるように、かなり興味本位に流れているのであるが、これらの班は全体として討論がうまく展開できなかった。その原因は、班長がジャンケンで決められたり、テーマについても、いくつかの案がだされたまゝで十分討論されないまゝ進んだところに最大の原因がある。

「連合艦隊」班の例……班長のまとめ「ジャンケンで負けて班長になってしまったので、みんなをまとめるのに必死だった。脚本を一人で作ったので、すごくしんどかった。自分の絵とか録音はちゃんとできたけれど、全体をまとめるのができなかったと思う。」このような班では、ゼロ戦の絵とかがみごとに書かれているが、全体のまとまりがまったく弱く、ストーリーと絵がバラバラになったりした。くじびきによる班編成だから、こうした班がうまれるのもやむをえないが、こういう班についてはとくに指導する必要がある。「連合艦隊」班でいうと、テストで良く出来るもの が集まりすぎたという点もあった。

6. まとめ

以上の実践から、グループにせよ、クラスにせよ、民主的な討論とまとまりを作ることが歴史のとらえ方、とくに戦争と平和の認識にとって決定的であることがわかる。これはしごく当然のことではあるが、私達はこのことをあらためて学んだように思う。

(1) 歴史スライドは、自分たちでテーマを決定し、そのテーマを学習して、自分たちなりの作

品（一つの歴史認識の結晶）にまとめ上げるものである。全体のあらすじを全員がつかむためなは、立入った学習が必要とされる。

これを討論を通じて完成することが最大の目的であり、私達の努力もこゝにおかれた。しかし、いくつかの班でこれが出来ずに終ったことが反省される。

(2) 今年度のテーマは、戦争と平和にかかわるものが多かった。上にのべたように、民主的討論が出来れば戦争についての、かなり深く正確な知識を自分たちで作り上げるのが可能であると思う。

(3) こうしたとりくみを可能にするためには、低学年からのクラス・班による自治的活動のつみ上げが必要である。何よりも班全員の協力なしには、良い作品は生まれない。このとりくみの良い点は、テストで良くできるかどうかということにはあまり関係なく、全員がそれぞれの能力を発揮できるということである。

(4) 今後の課題について

1. 明治維新から現代まで、何をとり上げてもよいという形で実施したが、今年度についていえば「戦争と平和」にかかわるものという風に限定した方がよかったかもしれない。年度ごとにテーマ別に作らせるのが良いと思われる。
2. 良い参考書、視覚的にわかりやすく、しかも生徒が読んでわかる書物が多くほしい。この点で注意されるのは、集英社などから一連の子ども向の戦記ものが出版されていることで、これが多くの生徒に読まれている事実である。これらの影響は、無視できないものがある。

（付記）・この報告は、昨年の校内研究会で発表したものに、歴史スライドづくりの分を加えたものです。この三年程、いっしょに中三を担当していただいている小路田泰直氏とは、たがいに協力し、共同でこのとりくみを進めています。ただし、この報告は、鈴木の責任でまとめたもの。）

本校における要医療災害の実態と分析

養護教諭　中　村　ハツ子

Ⅰ．はじめに

昭和45年度から46年度にかけて、全国的な高校教育の紛争のため、学校教育の場は混乱をきたした。本校もその例外ではなく、正常な日々の授業がなかなか行われない状態になった。

毎日のケガの件数が多くなり、また、気分不良、頭痛、腹痛を訴える生徒が続出し、保健室はいつも生徒であふれているような状態であった。生徒達は精神的不安のため、落着きがなくなり、その結果、注意力散漫がひきおこす大きな傷害が続いて起こった。そのため、昭和45年の後半から46年の前半にかけての災害発生は、過去11年間（昭和45年～昭和55年）のうち、最も多い件数となっている。そのうち、クラブ活動、体育の授業時、休憩時間でのケガが目立っている。

高校紛争解決に向って、教師集団が一致して努力した甲斐もあって、昭和47年頃より、本校にも平常の落着きがもどってきた。更に、昭和49年度より中・高６年一貫教育が導入され、高校入試がなくなったため、生徒達にも、精神的余裕がみられるようになった。しかし、６年一貫教育のマイナス面も生じた。生徒は高校入試がなくなったため、学校のぬるま湯的ムードに安住し、緊張感がなくなり、集中力のない生徒が多くみられるようになった。そのあらわれが、授業時、クラブ活動持の大きな傷害の増加となっている。

Ⅱ．観　点

(1)　表Ⅰについて（曜日別発生件数）

昭和45年度～昭和55年度迄の11年間における学校災害の発生件数を、曜日別に中・高とも男女別に示したものである。これをみると、水曜日が比較的に件数が少ないが、土曜日になると週末の疲れと気分のゆるみで、傷害件数が多くなる。特に、土曜日の午後からのクラブ活動でのケガの発生が多くなる。しかし、学校全体の授業の時間割、学校行事の実施日、クラブ活動の練習日等の関係も関連するため、上記のことは、一概には言えない。

(2)　表Ⅱについて（月別発生件数）

月別にみると、６月に傷害発生件数が一番多い。本校では、６月に体育大会がおこなわれるので、そのための練習が活発になることも一つの要因である。また、体育大会当日のケガの発生も多い。また、４月からの新メンバーでのクラブ活動が、６月頃になって、盛んになることも、その要因であると思われる。６月に次いで、９月、10月に件数が多くなる。９月には学園祭準備、10月には球技大会が行われるためである。

(3) 表Ⅲについて（活動別発生件数）

クラブ活動が第1位で148件、全体の約40%を占めている。次に授業時の116件（約32%）で、体育の授業中が最も多い。

(4) 表Ⅳについて（種類別発生件数）

種類別にみると、挫傷が133件で、次に骨折が86件と多い。骨折の部位は主に手指、次いで足指、腕、下腿部、鎖骨、膝蓋骨の順である。

手指（29件）、足指（18）、腕（5）、下腿部（5）、鎖骨（5）、膝蓋骨（5）、肩甲骨（2）、尺骨（2）、その他（15）である。

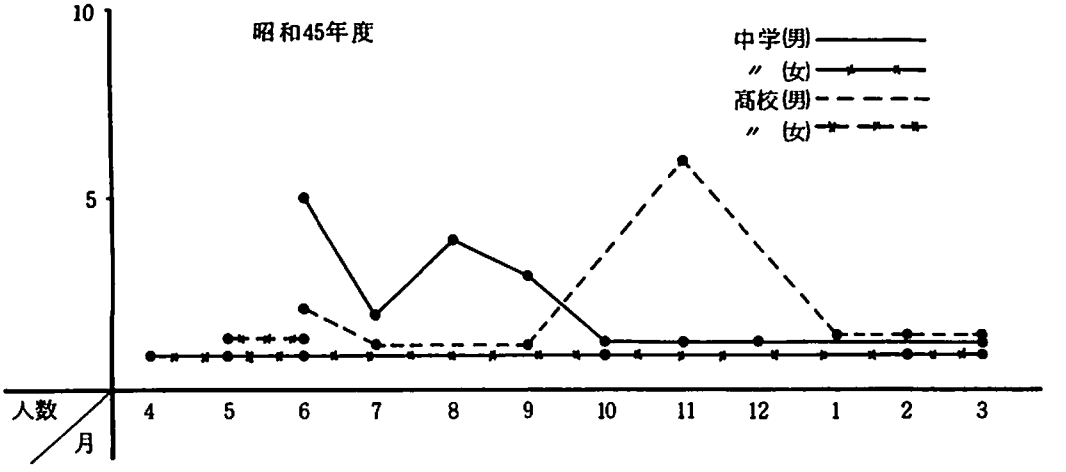
表Ⅰ　曜日別発生件数

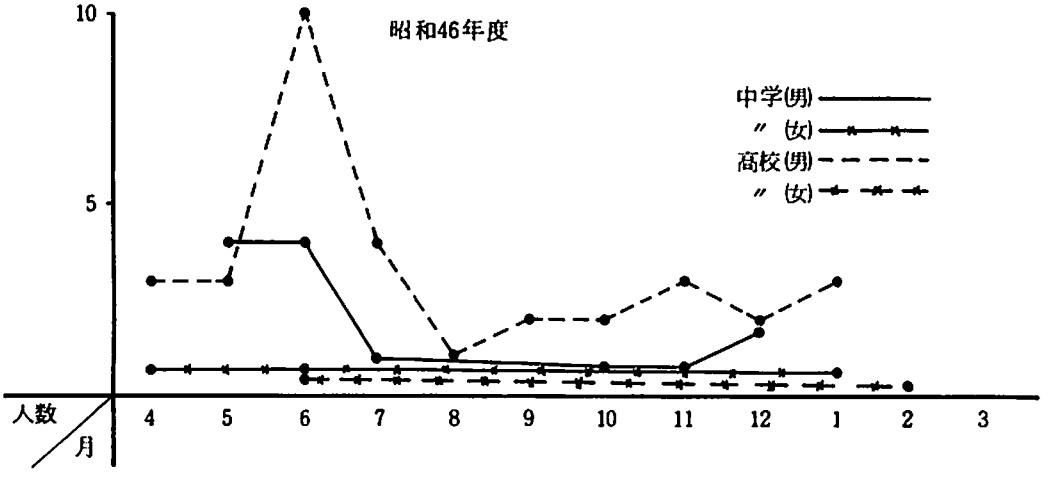
	月		火		水		木		金		土		日		
	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	
	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	計
45年度	2 1	1	3	2 1	1	2	4 2	6	3		3 2	3 2	1		39
46年度	6	6	3 1	4 2	1	4 1	1	5	1 1	2	2 1	9	1		51
47年度	1 3	2	4 1	2	2		3	1	3	2	4 1	2 1			32
48年度	3	2	2 1	1 2	2	3	2	4	6 1	1	2 1	1		1	35
49年度	1	3	1	3		4	1	4	3		6	1	1		28
50年度	1	2	1	5		1	1	2	4	2 1	1	2		2	25
51年度	1		1			1	2 2	1	3 2	3	1	2	2	2	23
52年度	1 1	1	2	3	2	3	2	3	2 1	4	1		1	1	28
53年度	5	1	1 1	1	1 1	2	2 3		2		4 2	1	4	1	32
54年度	1 3		3	4 1	1	3	4	1	1	2 1	4 1	3			33
55年度	1	1	4	2		2 1		9	2 3	7 1	2	5		1	42
	23 8	19 0	23 6	26 7	8 3	25 2	21 8	35 1	30 8	22 4	28 10	29 4	9 1	8 0	
	31	19	29	33	11	27	29	36	38	26	38	33	10	8	
	50		62		38		65		64		71		18		368

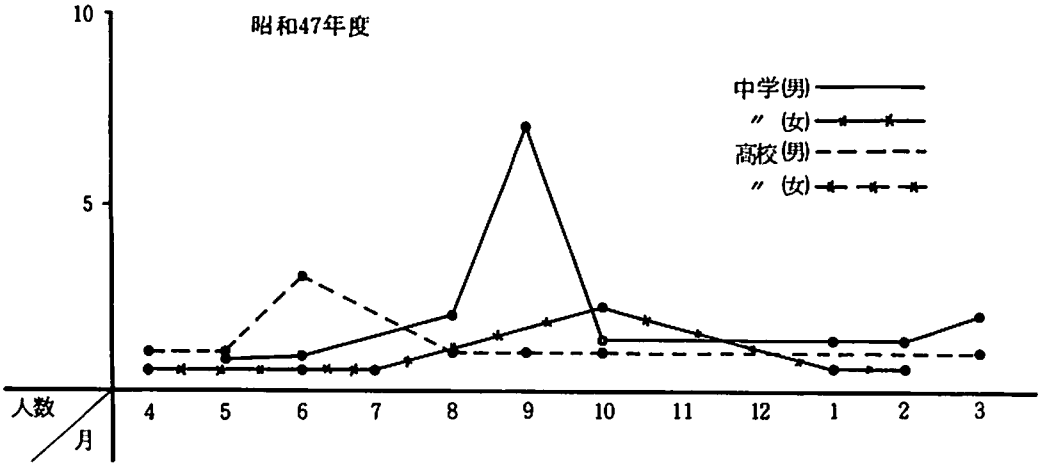
表Ⅱ．月別発生件数

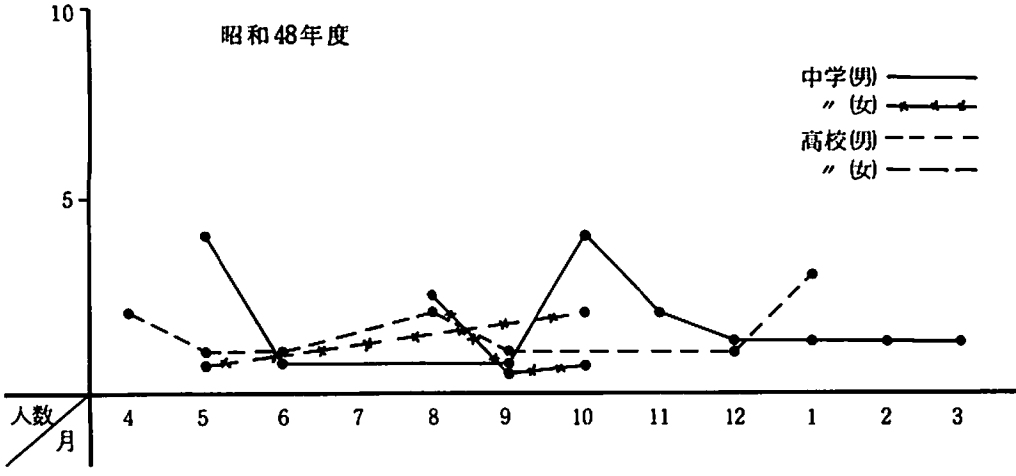
	4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月	
	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校
年度	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀	♂ ♀
45	1		1	1	5 1	2 1	2	1	4		3	1	1 1		1	6	1			1	1	1	1 1	1
46		3 1	4	3	4 1	1	1	4		1		2	1	2	1	3	2	2	1	3		1		
47	1	1	1	1	1	3 1	1		2	1	7	1	1 2	1					1 1		1 1		2	1
48		2	4	1 1	1	1	1		2	2	1 1	1	4 1	2	2		1	1	1	3	1		1	
49			3			2	2	1			1	2		5	2	3		1	4	2				
50			2	1 1	1			1			2		4	1		1 1	1	2	1	3		2		1
51			2		1	2				2	1 1	2	1	2	2 1	1	1 1		1		1	1		
52	2		1	1	1	5			1	3	1 1	1	1 1	2		1				2	2	1	1	
53	1 1	1	3 1	1	2	1	1	1	1	1	1 1	2	1 1		2				4 1		2	1	1	
54	1		1		3	1	1	1			1	3	3	1	2	6	1		2 3			2		
55		1	1	1 1	4 1	4 1		1		2	2	3 2		3	1	4			1	4		2	1 1	1
	16		37		61		20		22		44		42		41		14		39		20		13	

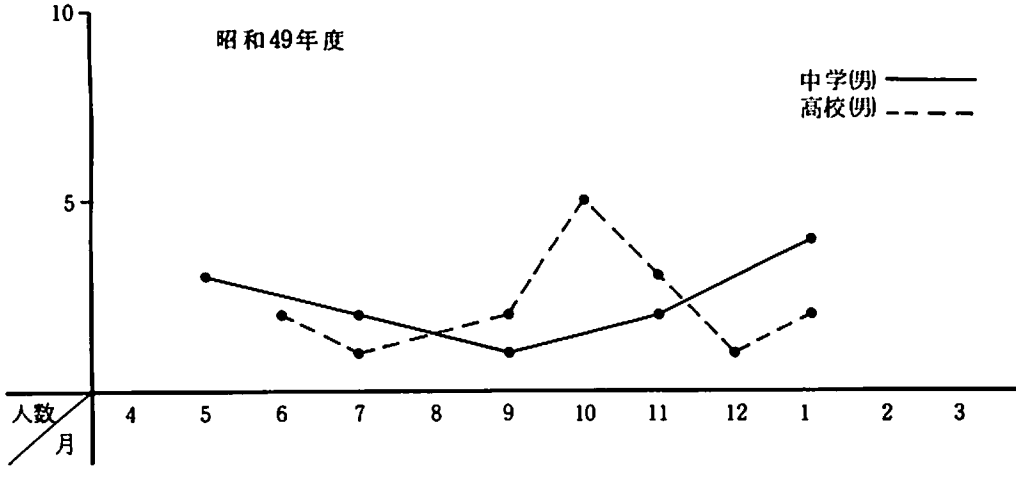
表Ⅱをグラフで表したもの

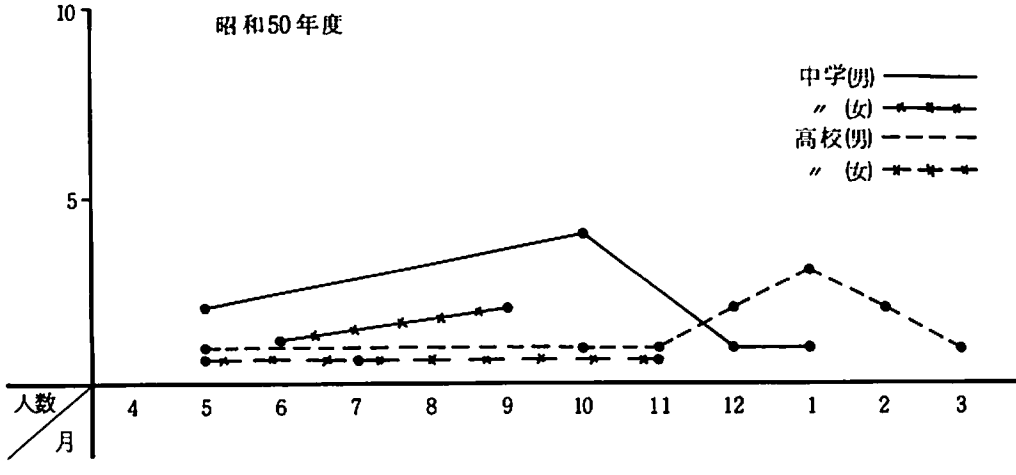


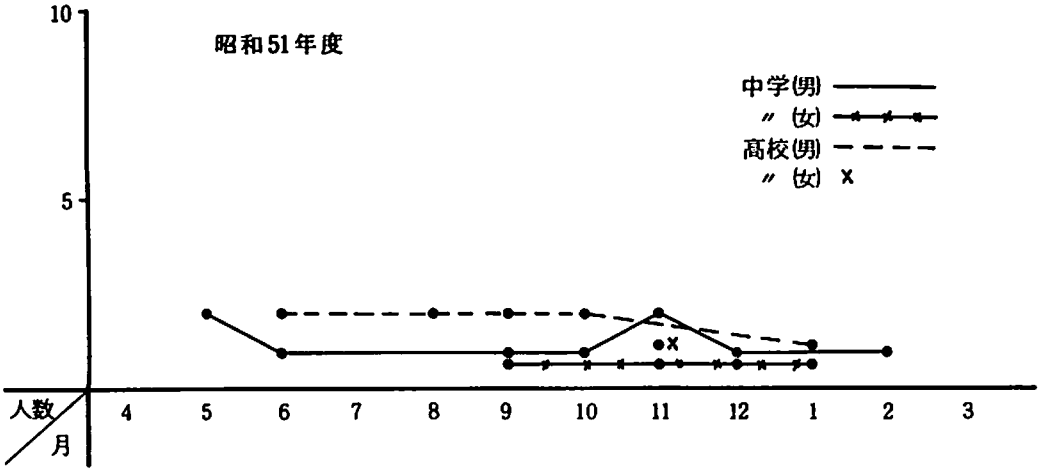


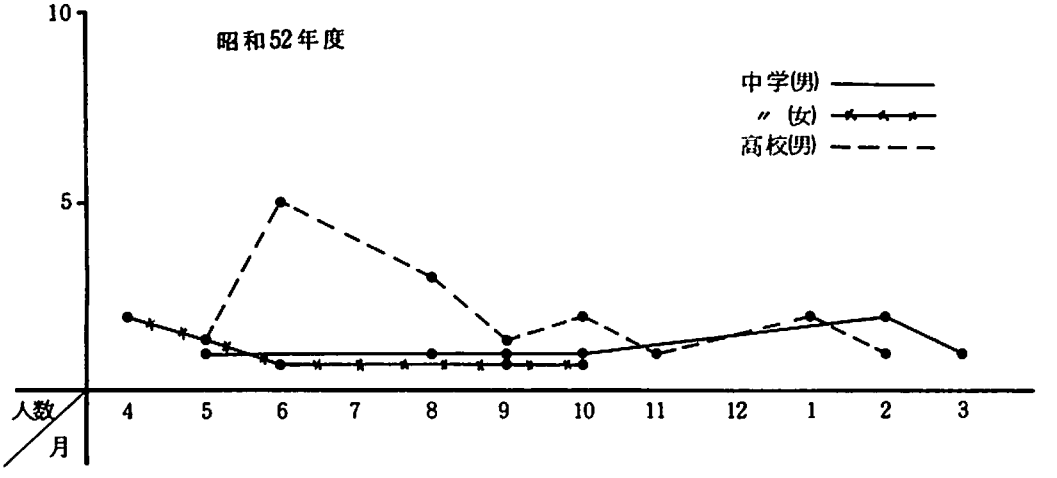


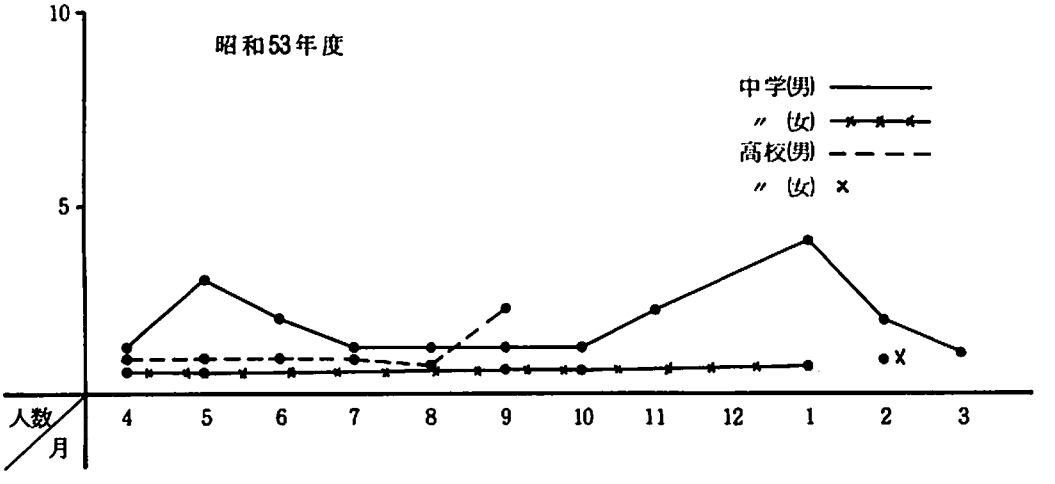

昭和48年度
中学(男)
〃 (女)
高校(男)
〃 (女)
10
5
人数
月
4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3

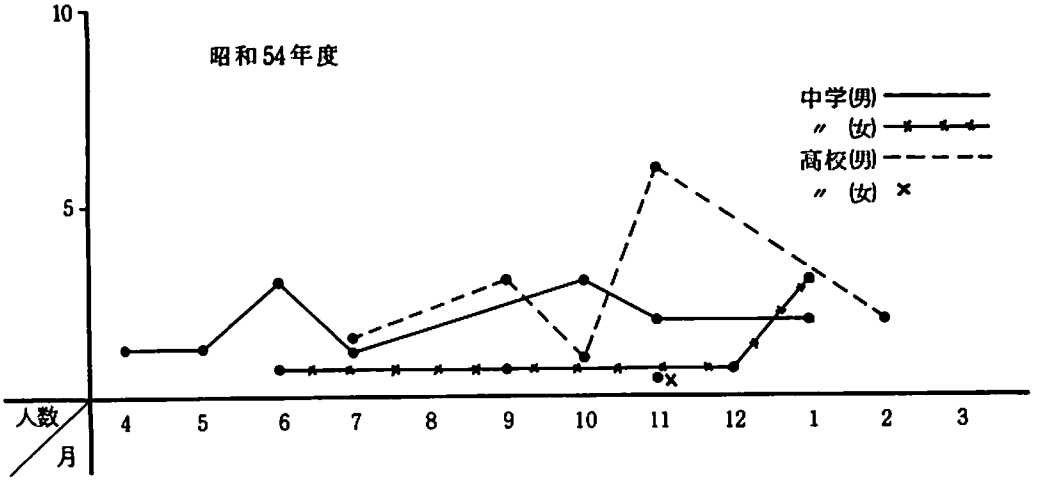

昭和49年度
中学(男)
高校(男)
10
5
人数
月
4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3

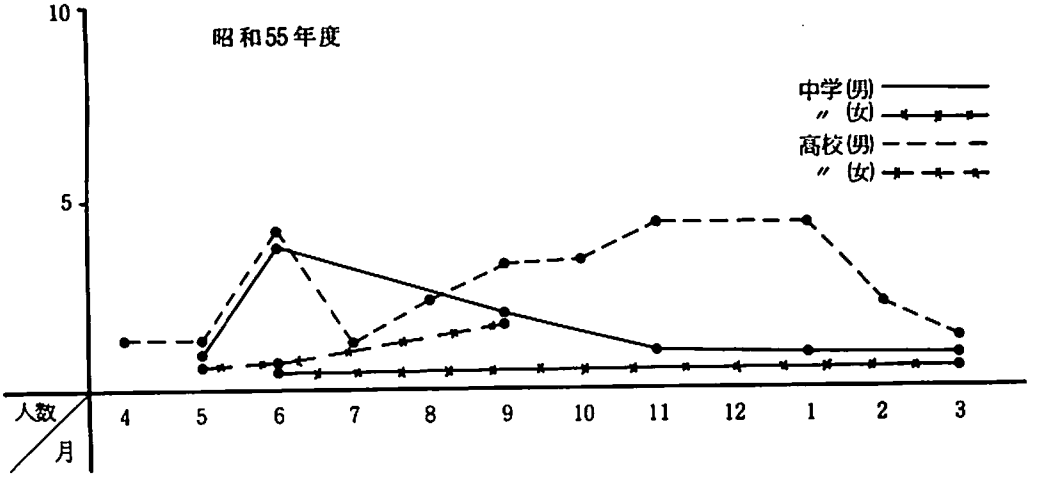

昭和50年度
中学(男)
〃 (女)
高校(男)
〃 (女)
10
5
人数
月
4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3


昭和51年度
中学(男)
〃 (女)
高校(男)
〃 (女)
10
5
人数
月
4
5
6
7
8
9
10
11
12
1
2
3


昭和52年度
中学(男)
〃 (女)
高校(男)
10
5
人数
月
4
5
6
7
8
9
10
11
12
1
2
3


昭和53年度
中学(男)
〃 (女)
高校(男)
〃 (女)
10
5
人数
月
4
5
6
7
8
9
10
11
12
1
2
3


昭和54年度
中学(男)
〃 (女)
高校(男)
〃 (女)
10
5
人数
月
4
5
6
7
8
9
10
11
12
1
2
3

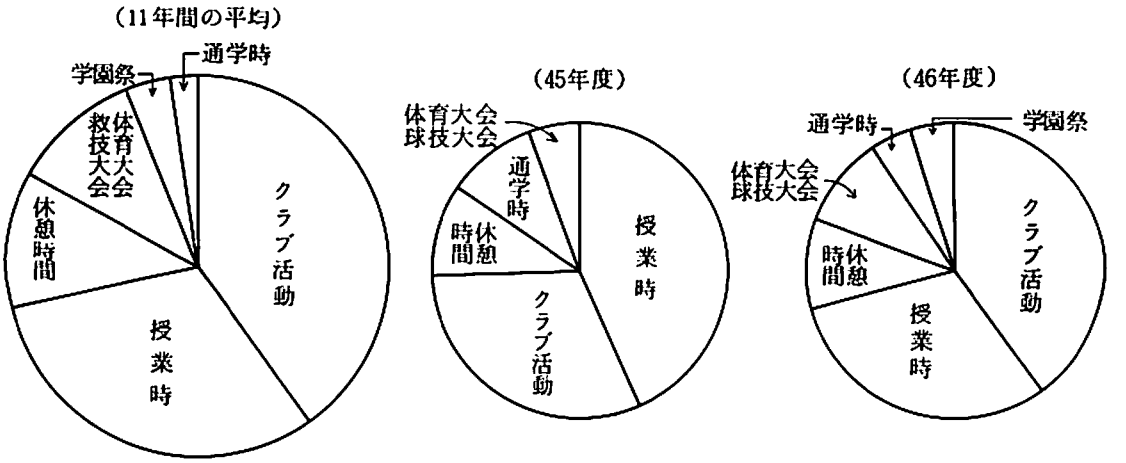

昭和55年度
中学(男)
〃 (女)
高校(男)
〃 (女)
10
5
人数
月
4
5
6
7
8
9
10
11
12
1
2
3

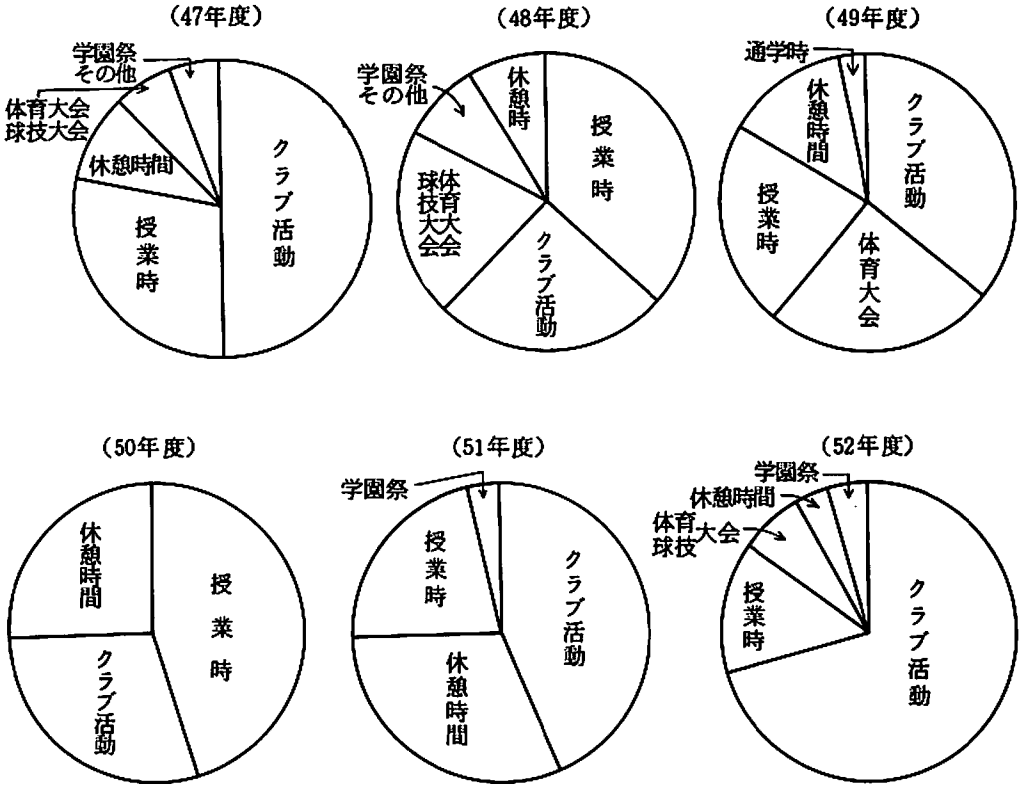
表Ⅲ．活動別災害発生状況

年度	クラブ活動	授業時	休憩時間	通学途上	体育球技大会	学園祭その他
45	12	17	4	4	2	
46	20	16	5	2	5	3
47	16	9	3	0	2	2
48	9	13	3	0	7	3
49	10	6	4	1	7	0
50	8	11	6	0	0	0
51	10	5	7	0	0	1
52	20	4	1	0	2	1
53	17	7	1	3	2	2
54	12	12	3	0	6	
55	14	16	4	0	6	2
	148	116	41	10	39	14

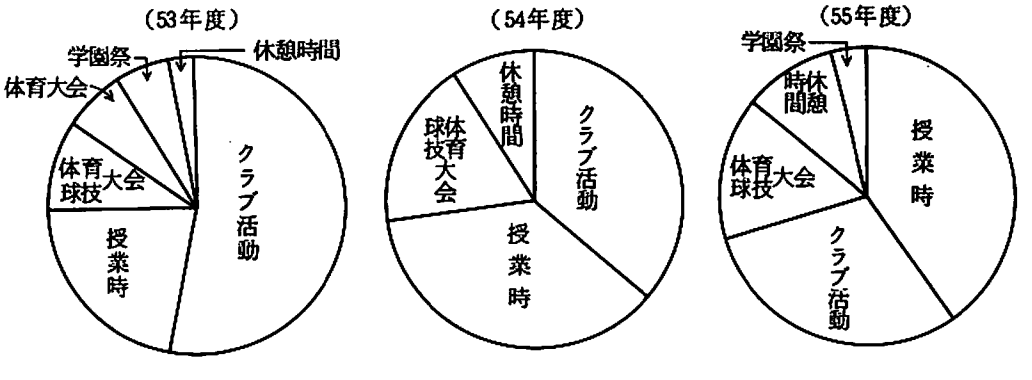
表Ⅲをグラフで表わしたもの

活動別災害発生





※48年度、49年度は体育大会で、棒引き、棒倒しが行なわれたため計7件の歯牙破折などが発生した。そのため、体育科と話し合い両種目を50年度より実施種目からはずした。その結果、50年度、51年度においては、体育大会の障害はなくなった。



体育大会、球技大会での傷害が多くなっている。

（全体的にみて、クラブ活動時が第1位であるが、授業時の傷も年度によっては第1位を示している。
又、体育大会、球技大会での大きな傷害（骨折その他）も増加している。）

表Ⅳ．種類別発生件数

年度	校種		骨折	つき指	脱臼	歯牙損傷	挫傷	捻挫	打撲	眼部打撲	外傷炎関節炎	切傷	
45	中	♂	4				5	2	3			6	39
		♀	1				2		1			1	
	高	♂	1	1	1		5			3		1	
		♀							1		1		
46	中	♂	2		1	2	6	1	2		2	3	51
		♀	1				1						
	高	♂	3	1	1		15	2	2		2	1	
		♀			1		2						
47	中	♂	5		1		6	3	1	1			32
		♀				1							
	高	♂	2		1	2	6		2			1	
		♀											
48	中	♂	7			1	7	1	2				35
		♀					1	1					
	高	♂	7				2	1	1				
		♀				3						1	
49	中	♂	5				5					4	28
		♀			1								
	高	♂	4			1	6	1				1	
		♀											
50	中	♂	3			1	3		1				25
		♀					1		1				
	高	♂	2			2	4	4				1	
		♀	2										
51	中	♂	2				3	1	3				23
		♀	1	1	1		1						
	高	♂	2			1	3	1	1	2			
		♀											
52	中	♂	2				4			1		1	28
		♀				1	1						
	高	♂	6			2	6		2				
		♀				1	1						
53	中	♂	6	1	2	1	8	2			1		32
		♀	2			1	1	1					
	高	♂	1				5						
		♀											
54	中	♂	3		1	1	5	3	1				33
		♀	2	1									
4	高	♂	1		2		2	4	3				
		♀	1	1			1	1					
55	中	♂	5				5	3	3			1	42
		♀				1							
	高	♂	3				8	4		4			
		♀					2	2				1	
			86	6	13	22	133	38	30	11	6	23	368

Ⅲ. おわりに

昭和45年4月、本校に赴任してから、昭和55年3月末現在までの11年間を調査対象にした。この間、学校災害の安全会提出件数は368件にのぼった。災害記録を読み返してみて、ほとんどの傷害が生徒の不注意、集中力の欠除にあることがわかる。傷害の発生時の状況について、生徒、教師から報告を聞いても、避けることの出来ない傷害は、ほとんどない。生徒個々に対して、その都度、安全について指導はしているものの、ケガをしてからの指導では、どうにもならない。生徒は、ケガをした直後は、気をつけるが、ケガをする生徒は、幾度もケガをくり返す。このような現状を前にして、集団的に安全指導を行うにはどうしたらよいのか、悩みは多い。一つ一つの事例を参考に、今後の問題として、学校保健、健康教育、保健安全指導を関係者とともに、さらに推し進めて行かなければならないことを痛感する。

中学校「特活・道徳」の時間の利用について
実践記録と反省

昭和52年度入学生担任
辻　本　美奈子　・　奈　良　重　幸
藤　川　宣　雄

1. はじめに

昭和52年度入学生を3年間担任して来たのであるが、担任を離れて、この3年間の「特活・道徳」の時間をどう運営して来たかを振り返り、実施記録をもとに「特活・道徳」の取り扱いについて校内研究会に報告した。理由としては、1つは、本校が6ケ年一貫教育カリキュラムを実施して来た中で、「学校行事のあり方」については一応の結論を得ているものの（本校、研究紀要第16集1974）、この「特活・道徳」の時間の取り扱いが担当学年の独自性に任されて来た事が良くも悪くも作用している事や、また、もう1つは、全員が本校の高等学校の課程に進学するという特殊な事情をもち、この中での中学課程でのこの時間の取り扱いについては種々の問題を含んでいるものと考え、実施して来たあとを述べたいと思う。

まず、本校の教育課程は右表の如く、中1では「特活」2時間「道徳」1時間、中2、中3では「特活」1時間、「道徳」1時間である。これらのうち、各学年「特活」の1時間は木曜日6限目にとり、クラブ活動に当てる。残りの時間、中1では「特活」「道徳」各1時間を、中2、中3では「道徳」1時間を各学年単位で設定されている。

中学入学生は、本学付属小学校から50名、他の86名は選抜により入学して来る。男女はほぼ均等で、1学級45名を基準に男女半数ずつで編成する。学年ごとに新しく学級編成を行う。担任は通例3年間続けて担当し、これに各学級1名の副担任がつく。（中高併設校なので教官は中学校・高等学校の両方の授業を担当するので、副担任は学年ごとに変ることがある。）計6名が直接、一学年の生徒を担当するしくみになっている。3名の担任の教科は、辻本が中学の技術・家庭科と高校の家庭科、奈良は中学校、高校の保健・体育科を、藤川は中学校の理科と高校の化学を、それぞれ担当している。

教育課程

	中学		
科目	1年	2年	3年
国語	5	4	5
社会	4	5	4
数学	4	4	5
理科	4	4	5
英語	4	4	4
保健体育	3	4	4
音楽	2	2	1
美術	2	2	1
技術家庭	3	3	3
特活	2	1	1
道徳	1	1	1
計	34	34	34

2. 実施記録

昭 和 52 年 度　　1 年

月/日(曜)	活動単位 学年	活動単位 組	場　所	内 容（資 料）	備　考
4/19(火)		○	各H・R	校外学習班分け、役割分担	4/11 入学式
4/21(木)	○		体育館	フォークダンスの練習	渡辺先生指導 4/12 クラブ紹介
4/26(火)	○		各H・R	校外学習役割毎の打ち合わせ	4/12 身体測定
4/28(木)	○		視聴覚教室	校外学習説明（プリント）	4/28 内科検診
10(火)		○	各H・R	一泊行事の反省・会計処理（班毎）（プリント）	5/4～5 一泊行事 5/8 市民体育大会
5/12(木)	○		木工室	学園祭の説明（スライド）	生徒会役員による。
5/17(火)		○	各H・R	中間考査について、勉強のし方	
5/19(木)	○		プール西空地	畑作り（開墾）	
5/23(月)	○		視聴覚教室	映画「かけがえのない地球」 「セロ弾きのゴーショ」	A・B・C組の自習をまとめてH・Rとする。感想文を提出させる。
5/24(火)		○	各H・R	生活に関するアンケート調査	5/26～28 中間考査
5/31(火)		○	各H・R	アンケート集計整理（班毎）	
6/2 (木)	○		畑	さつまいも植え	6/2 学芸発表会
6/7 (火)	○		視聴覚教室	校外学習の映画	6/9 体育大会
6/14(火)		○	各H・R	討論「勉強はなぜ必要か」	中間テスト反省文を材料とする
6/16(木)	○		体育館	スポーツ	日脳予防接種のため一部不参加
6/28(火)		○	各H・R	話合い「学校生活について」	6/21~23 期末考査
6/30(木)		○	各H・R	学園祭の役割り分担	6/26 市中学校総合体育大会
7/5 (火)		○	各H・R	生活に関するアンケート結果について	7/2～15 教育実習
7/7 (木)		○	各H・R	礼儀について（録音教材） 学習祭の話合い	教育実習生司会
7/12(火)		○	各H・R	夏休みの過ごし方・計画表作成提出	点検後返す
7/14(木)	○		畑	いも畑の草引き	7/8 終業式
9/6 (火)		○	各H・R	二学期の予定（行事表）	9/1 始業式
9/8 (木)		○	各H・R	学園祭の説明	9/2～16 教育実習
9/13(火)		○	講堂・H・R	学園祭の練習	
9/20(火)		○	講堂・H・R	同 上	9/21～23 学園祭
9/27(火)		○	各H・R	学園祭反省会	反省文提出 9/24 代休
9/29(木)		○	各H・R	生徒会役員選挙	
10/4(火)		○	各H・R	観劇ガイダンス・学校生活の反省	10/5 観劇「奇蹟の人」

月/日(曜)	活動単位		場所	内容（資料）	備考
	学年	組			
10/6 (木)	○		畑	いも畑の草取り	
10/11(火)	○		体育館・B地区	スポーツ	10/14 球技大会
10/13(木)	○		畑・木工・化学・被服室	花壇作り	
10/18(火)		○	各H・R	オリエンテーリングの班分けと説明	
10/20(木)	○		花壇	花壇作り・植えつけ（プリント）	10/27 中間考査
10/25(火)		○	各H・R	オリエンテーリングのコース決定・登録	10/31 全校リクレーション
11/1 (火)		○	各H・R	オリエンテーリングの班別反省	11/2 写生会
11/8 (火)	○		畑	いも掘り	
11/10(木)	○		講堂	音楽会練習	
11/15(火)	○		講堂	音楽会練習	11/7 音楽会
11/22(火)	○		視聴覚教室	映画鑑賞「おもいやり」	感想文提出・文集作成
11/24(木)	○		畑・調理室	いも収穫祭・試食・玉葱植え	
11/29(火)		○	各H・R	いも作りの反省	
12/1 (木)	○		視聴覚教室	映画鑑賞「ささえあい」	
12/6 (火)		○	各H・R	テスト前の補充授業（理・家・体）	12/8～10 期末考査
12/13(火)	○		視聴覚教室	映画鑑賞「パラリンピック東京大会	
12/15(木)	○		体育館・B地区	スポーツ	
12/20(火)		○	各H・R	冬休みの過ごし方について	12/24 終業式
1/10(火)		○	各H・R	3学期の予定について	1/9 始業式
1/12(木)		○	各H・R	3学期のホームルームについて班分け	
1/17(火)	○		B地区	耐寒かけ足(1)	毎日の記録表作成
1/19(木)		○	物理・被服・視聴覚教室	百人一首かるた会	
1/24(火)	○		体育館	耐寒かけ足(2)	
1/26(木)	○		物理・被服・視聴覚教室	百人一首かるた会	
1/31(火)	○		B地区	耐寒かけ足(3)	
2/2 (木)	○		尾花劇場	映画「マイウエイ」「小さな赤いピー玉」	3・4限カット
2/7 (火)	○		B地区	耐寒かけ足(4)	
2/9 (木)	○		視聴覚教室	映画	
2/14(火)	○		B地区	耐寒かけ足(5)	
2/16(木)	○		飛火野周辺	耐寒かけ足(6)	
2/21(火)		○	各H・R	親への手紙（1年間の反省を親宛の手紙として書く）	2/23～28 期末考査 3/6～7 標準学力テスト 3/18 終業式

昭　和　53　年　度　　2　年

月/日(曜)	活動単位 学年	活動単位 組	場　所	内　容（資　料）	備　考
4/13(木)				（標準学力テスト）	
4/20(木)				（眼科検診）	
4/27(木)				（内科検診）	
5/ 4(木)	○		視聴覚教室	一泊行事の準備	他学年は全校リクリエーション
5/11(木) 5/12(金)		○	大和郡山市「青少年の家」	一泊行事	学年行事
5/18(木)		○		一泊行事反省会	
5/25(木)				（中間考査）	5/24～27　中間考査
6/1 (木)			本校運動場 本校体育館	（体育大会）	学校行事
6/8 (木)				（学芸クラブ発表会）	
6/15(木)		○	各H・R	ＰＴＡ行事「親と子の対話」	親と子それぞれ３グループに分れての対話集会
6/22(木)				（期末考査）	6/21～24 期末考査
6/29(木)				（歯科検診）	
7/6 (木)		○	各H・R	学園祭について	
7/13(木)		○	〃	作文「一学期の反省」	
9/7 (木)		○	〃	学園祭（劇の練習）	9/17～18　学園祭
9/14(木)		○	〃	〃	
9/21(木)		○	〃	学園祭の反省会	
9/28(木)		○	〃	遠足の計画	
10/5 (木)		○	各H・R	遠足の計画	
10/12(木)			体育館	生徒大会（予算）	
10/19(木)		○	各H・R	遠足「オリエンテーリング」について	
10/26(木)				（中間テスト）	10/25～27　中間考査
10/30(木)			当の尾の里	遠足	学校行事・班別行動
11/2 (木)		○	各H・R	音楽会の練習	
11/9 (木)				（校内音楽会）	
11/16(木)		○	各H・R	各作業グループの話し合い	
11/30(木)		○	〃	〃	
12/7 (木)				（期末テスト）	12/6～8　期末考査

月/日(曜)	活動単位		場　所	内　容（資 料）	備　考
	学年	組			
12/14(木)		○	各H・R	作文「二学期の反省」	
1/11(木)		○	各H・R	各作業グループの話し合い	
1/18(木)	○		地学教室・視聴覚教室・家庭教室	百人一首大会	
1/25(木)		○	各H・R	文集「なあ、みんな2」について	
2/1 (木)		○	各H・R	差別について	
2/8 (木)	○		視聴覚教室	映画鑑賞「自転車泥棒」	
2/15				学芸クラブ発表会	学校行事
2/22(木)	○		視聴覚教室	映画「差別と人権の歴史」	2/26～28　期末考査
3/1 (木)			講堂	生徒大会（決算）	
3/8 (木)			〃	〃　（立合演説会）	3/5.6　標準学力テスト

昭　和　54　度　　3　年

月/日(曜)	活動単位		場　所	内　容（資 料）	備　考
	学年	組			
4/19(木)		○	各H・R	「校内生活（規則）について」	
4/26(木)					
5/4 (木)	○		正暦寺	春の遠足	同じコースを班単位で
5/10(木)	○		各H・R	水泳訓練班別打合せ	
5/17(木)	○		視聴覚教室	水泳訓練オリエンテーション	過去に実施した記録（8ミリ映画とスライド）
5/24(木)				（中間考査）	
5/31(木)	○		各H・R	水泳訓練係別打合せ	
6/7 (木)				（全校　歌舞伎鑑賞会）	県文化会館
6/14(木)				（学芸クラブ発表会）	16日　学年PTA
6/28(木)	○		各H・R	水泳訓練係別打合せ	
7/5 (木)		○	各H・R	学園祭の話し合い	展示テーマについて
7/12(木)	○		視聴覚教室	水泳訓練諸注意と連絡	7/25～27　水泳大会

月/日(曜)	活動単位		場　所	内　容（資料）	備　考
	学年	組			
9/6 (木)	○		各H・R	水泳訓練係別反省会	
9/13(木)				(生徒大会)	
9/20(木)		○	各H・R	学園祭準備作業	9/22～23　学園祭
9/27(木)		○	各H・R	学園祭反省会	
10/4 (木)		○	各H・R	秋の遠足コースについて	10/30　曽爾高原
10/11(木)		○	各H・R	遠足の班分け、役割分担	(秋の遠足)
10/18(木)				(台風のためなし)	
10/25(木)				(中間考査)	
11/1 (木)		○	各H・R	校内音楽会の練習	
11/8 (木)				(校内音楽会)	コンクール形式
11/15(木)	○		B地区	球技大会練習	
11/22(木)	○		各H・R	作業班について再検討	2年からの続き
11/29(木)		○	各H・R	「学校の規則」(服装等について)	V.T.R「落とした手帳」の視聴
12/6 (木)				(期末考査)	
12/13(木)	○		講堂	映画鑑賞「砂の器」	中1.中2と合同
12/20(木)		○	各H・R	二学期の反省会	作文
1/10(木)	○		各H・R	作業班別で内容の検討	
1/17(木)				(生徒大会)	
1/24(木)	○		各H・R、技	作業班別製作	
1/31(木)	○		家教室等	同上	
2/7 (木)	○		各H・R等	作業班別製作	
2/14(木)				学芸クラブ発表会	
2/25(木)	○		視聴覚教室	西門民江氏の講和	
2/28(木)	○		〃	高校進学の為のガイダンス	教務課教室
3/6 (木)				(生徒大会)	

3. 宿泊行事と全校レクリェーション

一貫教育委員会（教官5名）や教官会議での「六年一貫教育における宿泊行事と全校レクリェーション」についての取り決めは次のようなものである。

宿泊行事

㋐　中1、一泊行事

㋑　中3、水泳訓練（2泊3日）

⑦ 高2、修学旅行（5泊6日を限度とする）

全校レクリェーション

⑦ 年2回、計画された日に実施できるプランをたてる。（本校研究紀要、第16集、1974年）

ところで、この学年は中学2年時においても「六年一貫における宿泊行事」にはない一泊行事を行っている（この特別プログラムについての理由は── 指導経過と内容── のところに記してある）。

中1・中2・中3の各学年で宿泊行事やレクリェーションの実施に際し、常に「ねらい」として掲げたのは── グループ活動におけるそれぞれの役割分担を通じて、自主的な態度を養う── ということである。

(1) **宿泊行事**

① 参加形式と内容

	中学1年		中学2年		中学3年	
日時 場所	昭和52年5月4日 ～5月5日 青少年野外活動センター 山辺郡都祁村吐山		昭和53年5月11日 ～5月12日 少年自然の家 大和郡山市		昭和54年7月25日 ～7月27日 決詰・夕日ケ浦海岸 京都府竹野郡網野町	
ねらい	自然に親しみ、グループ活動を通じてよい友人関係を育て、規律のある行動をする。		自然に親しみ、郷土の歴史に触れると共にグループ活動を通じて自主的な態度を養う。		水泳によって心身を鍛え、海に親しみ、集団活動を通じて自主的な態度を養う。	
活動グループ（役割分担）	1グループ、7～8人 （班長・副班長・食事・レクリェーション・用具・美化・保健）		1グループ、13人～14人の男女合併 （班長・副班長・食事・レクリェーション・用具・美化・保健・火・調理）		1グループ、7～8人 （班長・食事・レクリェーション・おやつ・入浴・保健）	
「道徳」の時間の活用	4/19 4/21 4/26 4/28 5/4 5/5 5/10	行事説明と班毎の役割分担 レク用・フォークダンスの練習 各役割ごとに集合・打合せ 各班ごとの最終打合せ （野外活動センター） 各班ごとの反省・自炊会計処理	5/11 5/12	（少年自然の家） 〃	5/10 5/17 5/31 6/21 6/28 7/12 7/25～7/28 9/6	各班別打合せ 「水泳訓練」記録8㎜映画とスライド鑑賞 班別打合せ 学年ＰＴＡ・水泳訓練について 各係別連絡会 各係別連絡会 （水泳訓練） 〃 反省会
			その他：色々な打合せ連絡等は終りの会を利用			

	中学1年	中学2年	中学3年
「道徳」の時間の活用	その他：色々な打合せ連絡等は終りの会も利用		その他：色々な打合せ連絡等は終りの会・掲示等も利用
引率教官	8人	7人	23人（付添医師1人助手14人）
1人あたりの参加費用	3,000円	2,500円	17,000円

② 指導経過と内容

中学1年	中学2年	中学3年
色々な小学校から集まっている生徒それぞれが、活動を通してふれあい、お互いを知る良い機会である。このことをグループ分けに際しては生徒に強調し、以下のことを指示した。 ㋐ グループは男女混合班とする。 ㋑ 仲のいい者同志でグループを組まない。一旦決まったら変更はみとめない。 ㋒ 役割分担を決める時は仕事内容を知った上でよく話し合って決める。	昨年度、三学期の担任打合せ会で —— 集団行動が下手 ㋐ 何時までたっても整列できない。 ㋑ 私語が多い。 ㋒ 人の話を聞こうとしない —— という反省があり、学年全体で行動する機会を特別さらに増やそう、そのために ㋐ （学内）意図的に機会を設ける。例えば、合同朝の会、ラジオ体操等 ㋑ （学外）宿泊行事をもう一度行う ということになった。 教官会議にはかった（行事予定にないということで、かなりクレームがついた）後、生徒に宿泊行事実施の主旨、目的等を説明した。グループ分けは後日、昨年同様のねらいにたって行った。 上に記した㋐（学内）云々は、宿泊行事の前日まで適当な日を選んで実行していった。	遠出しての宿泊だし水泳絡みなので以下の四点を強調し指導した。 ㋐ 自己の健康管理 ㋑ お互いへの気の配り ㋒ 遊びに行くのではない。大切な学校行事である。 ㋓ 迷惑を掛けないようそれぞれが先々のことを考えて行動しよう。 グループ（生活班）の分け方は各クラス共、クジ引きであった。

③ 反　省

生徒の反省

大抵の生徒が楽しかった、良かったという感想持っている。教官側への要望としては、もっと自由時間がほしい（水泳訓練）という程度である。生徒個々の反省として最も多いのは、毎回、毎晩遅くまで仲間と喋り、寝不足気味だったということである。その他、ルールが厳しすぎる、施設・設備が不充分、食事の内容に不満、入浴時間が短かすぎる等々、まるで家族旅行と勘違いしているのではと思えるような反省？も多い。

教官の反省

生徒達のあまりのまとまりのなさをみるにみかねたとはいえ、全般を通して、かまいすぎたかも知れない。グループ活動を通じて良い人間関係を育て、自主的態度云々に関しては少しなりとも達成しえたのかどうか疑問。

生徒の作文を読んでみると、こちらの意図とは全く反対のことをしている者も少なからずおり、当然とはいえ、集団での行動や自主的行動を養う等というものは一朝一夕にできるものではないというのが実感である。

④ 生徒の作文

文集に書かれた生徒の感想文を抜萃して掲げておく。

私の「友達づくり」

教　信　晴　江

一泊行事のころといえば、まだあまり友達もなく、友達の事も、よく知りませんでした。それで、一泊行事は友達と仲良くなる、とてもいいチャンスだったと思います。

あいにくの雨でハイキングはできず、体育館で遊ぶ事になりましたが、それをまたよかったと思います。卓球、バトミントンを目を輝かせて楽しそうにしていた子は、卓球部、バトミントン部の子です。私はバレーボールをしていましたが、最後までボールにくい下がっている内村さんを、「うまいなあ」と思い、また、「さすがバレー部」とも思いました。HRや、体育の時間には見られない一面がわかるようで、楽しい思い出になりました。

同じ部屋になったのは、出店さん、森本さん、稲田さん、中野さん、中岡さん、石内さんの6人でした。そのうち、出店さんは、小学校はちがうけど前からあっていたし、中岡さんと石内さんは、同じ小学校、そして森本さんとは、出席番号がつぎで、入学式の日に仲良くなりました。でも、写生の時から、みんなすぐ仲良くなり、冗談のきい合いをしたり、ふいをしたりしていました。私は、稲田さんと、モデルのなり合いをして、ふらなかった子とも、仲良くなることができました。

変わった一面を見たというと、キャンドルサービスの時の事があげられます。ジャンケンゲーム、あめ渡しなど、明るい雰囲気が、体育館いっぱいに広がっていました。特に、私がびっくりしたのは、奈良先生の事です。みんなの前で、何かしてもらう時に、出しものがなくて、「ざんざんぶらぶら」をおどったのです。先生のイメージとちがっていたりして、おかしいのを通りこしてすごいという感じでした。

フォークダンスの時、まだクラスの男の子も、顔と名前がようやくつながった程度だったので、この子の名前は何だ、たかなんて事を考えながらおどっていました。

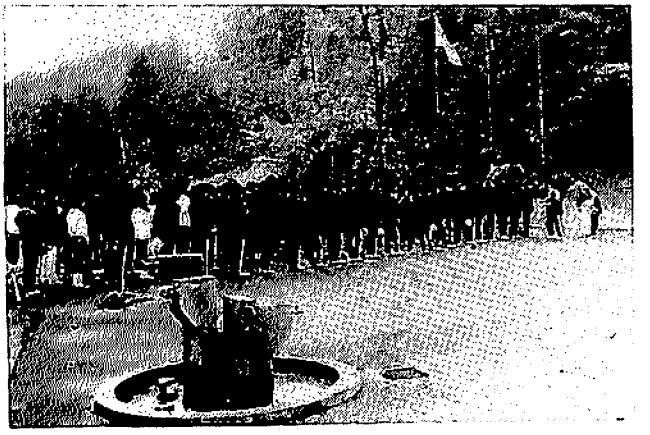
夜は静かで、スチームの音だけがひびいているようでした。ねむれない子ども、静かだからといって眠れるものではありません。自分達の知っている歌を歌ったり、順番に物語をつくったり、みんな眠れないので、

「みんなで起きとこね、先にねないでよ。」

と言っていました。

私にとってこの一泊行事は、とても楽しかった思い出であり、また、新しい友達の事を知る、いい機会となりました。普通の修学旅行とちがい、まだ、学級にも友達とも慣れていないころに行われたので、ちがった楽しさがあったと思います。一泊行事は、私の「友達づくり」に重要な役割を果たしたと思います。

文集「なゝ　みんな」（一年）より



① 一年一泊行事（於：都祁村　青少年野外活動センター）

追憶「少年自然の家」にて

岡本かず子

昭和53年5月12日の日記を捜した。そこには 中2の一泊行事のことが 記されてある。読み返してみた。すると、9ヶ月も前の出来事が、アニメーションとなって、再び思い浮かんでくる。ああ、こういう事もあったのだなあ、と。生きた場面が、再現されてくるのである。

出発の日、5月11日は 天候が思わしくなかった。矢田寺前に着いた時には、雨が降っていた。それでも 予定のコースを回った。「子どもの森」で 遊んだことを覚えている。

「少年自然の家」に着くと、すぐに入所式が行われた。続いて 部屋に案内された。男子が昆虫棟、女子が草花棟であった。天候がさえなかったので、加藤先生に 食虫植物について話してもらった。自由時間が 与えられたときは、部屋でグループの人たちと トランプをした。その時に感じたこと、それは、去年の一泊行事とは違うなあ、入浴して間もなかったあの頃は、知ってる人も少なかったけど……。今回は、あの頃、全然つき合いのなかった人たちと、トランプをしている……。友達がたくさんできて とてもうれしかった。

入浴、食事、キャンプファイヤーが 済むと 就寝時間＝自由時間だ。みんなの 待ってた時間だったように思う。先生には非常に悪いことだけど、女子のある一部の人は、みんな「たんぽぽ」の部屋に集合し、井戸端会議が始まった。見まわりの先生に気付かれぬよう、懐中電燈の光で 声を低くして、トランプをした。ずい分遅くまでやっていた。不思議なことに、先生に「寝なさい」と、注意されると、余計に起きていたくなるものである。全くスリルがあって、おもしろかった。

12日、日は高く昇り、5月の快いそよ風が……。そんな素敵な日だった。洗面、清掃、食事と あわただしかったけれど その後、そんな素晴らしい天候の中を、民俗博物館や、大和の旧家の 見学に行った。気分が うかれていたのだろう。何をすることも、何を見ることも すべてがすべて最高であった。（気候のせい？）

飯盒炊飯では 私のグループは、去年と同様、カレーライスを作った。去年より腕が上がったような気がした。

帰りのバスの中では、みんな疲れ切っていた。多分、井戸端会議のせいだろう。バスが進むにつれ、一泊行事の あとわずかな時間が 過ぎていく。私のアニメーションは、ここに全てを書くことができなかった。もっと内容深い事まで、ちゃんと覚えている。いろんなことがあった。楽しいこと、いわば「協同を共にした生活」といったようなことが、わずか 一日半という期間のアニメーションは、もうここで ピリオドを打たれた。

文集「なあ、みんな！ 2」（二年）より

② 二年一泊行事（於：大和郡山市　少年自然の家）

水泳訓練

福本雅朗

中学校に入学した頃、僕は三年生の夏休みにある水泳訓練での遠泳が、正直いって怖かった。と言うのは、その頃の僕は、クロール以外の泳ぎ方は全然知らず、平泳ぎに至っては五メートルも泳げない様な状態だったからである。しかし、今では、クロールよりも平泳ぎの方が得意になってしまったのだからわからないものである。

水泳訓練の日、集合時間には三十分も早く行ってしまい、長良橋橋内でぶらぶらしていた。近鉄特急が入って来て乗り込む時、遠泳のことは頭の中に少しもなかった。行きの電車の中ではトランプばかりや、ていだ。向こうへ着いてもぐにひとつのトラブルが起こった。それはA組の班と僕たちの班との部屋の広さが人数の差よりもはるかに大きかったからである。しばらくもめていると先生が来たので解決がつくものと思っていたら、二班いっしょに前よりせまい部屋に押しこめられた。

しばらくすると、第一回目の訓練があった。海は遠泳だと聞いていたが、想像していたものへ一メートル五〇センチくらいの深さのものが五〇メートルほど続いているとはちがって、少し沖へ出るとすぐに背がたたなくなった。

その日の夜、クーラーを強くにしたまま寝てしまったものだから、次の日の朝は完全にカゼをひいてしまって頭がクラクラしていた。午前の訓練で泳いでいる時に午後がどのようなことになるのかと思ってきて「こんな調子だったらはたして遠泳が出来るのかな？」と心配になった。

いよいよ遠泳の時が来た。男子の前の方からゆっくりと海へ入っていく。僕は男子後尾にいたので海へ入るまでに相当待たなければならなかった。いちばん嫌だったことは、波に向かって泳いでいる時、大きな波が来るとそれが大量に口の中に入り、もしそれを飲み込んでしまうとのどがヒリヒリして息ができなくなることだった。泳いでいる時の僕は、人が陸から見ると少しずつ沈没する前の大和みたいだったであろう。しばらく泳いでいると、やがて前の方が曲がりだしたのが見えた。「もう少しだ」と思ってさらに泳いでいると、海岸まで五メートルもあるのに、足がひざぐらいまでしかなくなった。あとは歩いたり泳いだりをくり返して岸についた。岸についた時、頭がボーッとしていて何が何だかさっぱりわからなかったが、しばらくしてようやく「泳げた。」ということがわかってきた。

あの時のアメ湯の味は今でも忘れられない。

文集「なあ、みんな！ 3」（三年）より

③ 水泳訓練（於：京都府網野町　夕日が浦海岸）

(2) 全校レクリエーション（遠足）

① 参加形式と内容

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">中学1年</th><th colspan="2">中学2年</th><th colspan="2">中学3年</th></tr>
<tr><td rowspan="4">日時
形式
コース</td><td colspan="2">春</td><td colspan="2">春</td><td colspan="2">春</td></tr>
<tr><td colspan="2">（宿泊行事のためなし）</td><td colspan="2">（宿泊行事のためなし）</td><td colspan="2">昭和54年5月4日（金）
徒歩遠足
（学校）～（正暦寺）～（帯解寺）～（学校）</td></tr>
<tr><td colspan="2">秋</td><td colspan="2">秋</td><td colspan="2">秋</td></tr>
<tr><td colspan="2">昭和52年10月30日（月）
オリエンテーリング
飛火野～鶯の滝～鶯塚古墳～若草山～東大寺</td><td colspan="2">昭和53年10月30日（月）
オリエンテーリング
転害門～岩船寺～争瑠寺～転害寺</td><td colspan="2">昭和54年10月30日
オリエンテーリング
太郎路～お亀池～亀山～二本ボソ～お亀池～太郎路</td></tr>
<tr><td>ねらい</td><td colspan="6">◦交通機関をできるだけ使わないようにする。
◦グループ行動におけるそれぞれの役割分担を通じて自主的な態度を養</td></tr>
<tr><td rowspan="4">活動
グループ</td><td colspan="2">春</td><td colspan="2">春</td><td colspan="2">春</td></tr>
<tr><td colspan="2">（宿泊行事のためなし）</td><td colspan="2">（宿泊行事のためなし）</td><td colspan="2">男女混合班・9人</td></tr>
<tr><td colspan="2">秋</td><td colspan="2">秋</td><td colspan="2">秋</td></tr>
<tr><td colspan="2">男女混合班、計7・8人</td><td colspan="2">男女混合班、計7・8人</td><td colspan="2">男女混合班、計7・8人</td></tr>
<tr><td rowspan="4">「道徳」の
時間の活用</td><td colspan="2">秋のオリエンテーリング</td><td colspan="2">秋のオリエンテーリング</td><td colspan="2" rowspan="2">春の徒歩遠足は、すべて終りの会や掲示板を利用</td></tr>
<tr><td>10/18</td><td>説明と班分け</td><td>10/5</td><td>説明と班分け</td></tr>
<tr><td>10/25</td><td>各班コースの決定――登録</td><td>10/19</td><td>各班コースの決定――登録</td><td colspan="2">秋のオリエンテーリング</td></tr>
<tr><td>10/31</td><td>オリエンテーリング</td><td>10/30</td><td>オリエンテーリング</td><td>10/4</td><td>班別・コース決定</td></tr>
</table>

	中学1年	中学2年	中学3年
「道徳」の時間の活用	11/1 班別反省 その他：色々な打合せ連絡等は終りの会を利用	その他：色々な打合せ連絡等は終りの会を利用	その他：色々な打合せ連絡等は終りの会を利用
引率教官	春	春	春
	6人（担任・副担任）	6人（担人・副担任）	6人（担任・副担任）
	秋	秋	秋
	7人（担人・副担任・樋口）	6人（担人・副担任）	6人（担任・副担任）
1人あたりの参加費用	春	春	春
	2,620円（一泊行事）	2,300円（一泊行事）	0円
	秋	秋	秋
	0円	0円	1,500円（バス代金）

② 指導経過と内容

中学1年	中学2年	中学3年
先先は、最初ということで担任3人で話しあった。結果・学校の近くを歩くことになった。 オリエンテーリング方式はほとんどの生徒が始めてとあって各H・Rに集まり地図を囲んで話あったりコース・タイムを気にしたりで一生懸命討論していた。	各クラスH・R委員の話しあいで候補地選びをし、その内容を終りの会で各H・Rにおろした。全員の希望を聞いた後、再度H・R委員が集って決定した。 行先はスムースに決ったもののコース決定が各班でなかなかうまくいかず、オリエーテリングが当日までもめていた班もあった。	せっかくグループ行動をさせようとしているのに途中で各班バラバラになってしまったという昨年にこりて春は団体一斉行動に決めた。グループ方式になれていた生徒の間からは「これでは小学校の遠足や」という非難の声もあがった。 秋は中学最後のレクリエーションということでこの学年

中　学　1　年	中　学　2　年	中　学　3　年
	男男女混合班にしたためか、互いに妙に意識しすぎて男子女子同志で勝手なペースで歩き、ポイントではどちらかが十数分も待たなければならないという始末であった。	としては始めて、お金（バス代）を使い遠出した。 春のレクリェーションでの不満の声を取りあげ、討議の末オリエンテーリング方式に決まった。要領を得ていたことやコースが限られていたこともあり、今回は特に問題なく行動していた。

③　反省会

グループ単位でのオリエンテーリング方式も一つ間違うと大変なことになる危険性を持っているので、教師側でのコース登録の確認・当日の車の手配、さらに前もっての十分なコース下見等が必要であり、決して楽なものではない。

生徒達は責任を持って慎重に行動しないと失敗するというわけでかなりの緊張感を味わったようだ。こういう意味ではオリエンテーリングは遠足の方式の一つとしてなかなか良いものである。

環境にめぐまれている奈良でのこと、コース選択次第で金銭を全く必要としないのも意味のあることである。

遠足

因幡佳世子

中学一年生の学校生活の中でも、特に印象の残った行事の中に、遠足があります。小学校の遠足は、先頭を歩かれる先生の後をついて歩くだけでした。だから私には自分達で地図をたよりに歩くというような活動は、始めての経験でした。

それだけに、この遠足はとても楽しかったし、おもしろかったです。

コースは、柳生街道を通ってうぐいすの滝や若草山を回って、東大寺の鏡池へ帰ってくるのです。

スタートの飛火野で、

「道に迷うといやだなあ。

などと思いながらも元気に出発しました。

始めのうちは元気だったのが、柳生街道の急な上り坂になってくると、どっとつかれが出てきました。

男子はそうでもないようでサッサッサッサと歩くのですが、女子はくたくたでたえず、

「止まって――。

「待って――。

と先を歩く男子の足を止めてばかりいました。

でも、何とか中間地点のうぐいすの滝へ着くことができました。

汗をかいているためか、うぐいすの滝は身にしみるほど冷たいでした。

残念なことにお弁当は滝で食べてはいけないとのことで、汚ない駐車場で食べましたが、皆でおやつを分け合ったり滝で遊んだりして楽しくすごしました。

班の二人が岩ですべって滝の水へ落ちるという、ささいな事故もありましたが……。

こうして、中間地点を過ぎると、楽な下り坂になったせいか、話もはずみとてもおもしろかったでした。

冗談を言い合ったり、道々おやつを交換したりして歩きました。

また、途中で道が二つに分かれている所では、班の皆がどちらへ行けばいいものかさんざん迷ったあげく、班長の

「僕は下調べで歩いた時この道を歩いて帰った。

ということばを信じ、立入禁止と書いてある、地図にもないような変な所を通りました。

最後の方は、どこをどう行ったかわかりませんが、ゴールの鏡池に着きました。

私達の班は、ABCを通じて一番早く到着することができました。

遠足は、班の人ともうちとけることができたし、とてもよい思い出になりました。

文集「な！ みんな」（一年）より

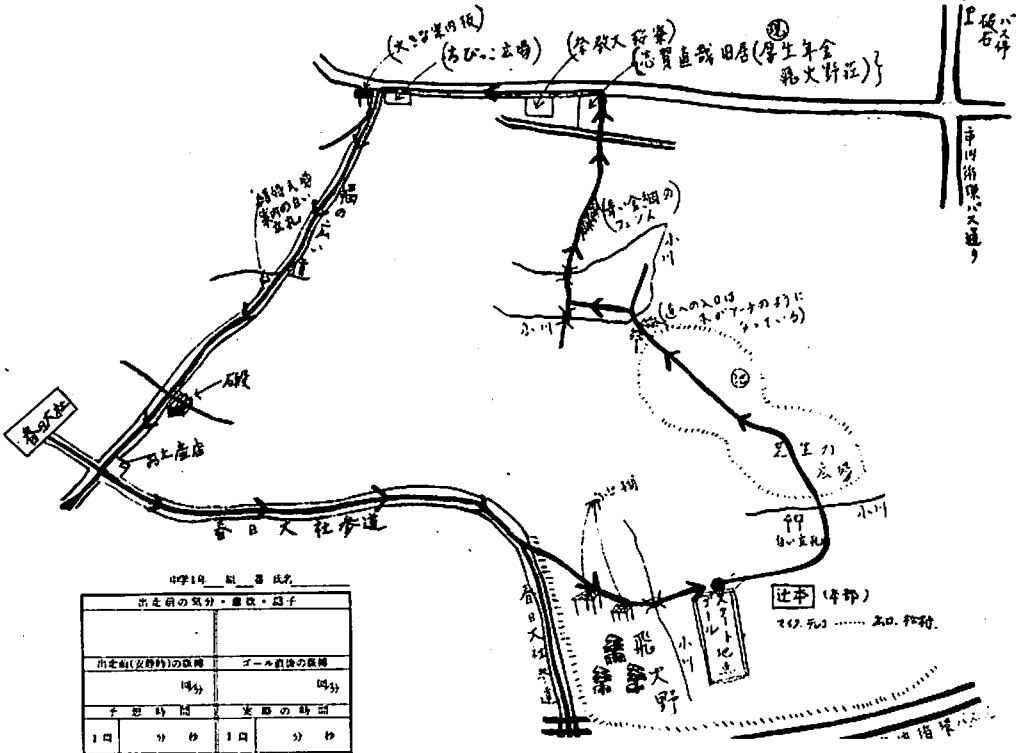
4. 耐寒かけ足

1年　冬期ややもすると部屋に引きこもりがちになる。「道徳」が火曜日の1限目なので、この時間を使って耐寒かけ足を行うことにする。担任の中に体育の教官がおることも幸いして、立案計画……。自分で予想時間を決め、その時間に合せて走れるようにする。。走る前後の気分、調子や実際にかかった時間等を個人カードに記入する。。毎回、走る距離を少しずつ増加させる。

1月17日	運動場	B地区	男子 1,000 m	女子 600 m
1月24日	雨の為	体育館内	男子 10周	女子 6周
2月7日	運動場	B地区	男子 1,500 m	女子 1,000 m
2月14日	〃	〃	男子 2,000 m	女子 1,500 m

2月16日　飛火野　（飛火野集合 → 小道 → 志賀直哉旧居 → 春日大社前 → 参道西へ → 飛火野）

計画としては、5回の短かいものであったが、凍った運動場を走ったり、飛火野から馬酔木の林を走り抜けるコースは坂あり、小道ありで、クロスカントリーのようで気分は爽快、生徒も積極的に参加し、楽しい行事であった。これからも実施したい行事である。



中学1年　組　番　氏名

出走前の気分・意欲・調子	
出走前(安静時)の脈拍	ゴール直後の脈拍
回/分	回/分

予想時間		実際の時間	
1回	分　秒	1回	分　秒
2回	分　秒	2回	分　秒
3回	分　秒	3回	分　秒
4回	分　秒	4回	分　秒
5回	分　秒	5回	分　秒

完走後の気分・調子・その他

5. 学園祭

本校では、毎年二学期に、生徒会主催による中高合同の学園祭を行っている。内容は年によって一定でないが、展示、劇、模擬店、野外部の催し等、種々企画される。

参加単位は学年又は学級を中心とし、他にクラブ単位で参加することも出来るが、中学生は学級単位が多いようである。中1、中2では自由に参加形式を決めたが、中3（昭和54年度）からは、形式を自由にすると、講堂の出し物（劇、音楽）が多くなり、時間的に消化できないという理由から参加形式が定められ、中1、中3は展示、中2は劇と決められた。

準備については全員参加を条件とし、上級生の指導（特に中1）はあるが、主として生徒中心で進められ、担任は全体的に掌握しつつ問題点を指摘したり相談にのったりする程度で、強力な指導は行っていない。

① 参加形式と内容

学年と形式 / 組	中1学級劇	中2学級劇	中3展示
A組	長ぐつをはいた猫	「リア王」	幻想の世界(光と音による)……彼等のイメージが充分こなされず、影絵・回転木馬・人形劇トンネル等おとぎの国になった。
B組	金太郎	「ベニスの商人」	現在と未来の都市……現在の都市の模型と、ファンタジックな未来都市をあらわした、少年少女らしい出しもの。
C組	金のガチョウ	「ロミオとジュリエット」	天国と地獄……彼等の提えた天国と地獄であり、受験地獄等が登場する。各1部屋づつ使い、対照的な扱いが面白い。

② 仕事の進行

学年 / 月	中1	中2	中3
5月	学園祭の説明と紹介(生徒会)		
6月	内容の決定と役割り分担	内容の決定と役割り分担	内容の話合い。各級ともまとまらず。
7月	脚本製作	脚本製作	水泳訓練の準備と重なり、仕事が進まない。
8月	役割り毎の製作と練習	役割り毎の製作と練習。ただし、7月31日までと8月21日以降とする。	クラブ練習と両立困難。能率不良
9月	22・23日学園祭 反省会	17日・18日学園祭 反省会	9月に入り集中的に仕事する 22・23日学園祭 反省会

③ 反　省

(ア) 生徒の反省

1年……大道具で手間どったグループもあったが、殆どの生徒は「しんどかったが良かった」を充実感と満足感を持ったようである。

2年……A、B、C組ともシェークスピアの大作で競演ということになったが、中1の経験を生かしてがんばった。中1の時とは雲泥の差の出来ばえに満足感を持ったようである。しかし、夏休み中の仕事等に参加しない者も多く、協力することのむつかしく大切さも痛感したようである。

3年……発表形式が展示と指定されたが、構想がまとまらず、更に今までの経験や積み重ねが全くといっていいくらい無く、その為に、上級生からの適切な指導アドバイスも得られず、自分達だけの模索の中で何とかまとめ上げたが、とてもむつかしく、全員の協力が得にくかった点を反省している。

(イ) 担任の反省

1年……学園祭の参加形式として、全員参加という点から演劇は適当である。しかし、生徒会指導部の指導があるとはいえ、中1の生徒にとって未経験な事が多く、困難点が多い。特に脚本、大道具等で、脚本は既製のものを使わず、物語りを、学園祭に適当に脚色し直し、自分達でシナリオを書くもので、彼等にははじめての経験であり、相当なエネルギーを使っている。又大道具も大がかりなもので、3坪位の大きさのもの2枚を材木で枠組みし、それに新聞紙を10枚以上貼り重ねた上にバック等を描くもので、中1の生徒には荷が重く、強力な指導が必要である。

2年……1年同様、参加形式は演劇であったが、学年としてはじめに次の点を約束させた。

1) 全員参加の徹底

2) 脚本は1学期中に完成

3) 休暇中は予習、復習やクラブ練習との関係から、学園祭関係の仕事は、7月31日迄と、8月21日以後に限定

4) 費用（生徒会補助以外のもの）は1人当り300円以内

中1の経験から自主的に準備を進めていたようであるが、1部の生徒には大道具等のしんどい仕事から逃げようとする傾向が見られたのは残念である。

3年……展示との学年指定があったものの、テーマを決める時期が水泳訓練と重なり、充分な討議がなされないまま決めてしまった。水泳訓練以前に準備にかかることは気分的に無理であり、その場かぎりの安易な方向に流れ勝ちであった。加えて展示についての具体的指導も不充分であり、又製作場所や道具も少なく、校舎や清掃用具の汚損が目についた。展示のむつかしさを痛感する。又参加形式の学年固定にも問題があるのではないかと思われる。

中１Ａ「長ぐつをはいた猫」

反省 まとめ (1)

係　名	仕事の分担	準　備　・　練　習		発　　表
		夏　休　中	9月になって	
キャスト	◦配役については大体良い。 ◦声の小さい人もあった。 ◦次男は適役、しかし印象が強すぎる。 ◦役をかねるとやりにくい。	◦連絡の不手ぎわもあり集まり不良。 ◦集合して開始までの時間が長すぎる。	◦だらだらした時あり。	成功
衣　　装		◦クラブとの両立が困難。 ◦休暇中に70％出来た。 ◦ボンドや糊でくっつける事が多かったが……？ ◦人により仕事をよくした人もあり、又、全然出て来ない人もいた。	◦早朝の時、来ていても宿題をやったりしてはかどらなかった。	◦ボロが出ないか心配だった。 ◦幕が下りて、拍手が聞こえた時「ヤッター」と思った。
大 道 具	◦骨組みは女子がしたが、男子がする方が良いと思う。	◦15日程仕事したがみんな協力せず、中３の男子と他の係の人とわずかな人数で仕事をした。	◦道具が足りないので(筆)仕事のできない人がいた。 ◦中１指導の人に頼りすぎ。 ◦仕事をする人はいつもきまっている。 ◦罰則を作って協力してもらうようにしても来ない人がいた。	◦色が全体にうすい。 ◦額も持ってもらったりしたけれど、全体としてスムーズに行きました。
中小道具	◦作れないものが多い。ライオン、槍、柱等	◦計画を立てたが実行出来ない。 ◦さぼる人多い。 ◦しても遊びながらの人が多い。		◦次の幕の準備にみんな見物に行って人手が足りない。

中１Ａ「長ぐつをはいた猫」

反省 まとめ (1)

係名	仕事の分担	準備・練習		発表
		夏休中	9月になって	
音影・効果	◦希望通り分担した。	◦充実した時間の使い方が出来ない。 ◦さぼる人(50%)多い。 ◦音楽をきめるのがむつかしい。		◦成功した。
照明	◦じゃんけんできめたが、大体良かった。	◦中１指導の人に言われ何回もやり直した。	◦９月に入ってから主な準備に入った。	うまくいった。 ◦光がゆれて見苦しい。 ◦人、１人に当てる時ひろげたら良かった。

「舞台発表（ベニスの商人）の陰で」

中井 敏治

昭和五十三年九月十八日午後三時――――――。

一生忘れることが出来ないだろう。今、幕が降りつつある。講堂の大きな幕と、拍手の渦が、キャスト達のみ込んでいった。夜現しきれない感激と並んで、約三ヶ月間の苦しく、つらい練習の思い出が脳裏に甦った。

一学期が終わろうとする寸前、二階の廊下奥にある、中二B のHRが、振動・騒音等を上下左右のHRに容赦なく放った。それが、舞台発表の第一歩とも言える、配役決めだった。（この段階で僕は監督になっていた）

「そこ、やかましい!!」 全部配役が決定するまで終らんぞ!! オー、お前これやってくれるか。サンキュー。

聞きづらい言葉が飛びかう中で、とうやく決定し終えたのは、夜九切。たクラブ員達が、ぼちぼち引き上げてくる頃だった。

脚本製作。午前七時の早朝、午後六時までの居残り。脚本係は非常に真面目で、ほとんど出席率百パーセントだ。たが、一ヶ所のセリフにまる一日費やしたり、図書室にての作業で少々脚本製作に関係が薄そうな本を読んだり、僕の所に生きている猫を持って来たりだった。僕も、この時の早朝は非常にこたえた。

次はキャスト練習。相変わらず早朝と居残りをする。夏休みに入り、出席率はますます悪くなった。それから非常にクラブ熱心なキャストには閉口した。また、九月になっても、あまりセリフを覚えていない人もいた。キャスト同士の雑談、やる気を出す為に数回開いたミーティング。果たしてどれだけの効果があっただろうか？

「俺、ごっつ真面目やで。」

の声も、言うのは無料や。このキャストが、本番に大成功するとは、誰が予想できたであろう。二学期からのキャストの努力には本当に頭が下がる思いだ。

その他、縁の下の力持ち舞台設定・効果係の方は、あまり見なかったが、照明は和気藹藹、円満にやっていたし、音響も金属的力でがんばった。中小道具の活躍入り乱れ果には斧、たが、金槌鋸三つの箱と、書が印象に残っている。衣装は生地に困ったらしく、HRのカーテンが衣装に変わったパブニングもあったが、出来ばえは上々。大道具の絵の具のやりくりや、角材が折れた時は肝を冷やしたが、いざ立ててみると、立派な物だった。

右の様な練習・製作も終わって当日。後は百パーセント実力を出しきれる様に祈るのみ!!

〔完〕

文集「なあ、みんな！ 2」（二年）より

④ 学園祭　学級劇「ベニスの商人」

6. 映画鑑賞

家庭にテレビが普及して多様な番組が送り込まれてくる生活環境の中にあるわけであるが、商業映画には、それ自体1つの作品として鑑賞される、テレビにはない側面と機能を備えており、生徒の内面にくい込む何かがあると思われる。よい作品を選定して、一斉に鑑賞させることは、生徒に感動を与え、情感を豊かにし、視野を広げるなど、学校の場で積極的にとり上げていくことは、意義のあることと考える。

学年	日　時	題　　名	場　　所	そ　の　他
1年	2月2日 (3.4.5限)	「マイウェイ Ⅱ」 「小さな赤いビー玉」	尾花劇場	映画館で興行しているものを借し切りにしてもらう。中2と合同で約300名、費用1人500円。
2年	2月8日 5.6限	「自転車泥棒」	本校　視聴覚教室	モノクロ、トーキー16㎜のフィルムを借り出して行う。 中3と合同で費用は折半した。 1人分約114円。
3年	12月3日 5.6限	「砂の器」	本校　講堂	カラー、トーキー、ワイド35㎜出張映写してもらう。 高1、中2と合同で費用は$\frac{1}{3}$ずつ。13万円×$\frac{1}{3}$ 1人323円。

映画鑑賞で1つの難点は、希望する作品を見ようとすれば、1学年では費用が高くつき、どうしても他学年と共同しなければならない事であろう。本校には16㎜映写機や、映画館には及ばないが上映できる講堂もあるのだから、これからも積極的に行事としてとり上げてゆきたい。次に生徒の感想を1年時の文集「なゞ　みんな」から抜粋しておく。

マイ・ウエイII

釣本　英

二月二日、木曜日、映画鑑賞。

この日、以前から楽しみにしていた『マイ・ウェイII』が見られるというわけで、私は期待して尾花劇場へと向かいました。映画は期待どおり　とても　いいものでした。私たちには、むずかしくて　わかりにくい部分もありましたが、それでも、新しい感動を覚えたことは確かです。そして、この映画で、私は　改めて　家族の愛情、信頼、つながりの深さなどを　知らされたような気がしました。

この物語は、実業家であり、また、マラソン選手である父親を中心に展開されていくのですが、あまりにも、完全主義者で、ありすぎたために、家族までが　ついていけなくなり、彼のもとを離れていってしまうのです。

『スポーツをやるからには、勝たなければ・・・』そう主張する父のきびしさに　ついていけなくなったのでしょうか？

でも、何よりも私が感動したのは　やっぱりラスト・シーンです。死を覚悟で　大陸横断マラソンに出場します。彼の息子も優勝候補の一人として加わっています。

回りが　とめるのもきかず、ただ自分の道をひたすら走りぬく、そんな姿に、今の私たちは　何か教えられたような気がしました。自分の信じた道だけを、ふりむかずにまっすぐすすむ、そんなことの大切さをしみじみ感じました。それから、息子は、2位を走っていましたが　途中、車にぶつかって、大幅に遅れてしまいます。でも、父親は、自分の身をぎせいに　息子に一位をゆずろうとするのです。ゴール直前になって　道路にたおれこんでしまった父は、息子に、

「お前が優勝するのだ。早く行け！」と　命じますが息子は父を見捨てずに、2人、助け合って　ゴールインします。ここにも　親子の愛情というものが　強く描き出されていると思います。

ゴールでは、家を出ていた彼の妻、娘、友人たちが あたたかく彼と息子をむかえ入れるのです。

彼から離れていった人々も、結局最後には、彼のもとに帰ってきます。バックには　有名な「マイ・ウェイ」が流れて　ラスト・シーンをいっそう感動的にしているようにも思えます。自分の道をつらぬくきびしさ、大切さ、そして家族の愛、これらのものが本当に強く表されていると思います。とにかく、この映画を見ての　私の感想は、ただ「よかった！」の　この一言に　つきるのです。

文集「な！　みんな」（一年）より

7. 仲間づくり

ホームルーム指導のポイントの1つとして前述のように、「集団活動を通じ、良い友人関係を育て、更に自主的な態度を養成する」ことを設定した。しかし乍ら、6年間一緒に過ごしてきた付属小学校出身（幼稚園が一緒の者は8年間）の50名と、その他の小学校から1～数名づつ集って来た85名とで1学年を構成していをわけで、小学校の延長のいくつかのグループとそれに入りこめないバラバラの生徒達と、なかなかまとまりにくい。このことから、入学直後に一泊行事が計画されているわけである。

しかし、より積極的に「自分」「なかま」を考えさせるために、いくつかのテーマを設定し、3年間で徐々に「なかま」の輪をひろげ、社会へと目を向け、考えさせるようにした。

学　年	月　日	内　　容
1	11月22日 12月1日 12月13日	映画「おもいやり」……映画鑑賞後、感想文を書かせ、級毎に文集を作成する。 映画「ささえあい」 映画「パラリンピック」
2	1月 2月1日 2月22日	作文宿題「差別について」……学年で数点選び、印刷。 生徒の作文プリント配布し話合い。 映画「差別と人権の歴史」
3	1月～ 2月21日	読書　中学生用「なかま」……1週間交替で読ませる。 講話　西門民江氏による。……講話後西門氏宛の手紙を書かせる。

〔註〕西門民江氏

明治45年、奈良県郡山に生まれる。詩人、詩集「ひとつのいのち」「峠の道（部落に生きて）」は部落の女性の一生を長編叙事詩風にまとめたものであるが、氏の自伝でもあり、同和教育教材として多くの人に強い感動を与えている。

1年……3回の映画鑑賞によって「おもいやり」「いたわり」等に目を向けさせ、考えさせようとした。全員の作文を級毎に文集にし、配布したが、その主な内容は、おもに次のようである。

- 社会生活における、「おもいやり」の大切さ。
- 「おもいやり」が、いかにむつかしく、勇気のいるものであるかということ。
- 「おもいやり」を持たない人への批判。
- 「おもいやり」を持った大人への共感。
- 自分の将来像について。

2年……なかまづくりを阻害している広い意味での「差別」について、自由に作文を書かせ、彼等の理解程度を知ると共に、生徒の作文を教材にすることとし、同和部の先生の協

力を得て、作文中数点を選び、印刷、配布、話合いの時間を持った。更に差別の現実を知るという事から、映画「差別と人権の歴史」を見せてまとめとした。

なお、生徒のあげた差別には次のようなものがある。

- 差別と区別について
- 身体障害者差別について
- 男女差別について
- 部落差別について
- 黒人差別について
- なかまはずれについて
- 職業差別について

以上のうち部落差別について書いた作文の内容は次のようである。

- 差別の実態について
- 差別についての疑問
- 自分達の時代には差別をなくさねばならないということ。

3年……2年に続いて差別についての理解を深めるために、中学生用「なかま」を1週間交替で読ませた。特に後半の「差別の歴史」についての文を熟読するよう指示した。

この頃、社会科（日本近代史）で部落差別について扱われ、西門民江氏の詩集を教材とされた。後西門氏あての手紙を書かされたところ、生徒の反響が以外に大きく、西門氏に会って直接話を聞きたいとの希望が多く、このことから社会科の先生の御尽力を得て特活の時間に西門氏の講演会を開くことに話が運んだ。

西門氏の話は、戦争体験をおり混ぜ乍ら、自分が受けた部落差別の現実を赤裸々に話された。講演後生徒に西門氏宛の手紙文を書かせたが、主なものは次のようである。

- 差別の中に生きた、西門氏の生きざまについての強い感動と尊敬
- 西門氏の講演についての深い感謝と、今後へのはげまし。
- 部落差別の実態を知っての驚き。
- 部落の人々への同情。
- 差別される側に立って考えるべきであるということ。
- 差別をなくすよう1人1人が努力すべきであるということ。

部落の人の生の姿を叙事詩として語りかけられ、生徒には非常に感銘深かったようである。平素雑談が多く静かにさせるのに一苦労するのに、この時ばかりは咳一つなく差別の苦しみと人間のいとおしさを、心の内面にしっかりと受け止めたようであった。

担任としては、なかまづくりを中心に、人権についての正しい理解を育てる事を目標として、努力したわけであるが、もっとも基本的・初歩的な「協力」「規律」という事でも、知識として知っていても、行動と結びつかず、他人のいたみを自分のいたみとし、積極的に差別を許さない人間を育てるということには程遠いものを感じた。特に3学抹で時間的余ゆうがなかったとはいえ、西門氏の講演から受けた強い感動をバネにこの学習を深め得られなかったことが、心残りである。

「差別」

中二B　安藤祥恵

小学校の時一人の女の子を、みんなでのけ者にしたことがあった。その人の周囲で何かが起こると、いつも悪いように受け取り、陰ではこそこそと、悪口ばかり言った。そして学級会。向こうが何か言えばこちらもすぐ言い返す。なかなか意見がまとまらなかった。が、私達の側から、

「夜遅く、雑談の為に電話をかけてくるので困る。」

という意見が出された時、ある人が、

「学校では、私達に相手にされないし、さびしくて、友達になって欲しくて、電話をかけたのではないだろうか。私達が理解してあげるべきだと思う。」

という、意味のことを言った。これがきっかけで、

「やはり私達の方が悪かった。」

ということになり、解決したのが、私は後になっても、あの時、のけものにされている側の気持ちをわかってあげたAさんを偉いなあと思い、また、「差別」というものを改めて考えるようになった。

この後、いろんな差別を学んだが、いつも、差別されている側の気持ち――「もし、私がこの人達のような境遇に生まれていたらどうだろう。辛くても、悲しくても、頼るものがなくて、一生、その苦しみを味わっていかなければならなかったら……。」ということ等――を、考えることによって、より身近に、差別を考えることができたと思う。そして、差別はいけないなあとつくづく思うようになり、また、まだまだ知らない部分の多い「差別」について、「今はどうなっているのか。」などということを知りたいと思うようになった。

差別

二年A組　小西宏育

ぼくは、この作文を書くように言われた時、差別なんて本当に自分達の身近にあるのだろうか、と思った。しかし、考えていると、自分自身のことのように思えてきたのである。「差別」と「区別」という言葉は、似ているように思えるが、実は全然意味が違う。「区別」とは、違いによってわけることであり、「差別」とは、差をつけることである。

今の中学生ぐらいの人達、つまりぼく達の思春期の反抗というものは、自分を独立したものにする、つまり自我の確立を得ようとする一種の立派な手段なのである。見るからに体格も立派になった彼らが、親に反抗するというのは、親の世話、外からの支配からのがれ、また、自分を子供としてではなく、一人の人間としてみてもらいたいからであろう。

しかし、親の側からすれば、まだまだ世話をみてやっているのに……まだまだ子供じゃないか……となるのは、大人と子供を区別しているのである。

これを子供のほうからすれば、大人は子供を差別している……ぼくたちは一人の人間なのに……となるのである。そして、これらがかみあわないから、子供の態度が反抗となって現れるのであろう。

差別というのは、このような差別から、部落差別などの社会的問題となり得る差別までいろいろある。しかし、やはり差別というものはなくしていきたい思う。そのためには、おたがいに、他人を知り、そして、考えることが必要になってくる。

差別をなくすということ、それは、二、三十年後に日本を背おっていくぼくたちに課せられた課題の一つではないだろうか。

8. 文集作り

1年間の生活の記録として文集を作ろうという計画が1年時の三学期に考えられ、2年、3年と続けられ、生徒達の成長のあとを綴ることができた。

学年	題　　名	内　　容	費用・その他
1年	「な／ みんな」	中学1年生の学校生活を記録する。1人1項目を分担する。 入学・学校行事（体育大会・学園祭・写生会・球技大会・観劇・遠足・音楽会）学年行事（一泊行事いも作り・百人一首・映画・耐寒訓練）授業・クラブ	150部159,000円、非常に高くつき全額個人負担出来ないので学校から援助してもらった。（印刷・製本とも業者にさせた為） 文集作りが始めてなので、編集方針や編集上の技術的なことで大変であった。1人1人の書いた文と筆跡もそのまま残るので皆が苦労した。
2年	「なあ みんな／2」	学校生活を記録するとともに、特集「中学2年生」を組み、2年生の考えや生活を知ってもらう為に学校生活、家庭生活の中から自由に題材を選んで書くこととした。約$\frac{1}{3}$の人が、この特集に執筆している。	150部66,825円、本文の印刷を大学の機械で印刷してもらい製本を業者に外注した為安くできた。 2年目なので、執筆する各個人も慣れて来て、編集方針も特集を組むという線がでてきた。
3年	「なあ みんな／3」	中学最後の学年だからという事で題材を自由に選ぶ事で編集、特集「自分とは何か、友達」 思い出（水泳訓練、クラブなど）その他、3年間の思い出の写真を10頁加えた。	150部165,385円、写真を入れて印刷したので高くついた。本文の印刷は前年同様大学の機械で印刷してもらう。製本と写真組版は業者に外注した。 3年目であるのではとんど生徒達だけで進行した。

文集委員の選出から始まり、原稿用紙の印刷発注、編集会議、項目と執筆の分担、下書き、清書と進めるのだが、全員が執筆するので文集委員は大変であった。

これらの文集は生徒にとっては友達の考えを知ったり、自己の反省資料になったりするし、親達にとっては、他の同学年の子供達の考え方や学校生活を理解する上に役立った。系統立てて学校生活を生徒の眼で記録しておくことは、生徒にとってよい思い出になるであろう。何よよりも生徒にとってよい財産ではないかと考える。

中三での文集作成に当った文集委員のメモを抜粋し、製作のあとを追ってみる。

◦文集の内容

一人一人の文集
- 特　集 …… 10 P　　☆扉の表ーイラスト
- 思い出 …… 30 P　　裏ー文章
- その他 …… 40 P　　☆空白部分の イラスト書いてくれる人

◦写真のページ
◦うちあけ話・10年後の自分　　各３Ｐくらい
◦日誌・目次
◦編集後記

◦役割分担
- ◦特集 …… 釣本・福山・安藤・大野・石井
- ◦思い出 …… 土肥・渡辺
- ◦その他 …… 武田・堀内・丸上
- ◦編集後記・表紙 …… 村上
- ◦写真のページ …… 柏井・先山
- ◦日誌・目次 …… 中間・守屋
- ◦うちあけ話 …… 全員

◦これからの日程

2／5（火）　下書用紙を渡す
6　↓
7
8（金）　下書き回収（だいたい）
9（土）　下書き最終回収→分ける
⑩（日）
⑪（月）　各自で修正をする
12（火）
13（水）　清書期間
14（木）
15（金）　清書集める→分ける
16（土）　編集会議

☆非常に急ぐので、なるべく早目に何事もすること！
9日に下書きを忘れた人は、放課後残って書いてもらい、12日に絶対もちこさないこと！

⑤ グループ活動　文集作り

9. 共同作業

「道徳」の時間を教室の中だけに終らずに、身体を動かし、共同で作業し、何かを作っていく中で、種々な事を体験させ、お互いの中から良い点を学びとるとともに、作品が完成する喜びが味わえるものを何かさせよう。頭の中だけに終らず身体からしみ込むものを計画しようと考えた。

1年　さつまいも作り、　花壇作り、　玉ねぎ作り

2年
3年　グループ活動

① さつまいも作り

プール西側の雑草の生い茂る空地を利用して、さつまいも、大豆、とうもろこしを栽培することとした。

5月19日　関墾（草の苅りとり、石ころとり）全員で行う。

6月2日　いも苗植え、大豆、とうもろこし播種。

7月14日　雑草が茂る、どこにいも苗があるか判らぬくらい。除草する。

10月6日　二度目の除草。

11月8日　いも掘り、全員で行う。非常に小さなものも加えて約31kg収穫する。
植えた苗に比べて少なく、期待に反して生徒もがっくり。

11月24日　いもの収穫祭、調理室をかりていもを蒸す。

11月29日　いも作りの反省会。

1人に1つは大きないもを／と始めたが、畑地としての悪さも手伝って収穫量が悪かったのは残念である。雑草、石ころとりの開墾作業、水やり、除草、いも掘り等作業量が多く、全員が同時に行えてよいが、中1の始めとしては、担任ともどもくたびれた作業であった。大豆、とうもろこしは小鳥に喰われたり、鹿の浸入で畧、あやうくいも苗もなくなってしまう所であった。生徒の感想文に見られるように、さつまいもの収穫量、味など結果の良くなかった事も手伝って、作業のしんどさだけが残ったようだ。

畑地、道具等の条件を整えてやれば意味のある行事であると思う。この栽培作業は我々が考えていたほどに生徒は興味を示さず、追い立てるのに苦労したというのが実感である。

〔苗150本　1,800円　　収穫量約31kg（150kgとれるはずのところ。）〕

ちょっと失敗した いもづくり

野口 進

ぼくたちが、中学になって初めて つくったいもは、あまりおいしくなかった。

夏の暑い日に、水やりもし、草とりもしたのに、できたものは、ちょっとだけとはさびしいなあ。

先生たちが、いもの苗を買って来られた時 ぼくは、「中学校ではいもなんか栽培しなければならないのか」と、びっくりしていました。

どこでつくるかと思っていたら、草ぼうぼうの、プールの近くの荒地でがっかりしました。

小学校の時は、もうちょっとましな所で、植物の栽培を、していたからです。

H・Rの時間や道徳の時間を利用して、一年全員で荒地の開墾、苗植えは、しんどくていやでした。

しばらくして水やりの当番が決められ、プールの水をバケツでくんでいったり、長い長いホースで水を送ったりした時は、

「いもづくりなんかどうしてやらないとだめなのか」と、うんざりでした。

そう思っていても少しは、

「どんなのができるのかなあ」

と、楽しみに思ったこともありました。

そうしているうちに、とうとういもほりをする日が、来ました。

みんな手分けして小さいスコップなどで、土を掘って行きました。ぼくは、家でいも掘りをしたことがあります。店で売られているようなもの、二倍も三倍もあるようなジャンボなさつまいも、虫に食われて、ぽっかり大きな穴のあいているものと、いろいろ出ました。その時を思い出しながら どこにビッグないもがあるかとさがしました。が、A組が取ったのは、小さいものばかり。B・C組は 大きいいもでいっぱいだった。

ぼくの思ったとおり、あんな所でいもなんかつくったから、こんなのしか取れなかったんだ。始めからやめておけばよかったのに。

女子が調理したいもは、あまりおいしくなく、少ししか食べませんでした。あんな、小さくて 変ないもが、おいしいわけがありません。

けれどもぼくは、まずいもでも、いもには変わりない。自分が始めてつくったいもなんだから、おいしくて大きいいもなんて最初からは無理なんだと、改めて感じました。

このいもづくりを通して、ひゃくしょうの人は、どれだけ苦労しているか、はっきりわかったような気がしました。

文集「な！ みんな」（一年）より

② 1年　花壇作り

中庭、生徒ホール前南側に生徒会が設置してくれた花壇スペース（中1は東側$\frac{1}{3}$）に球根類を植栽することとした。

10月13日　青竹でフェンス作り。植物の名札作り。

10月20日　植えつけ。

生徒が家庭から持ち寄った球根類と学校で用意した水仙、百合、チューリップ、ムスカリ等（購入費6,500円）を植えつける。

翌春美しい花をつけたが、チューリップだけは鹿のえさになってしまった。2年になって生徒会の役員が改選されると、いつの間にか花壇が再編成されてしまい、折角植えてあった球根類も行方不明。今年も花が見られると楽しみにしていた生徒達もがっかり、指導がゆき届かず学年と生徒会の連絡が不充分であったのが残念である。

父兄から青竹の寄贈をうけたり、竹の運搬を用務員さんにお願いしたりして種々協力してもらったが、継続してゆけば良い効果が得ほれたのではないか。

③ 1年　玉ねぎ作り

いも作りにこりずに、今度は講堂北側の空地に玉ねぎを栽培する。

11月24日　畑地整理、畝作り、苗うえつけ（いもの収穫祭の準備と平行して行う。）

150本　1250円

翌年6月に収穫。（この間に、生活委員を中心にして除草を2回行う。）玉ねぎは大小とりまぜ1人1個ぐらいであった。

植えつけ面積、作業量が少なく、学級単位の作業としては成り立たないので、しだいに一部の生徒に分担させることになってしまう。時期も考えて平行してできる作業（作物と畑地）が必要であった。

④ グループ活動

1年生に引き続いて、共同で作業するプログラムを組むこととし、2年学園祭終了後から音楽会の練習と平行して行うこととした。

① グループで共同してできるものを決めること。② グループは学級をこえて学年にわたって組んでよいこと。③ 3年まで続くグループであること。等を話してグループ分けを行った。

2年　11/16　グループ編成　　11/30　グループ毎の話し合い　　1/11 作業を始める。

3年　11/26　グループ活動について再検討する。　　1/24、1/31、2/7 グループ毎の作業

最初グループ分けした時には「ばら園を作ろう。」「望遠鏡を作ろう。」「日時計を作ろう。」「花時計を作ろう。」「実のなる木を植えよう。」「噴水を作ろう。」「8㎜映画を作ろう。」「葉ぼたんを栽培しよう。」「小鳥の巣箱を掛けよう。」等いろいろなプランが出たが、次のように落ちついた。

「ベンチ作り。」42名（校庭の種々のベンチを作る。）「樹木を植え育てる。」6名（校庭に種々の苗木を植える。）「日時計作り。」40名（種々な形の日時計る作る。）「室内装飾を作る。」32名（教室に服掛けなどの装飾を作る。）「バラ園を作る。」12名（校庭の一部にバラを植える。）と決った。グループ毎に計画を立てさせるとともに、担任の方でも指導を分担した。「バラ園」「樹木」のグループが、バラ苗木6本、きんかん1本を植えただけで、他のグループは計画を立てただけで2年は終ってしまった。

3年になって、再検討した結果、これからの日程のこともあって、次のグループに再編成した。

グループ名	人数	内容・その他
1. ゴミ箱作り（男子）	7	廊下に置く、大きな丈夫なゴミ箱を作った。色が赤、緑等できつい色だが、分厚いベニア板で丈夫に出来ている。
2. ポール作り（男子）	6	運動場の端にポールを立てる。棒を立てるのに苦労した。最初はカッコよく風見鶏をつけるつもりが、着色した棒に終った。
3. 室内装飾作り（女子）	5	アメリカンフラワーを作って教室に飾る、計画だけで終りごろやっと幾つかできた。
4. 雑布作り（女子）	8	実用的な雑布を作ろうとした。ロッカールームの落し物のタオル等を洗濯して用い、約30枚ほど作成した。
5. 文集作り（男、女）	15	苦労したが3月1日の卒業式に間にあった。
6. テレビ映画作り（男子）	8	「刑事もの」の脚本を作り、V.T.Rで白黒のテレビ映画を作った。編集に苦労した。カラーで作りたかった。
7. 〃（男子）	4	自分達で映画を作りたいと脚本までは出来たが、出演してくれる人がなく、そのうちに時間切れになり企画倒れになってしまった。残念である。
8. ロッカールームの整理（女子）	3	女子ロッカールームの乱雑さを整理して使いよくしようと持主不明の物や台などを利用者に呼びかけて整理した。少しは使いよく、きれいになった。
9. お菓子作り（男、女）	18	県下の受入れ施設に来ているベトナム難民の子供達にお菓子を作って慰問に行った。ボートで漂流した時の話なども聞き感激した。「御所紀行記」として写真入りで廊下に掲示し皆に伝えた。
10. 高校の制服研究（女子）	6	本校の中学生、高校生、父兄等約2,300人から高校制服についての意見をアンケートし、自分たちの直面する高校での制服か、自由服かの疑問をぶつけてゆき、標準服にしたらどうかという自分たちの意見を確めている。
11. トイレのカーテン作り（女子）	4	布切れを集めてパッチワークによって女子トイレの窓にカーテンを作った。女子トイレが外から見えていやだったのが、これで解消した。パッチワークはしんどかったが出来上ってうれしい。
12. 日時計作り（男子）	6	犬型にデザインした日時計を作った。台座のコンクリート流の型枠作りがむつかしかった。出来上った日時計は均時差も計算して作ったが少し合わないので残念。

グループ名	人数	内　容・そ　の　他
13. 日時計作り（男子）	6	太陽高度も同時にわかる日時計を作った。銅板を切ったりするのに技術の先生に手伝ってもらってやっと出来た。
14. カンボジア難民救済の校内募金（女子）	10	カンボジア難民救済の校内募金をし、毎日新聞奈良支局を通じて役立ててもらう事にした。自分たちのカンボジアについての勉強不足だったことが残念であった。皆の協力が得られたのは金額の多少によらずうれしかった。
15. モザイク画作り（女子）	11	卵の殻に着色し、モザイクの作品を 90 ㎝×120 ㎝ のものを３枚作った。メルヘン調でいい出来ばえだと思っている。計画通りの日程でできずにあとあとまで延びた。
16. ベンチ作り（男子）	9	ベンチを作ろうと材料まで用意したが、管理が不充分で材料がどこかわからなくなり、計画倒れになってしまった。
17. 服掛け作り（男子）	5	教室にラワン材で彫刻の飾りをした服掛を作ろうとして、材料を用意しておいたが、管理が不充分でどこかわからなくなり、そのまま終った。

いずれも３学期から実際の作業にやっと入ったという具合で、完成が高一になってからというのもあった。卒業後の春休みにも作業したグループがあった。

全体を通じてみると、３年時に再編成した事でより広い範囲に汎って題材が選ばれるようになったのは良かったと思う。反面、楽な作業、早く仕上がるものを選定するグループも現れた。また、⑨の「お菓子作り」はベトナム難民に眼を向け、対外的に働きかけるよい機会となり、貴重な経験であったと思う。⑭の「カンボジア難民救済募金」にも同じような事が言えよう。⑮の「モザイク画作り」のグループの時間をかけた根気のいる仕事で作品を仕上げたのは、感心させられた。成功したグループもある反面、⑯、⑰のグループのように、教師側の指導もゆき届かぬ所もあって、完成せずに終った所もあり、３人の担任で、これだけのグループを見てゆくしんどさを感じる。

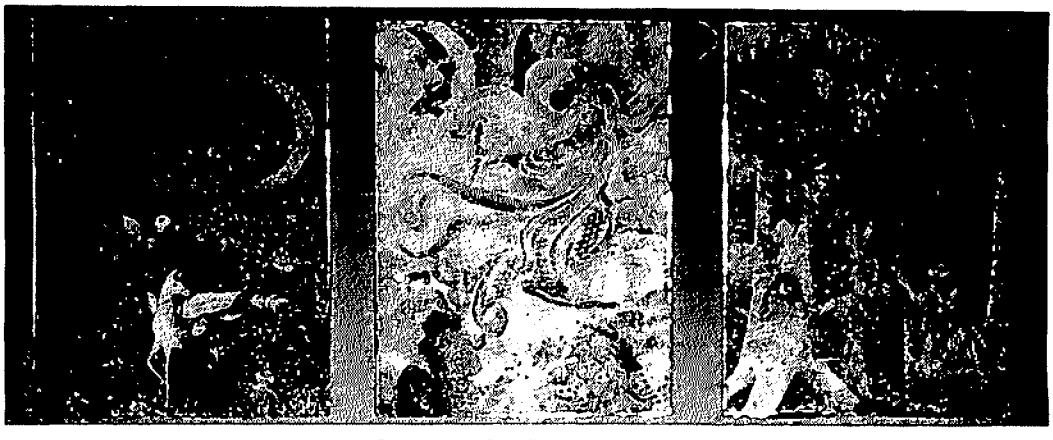
総じて言えることは、全体的に受け身の姿勢が強く、行動に移すのが遅いと思う。これはこの作業プログラムだけではなく学園祭にも見られたことである。

グループ活動の総括を行う予定が出来ず、高一になって新担任の指導でやっと４月に総括の発表会をしてもらい種々迷惑をかけ、見通しの甘さを感じている。

材木（コンパネ、外材、杉材、ベニヤ板）　セメント（４袋）等　16,750 円
ペンキ、刷毛等　3,820 円
銅板（1200 × 60 × 1.5）　17,800 円　　ラワン材、金具　1,640 円
フラワー材料　2,000 円
菓子作り材料　6,418 円　　その他　約 20,000 円
（中１の時、シェル科学コンテストに入賞　学校費２万円をこれに当てた。）

⑥ グループ活動　日時計

⑦ グループ活動　ベトナム難民施設訪問



⑧ グループ活動　モザイク画作り

10. おわりに

各学年の「特活」の1時間は木曜日5限目に一斉のクラブ活動としていることは先に述べた通りであるが、他の「特活・道徳」につき、各学年でどのように用いたかを概観すると、左表に見られるように、中1で$\frac{1}{4}$が、中2、中3では$\frac{1}{2}$が、それぞれ学校行事（注）の準備と反省に使われており、一方、作業時の時間が少ないのは、放課後に行われた事を示している。

内容＼学年	1年	2年	3年
実施時間数	59	22	25
学校行事の準備と反省	17	11	13
作業	9	4	4
学校生活についての話し合い	9	3	3
レクリェーション	6	2	1
耐寒かけ足	6	0	0
その他	12	2	4
学校行事等に使われた時数	12	16	11

また、「特活・道徳」のうち、学校全体として一斉に行う学校行事の使われた時数は中2では$\frac{2}{5}$にもなる。これは木曜日に集中して学校行事が持たれた為である。

（注、学校行事とは、学園祭、体育大会、球技大会（年2回）、春・秋の遠足、中学写生会、音楽会、中1の一泊行事、中3の水泳訓練、観劇会、高2の修学旅行をいう。中学での修学旅行は実施しない。）

この3年間の「特活・道徳」の取り扱いの特徴をあげるならば、①文集を3年間続けて出したこと、②中3でグループ活動をしたこと、③「なかま」作りを中心にすすめたこと、の3点であろう。これらを実施するについては、1年当初から毎週定期的に担任会を持ち、生徒についての情報交換や、行事については前年度の例を参考にしながら、ねらい、仕事の分担等を決めていった事は仕事を進めてゆく上で非常に良かったと思っている。

研究紀要　第22集

昭和56年6月30日発行

発行者　奈良女子大学文学部
附属中・高等学校
奈良市東紀寺町1－60－1
TEL　0742（26）2571

編集　研究調査部